
魔法少女リリカルなのは ～時の旅人～

英雄の墓標

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ー時の旅人ー

【Nコード】

N6973H

【作者名】

英雄の墓標

【あらすじ】

それはあったかも知れないIFの物語・・・・・・・・
・・・・・・・・栗色の髪の少女は魔法と出会い非日常を知る・・・・・・・・
・・・・・・・・黒髪の少年は理想を掲げ前に進む・・・・・・・・
・・・・・・・・金色の髪の少女は栗色の少女達
に出会い心を開いていく・・・・・・・・
・・・・・・・・車椅子の少女は少年と出会い暖かさを知った・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・一人の少年が介入し織り成す物語・・・・・・・・

ストーリー

P r o l o g u e (前書き)

どうも初投稿です！！駄文ですが大目に見てやって下さい・・・
・・・・・・・・・・後、オリキャラが嫌いな方を見るのをオススメ
しません。・・・・・・・・・・では、始まり始まり～

P r o l o g u e

それは誰しも一度は想うとてもありふれた願いでした

そのありふれた願いのため少年は過酷な道に身を投じることを決意しました

少年が視たのは悲しい結末

手にしたのは折れない理想

失ったのは大切な人達との絆

果たして少年の願いは叶うのでしょうか

どうか少年が目指す未来に幸多からんことを

魔法少女リリカルなのは
　　＼時の旅人＼

始まります

・

第1話 始まりはやっぱり突然に・・・なの

朝・高町家

午前4時

子供が起きるにしては少し早い時間。小鳥の囀りが聞こえ始めた頃

???の自室

この部屋が目覚まし時計から女性の声が流れ始める。

“朝ですよ♪10秒以内に起きないと母さんが着せ替えさせ――
――”

ピッ

言葉が終わらない内に目覚まし時計のスイッチが押される。それはもう神速の速さで・・・

そして、ベッドからモソモソと一人の少女・・・・・・・・否、見間違えるほどの少年が姿を現した。

「ん　ん・・・・・・・・朝か。　しかし、いい加減目覚まし時計を替えたいな」。毎朝背筋に鳥肌が立つ」

んしょ、と声を上げながらベットから起き上がり、軽く体をほぐす。

この娘・・・・失礼、この子名前は高町　ファイア

流れる夜空ように深く長い黒髪と蒼天のように蒼い空色の眼

整った顔をしている少年で、この物語の主人公である。

ファイア「・・・・・・・・・・・・・・・・なんか少女って言われたような気がする」

不機嫌な言葉を発しながら着替え始める。

そして着替えを終え、日課である道場での鍛練に向かった。

ファイア「ふう・・・・・・・・さて、始めるか」

二刀の木刀を構え精神を集中させ振り始める。流れるような動作を徐々に速くしていく。

しばらく木刀を振っていると足音が聞こえて来た。

？「おはよう♪フィーちゃん。今朝も早いね」

？？「やってるな」

？？「おはよう、ファイ」

剣を振るのを止め入口の方に体を向けると姉の高町 美由希、兄の高町 恭也、父の高町 士郎が立っていた。

ファイ「おはよう。美由姉、恭兄、父さん」

恭也「相変わらず凄いな、お前は。」

美由希「本当だよね・・・私、そんな動き出来ないもん」

ファイ「そんな事ないよ、美由姉も練習すれば出来るようになるよ。」

・・・ところで美由姉、今何時？？」

美由希「えっとね、私がここに来る前に時計を見た時5時だったから、多分5時30分だと思うよ」

フィア「んっ わかった。 美由姉、ありがとう」

美由希「（／／／／）」

お礼をしながら笑顔を浮かべるフィア。その無垢な笑みに美由希は慣れるはずがなく頬を赤く染める。

フィア「どうしたの?? 美由姉。顔、すごく赤いけど大丈夫??」

美由希「――――っ!! なんでもない……なんでもないの（か 顔が近い ／／／／）」

フィア「??? じゃあ、俺は朝食の手伝いに行くけど何かリクエストある??」

恭也「俺はとくにないな」

士郎「私もないな」

美由希「私は甘〜いだし巻き卵がいいな♪ ああふわふわ甘甘がなんとも言えないんだよね〜」

何とか平静を取り戻した美由希だが今度は料理の味を思い出してうつとりしている。

フィア「んっ わかった。 じゃあ、一時間くらいで切り上げて帰って来て??」

士郎「わかった」

恭也「了解」

美由希「あの絶妙なだしの量やみつきに————」

一人だけトリップしているがそこは気にしてはいけない。

家に帰りシャワーで汗を流す。そして、学校指定のブレザーに着替えたフィアは台所へ向かう。

台所に着くと一人の女性が既に調理を始めていた。

フィア「おはよう、母さん」

???「あら、おはよう フィア」

俺の言葉に心良く返事を返してくれた女性の名前は高町 桃子。
俺の母さんで喫茶翠屋の菓子職人、俺を着せ替え（女装）させよう
ところ以外は優しい人だ。

桃子「ファイア、あなた失礼なこと考えたでしょ」

ファイア「・・・・・・・・」

訂正、鋭くて逆らえない人だ。

桃子「沈黙は肯定と取っていいのかな。 フフッ、後でどう着せ替えさせようかしら」

ファイア「ま 待って母さん。俺は何も考えてない 考えていないよ。だから女装だけは・・・・・・・・」

まずい、マズすぎる。また女装なんてさせられたら俺の男としてのプライドが・・・・・・・・

桃子「そんなプライドはドブに捨ててしまいなさい」

ファイア「なんで、思っていること分かるの!?!?」

桃子「・・・・・・・・ニコッ・・・・・・・・まあ、ファイアの着せ替えは確定として、調理を進めましょう」

ファイア「俺の話しを聞いてー!?!?!」

あれ、なんだか前がはつきり見えないや。景色がぼやけてる。

・ ・ ・ ・ ・
いない、泣いてなんかいないぞ。そう、これは汗。きつと汗なんだ。
あのあと、母さんにわざと水をかけられて女子の制服なのではないに着替えさせ
られたけどそんなの関係ない。本当に関係ないことだ。

恭也「なあ、あれほつといていいのか?？」

恭也の視線の先には、部屋の隅で女子の制服を着て体育座りのフィ
アがいた。

桃子「いいの。あれはあれで可愛いでしょ♪」

美由希「確かに・・・」

恭也「・・・・・・・・・・・・・・・・否定はしない」

士郎「・・・・・・・・・・汗（・・・・愁傷様）」

フィア「どうせ、どうせ俺は――――」

メソメソ泣いていると、ぱたぱたと足音が近づいて来た。

Side ????

♪♪♪♪♪

高町家の一室から音楽が流れだした。

??? 「ん・・・ん」

布団を頭から被っている人物が音の発信元・・・の携帯電話に手探りで手を延ばす。しかし、まだ覚醒はしていないのか携帯電話をベッドから下に落としてしまった。

♪♪♪ ピッ

布団から手を延ばし今度は携帯電話のアラームを消して起き上がった。

???? 「ふぁゝあ・・・変な夢見ちゃった・・・」

この少女の名前は高町　なのは。栗色の髪のツインテールが特徴的な小学3年生になる高町家の末っ子である。

なのはは背伸びをして制服に着替え始めた。

そして、台所に行くとい隅で体育座りをしている少年が目に入った。

なのは「おはよう、ファイお兄ちゃん」

ファイ「ああ、おはよう　なのは。今日はちゃんと一人で起きられたのか。　こりゃ午後から雷雨だな」

なのは「酷いよファイお兄ちゃん。まるで私がいつも起きてないみたいじゃない!!!!」

ファイ「実際、いつも俺が起こしにいつてるだろ・・・・・・・・・・
後、この格好の事は何も言わないんだな・・・・・・・・・・」

なのは「だって、日課でしょ???」

私がそう言うとファイお兄ちゃんはガクツという擬音が聞こえるくらい肩を落とした。何で????

桃子「おはよう、なのは♪　朝食が冷めるから席に着いて。　ほら、ファイも・・・」

なのは「は〜い♪」

ファイ「……………はい」

こうして、いつも通りの（？）朝が始まる。

S i d e なのは E n d

ファイ・なのは「行ってきます!!!」

桃子・士郎・恭也・美由希「いってらっしゃい!!!」

食事が終わって学校へ登校するための準備も終わり、家からバス停までの道のりでなのはが今日見た夢の話をしていた。

なのは「—————それでね、最後に力を貸してって聞こえたんだ」

ファイ「ふ〜ん。じゃあ、それが本当だったら助けてやらないとな!!!」

なのは「うん♪」

と言い終わると同時にバスが来た。

運転手に挨拶をしてバスに乗り込むと、

??? 「なのはちゃん、ファイくん。こっちこっち!!」

バスの奥の席から俺達の名前を呼ばれる。

なのは「すずかちゃん! アリサちゃん!」

すずか「おはようなのはちゃん、ファイ君」

アリサ「おはよう」

紹介するでしょう。先ず先に挨拶してくれたのが月村 すずか。紫がかった長髪にヘアバンドを付けている子で、とてもおしとやかな女の子だ。

次に挨拶をしてくれたのがアリサ・バニングス。金の長髪で後ろ寄りの左右に小さなツインテールにしている子で、活発……言い言うなら————

ファイ「——ツンデレ??」

途端に、横から衝撃がきた。

アリサ「あんたね、朝会って初っ端からその言葉……?」

ファイ「あれ?? 声に出てた??」

アリサ「・・・・・・・・・・はぁ・・・あんた、本当タチ悪いわ」

なのは「すずか「あ、あはははは・・・」

時間は進んで朝のホームルーム

先生「ファイア君、その格好は――――」

ファイア「気にしちゃダメです」

先生「その格好――――」

ファイア「気にしないで下さい」

先生「・・・・・・・・・・可愛いですね」

ファイア「うああああああん」

ガタン

ガラガラガラ

ピシヤン

ダダダダダッ

廊下には泣き声が数秒間響き渡っていた・・・

・・・・・・

先生「さあ、出席確認をしますよ」

生徒達「はい！！！」

何事もなかったように始める先生と生徒達。これはきつとイジ・・・

なのは「イジメじゃないなの♪」

・・・・・・作用ですか

余談だがフィアは昼休みになるまで帰って来なかったと言う。

昼休み

俺、なのは、アリサ、すずかは屋上で昼食を取っていた。

なのは、アリサ、すずかはどうやら将来の事を話しているらしい。

すると不意になのはから声を掛けられた。

なのは「フィアお兄ちゃんの将来の夢って何??」

なのはに話を振られた瞬間、すずかとアリサの目付きが変わったような気が……

フィア「んゝ……今の所とくにないな。しいて言うなら翠屋のマスターかな。」

アリサ「なんか普通ね……」

すずか「ちよつと意外かな??」

なのは「私はいいと思うけどなゝ♪」

なんで意外なのかは疑問だが、聞くと嫌な答えしか返ってこないと思うので黙っておく。

その後、アリサがなのはを説教し、すずかがオロオロしていた。

ああ、平和だ……

学校が終わり下校の途中

なのは「（自分に出来る事と、出来ない事・・・か）」

ファイア「（昼休みの事を考えているんだろうな。考える事は大事だし、そつとしておこう。でも、なのはは一人で抱え込むから気をつけないと・・・）」

それぞれが考えごとをしているとアリサが話題を振ってきた。

アリサ「ねえ、今日のすずかドッチボール凄かったよね！！！」

なのは「うん、格好良かった♪」

すずか「そんな事ないよ／＼／」

二人の言葉にやや照れるすずか。

フィア「いや、とても良い動きをしていたぞ」

すずか「い いや、それならフィア君だって・・・／＼／」

フィア「俺と比べるのはダメだぞ。まあ、凄かったぞ!!」

そう言ってすずかの頭を撫でると、すずかは顔を赤くしながらも気持ち良さそうに目を細める。

照れてるのか??

なのは・アリサ「むう~~~~!!」

激しく勘違いをしているフィアの隣では頬を膨らませている二人が居た。

フィア「・・・どうした??:?」

俺がきくと、

なのは・アリサ「知らない!!!」

そっぽを向かれた。

・・・・・・なんでさ

しばらく進むとアリサが小走りで少し先にある林の中に続いている道の前に行き、塾への近道があると言う。

俺は塾には通っていないので三人と別れ、喫茶店の手伝いに向かった。

夕食時

なのは「と言う訳で、フェレットさんを家で預かれないかな?？」
「？」

なのはが俺と別れた後、林の中で傷ついたフェレット・・・・・・・・

フィア「フェレットって何?？」

俺の言葉になのは、恭兄、美由姉が同時に崩れ落ちる。

俺、変な事言った????

恭也「鼯の仲間だよ」

恭兄が苦笑しながら教えてくれた。

フィア「そうなんだ。俺は別に依存はないぞ」

恭也「同じく」

美由希「私も♪」

桃子「なのはがちゃんとお世話出来るなら良いわよ」

士郎「だそうだよ。なのは」

なのは「うん♪ありがとう!!!!」

俺達と父さん達が了承しフェレット?・・・と言うのを飼う事を決定したら、なのははとても嬉しそうに顔を綻ばせる。

桃子「じゃあ、冷めない内に食べましょう♪」

美由希・なのは「ハイ♪♪」

士郎「桃子、サラダを取ってくれるか???」

恭也・フィア「俺も!!」

桃子「はいはい♪」

心落ち着く食卓だ

・・・着せ替えさえなければな

夜

俺は自室で勉強をしていると廊下からドアの開ける音と慌てて階段を下りる音が聴こえる。

窓から外を見るとなのはが慌てて走って行くのが見えた。

ファイア「（あいつ、何やってんだ???）」

俺は不信に思い、なのはの後を追った。

[illegible]

何だこれは???

なのはに迫いついて、俺が見た光景はあまりにも現実離れしていた。

壊れた病院の壁

なのはの後を追う元凶であろう黒き獣

黒き獣を見た瞬間、頭が痛み始めた。

カチリ
カチリ

齒車の噛み合わせようとする音が頭の中で響く。

ファイア「（ぐう！！頭が．．．．．なんだ．．俺はあれを知って．．いる．．．．．ジュエル．．シード．．．）」

カチッ

頭の中で何かが噛み合った．．．

脳裏に大切な情景が浮かぶ．．．

???
“ ”、行つては駄目です！！」

???
「約束、約束だから！な！！」

???
“ ”、必ず帰って来て．．．．．」

???
“ ”」

???
“ ”、我らはずっと待ち続けます。だから．．．．．
・」

ファイア・???
「また巡り会おう（会いましょう）」

ファイア「(そうだった・・・・・・・・俺はのために・・・・・・・・..
・・・・・・・・・・だが、その前にあれをどうにか
しないとな)」

俺は再びなのはの後を追った。

S i d e なのは

私は助けてと言う声が聞こえたので、病院の方へ行ってみるとフェレットさんが夢で見た黒い獣に襲われていました。

私はフェレットさんを抱え、走りながらフェレットさんにきくと・

フェレット「君には資質がある。　お願い・・・僕に少しでも力を貸して!!」

資質やら力やらと答えてきました。

なのは「資質?？」

フェレット「僕はある物を探して“この世界”に来ました。」

フェレット「でも・・・僕一人だけじゃ想いを遂げられないかもしれない・・・だから、迷惑とは分かっていますが、資質を持った人に協力して欲しくて・・・」

そう言い、私の手から飛び下りると・・・

フェレット「お礼はします、必ずします!! 僕の持っている力を貴女に使って欲しいんです!!! 僕の力を・・・魔法の力を・・・!!
」

現実では無く小説や漫画に出て来る言葉・・・“魔法”と答えるフェレットさんに私は「まほう???」と答えていると、頭上から獣のような声が聴こえたので振り向いて見ると・・・

獣「グオオォー!!!!」

と襲い掛かって来ました。

私は避けられないと思い目をつむりました。

ですが、いつまで経っても衝撃がきません。

恐る恐る目を開けると、目の前にいた筈の黒い獣は無く大好きなお兄ちゃん・・・ファイアお兄ちゃんがいました。

S i d e なのは E n d

ファイア「怪我はないか??？」

大丈夫だとは思うが心配の声を掛けておく。

なのは「あっ・・・!! うん、大丈夫!! ありがとう。・・・」
ファイアお兄ちゃん、どうしてここに??？」

ファイア「ん?? なのはが外に行くのを見かけてな・・・そ
れより、あれは何だ??？」

あれが何かは知っているが知らない振りをする。

なのは「私も何が何だか……」

ファイ「とりあえず、俺が足止めしておくから、なのはは逃げろ」

なのは「そんなの駄目だよ!! 危ないよ!!」

ファイ「大丈夫、俺を信じろ」

俺はそう言い、なのはの額に軽くキスをして黒き獣の方へと向かった。

Side なのは

お兄ちゃんに額にキスをされて私の顔はとっても真っ赤になります。／／／

だってあんな風に笑いながら……その……キスとは反則だよ!!!! ！！／／／

なのは「ってそうじゃなくて、どうするの!?!」

フェレット「これを!!」

フェレットさんは持っていた宝石を、私に渡してきました。

私はそれを受け取ると・・・

なのは「暖かい・・・」

フェレット「それを手に・・・目を閉じて心を澄ませて。僕の言う通り繰り返して・・・!!!!」

フェレットさんが真剣な表情をしているのを見て、私は意を決しました。

フェレット「良い???行くよ!!」

なのは「うん!!!!」

フェレット「我 使命を受けし者なり」

なのは「我 使命を受けし者なり」

フェレット「契約の元 その力を解き放て」

なのは「えと・・・契約の元 その力を解き放て」

ドクン

宝石が心臓みたいに鼓動をする・・・

フェレット「風は空に　星は天に」

なのは「風は空に　星は天に」

フェレット「そして不屈の心は」

なのは「そして不屈の心は」

なのは・フェレット「この胸に・・・！！この手に魔法を！！！！レ
イジングハート、セットアップ！！！！！！」

RH『Stand by ready set up』

宝石・・・レイジングハートから女性の声が聞こえると同時に、空
に向かい桜色の光を放出しました。

なのは「な、　な～！！」

フェレット「なんて魔力だ・・・」

フェレット「落ち着いてイメージして、君の魔法を制御する魔法の
杖の姿を！！そして君を守る強い衣服の姿を！！！！」

なのは「そ、そんな事急に言われても・・・えと、えと」

なのは「とりあえずこれで！！！！」

イメージを決めた瞬間に眩しい桜色の光に包まれ、光が治まると・・・

・

フェレット「成功だ!!」

なのは「ふえっ!!　ふええゝ　うそゝ!!!!　な・・・何これゝ!」
?

服がいきなり変わって驚いてパニックになってしまったがお兄ちゃんが戦っているのを思い出してフェレットさんにきく・・・

なのは「これで大丈夫なの??」

フェレット「はい!!　行きましょう!!!!」

なのは「うん!!!!」

私はフェレットさんと一緒に、お兄ちゃんが向かった方向へと走り出した・・・

S i d e なのは E n d

獣「グオオオオオー！！！！」

俺が獣の方に向かうと、獣は俺に襲い掛かって来た。

俺は獣の攻撃を避ける、避ける、避ける。

獣は当たらない事に苛立っているのか攻撃を大振りにしてきた。

ファイア「動きが単純過ぎる。本当に獣みたいだな・・・」

俺はその攻撃をかわし獣の腹に拳を数発連続に入れる。

その瞬間、黒き獣は吹っ飛び壁に当たって多少うめき声が聞こえるが動かなくなった。

ファイア「（物理的攻撃が効く奴だったからよかったが、魔法攻撃しか効かない奴の場合魔法を使うしかないか・・・）
・・・はあ　まあ、何とかなるか」

これからの事を考えていると、なのはと鼬モドキがこちらにやって来た。

しかも、なのははBJを着ている。

なのは「お兄ちゃん、あの黒い獣は???」

ファイア「ん？あの変なのか??それならあそこに・・・」

俺は動かなくなった獣を指差す。

なのは「ええー!! お兄ちゃん倒しちゃったの〜!!!!」

フェレット「そんな、魔法も使わずにどうやって?..?」

鼬モドキが俺に聞いてくる。

俺はあくまで魔法を知らない一般人のように装い.....

ファイ「うん?? この鼬、喋れるのか??」

鼬弄りを始めた。

フェレット「い、いや その、これは——」

鼬の顔がどんどん青ざめていく。 面白い♪

ファイ「最近の動物は喋れるのか〜 凄いな〜」

フェレット「あの、僕はロボットでして・・・」

ファイ「ん、ロボットなのか〜」

そう言いながら、鼬を強く握る。

フェレット「ち、ちよっ!! 内臓が飛び出る!!!」

俺の手の中でじたばたする鼬。 もっと強く握れば本当に出るのかな
???

なのは「ファイお兄ちゃん!! 駄目だよ、そんな事したら!!!」

強く握ろうとした瞬間なのはに鼬を取られてしまった。 チツ・・・
運がいい奴め！！！！

その後、ジュエルシードを封印し、パトカーのサイレンが聞こえたので慌てて帰路に着いた。

なお、鼬の事や獣の事は内緒にしてくれと、なのはと鼬モドキ（ユノ）に言われた。

家に戻ると、そこには満面の笑みの悪魔（桃子）が着せ替え用（メイド服）の服を持って待っていた・・・

俺は咄嗟に逃げようと身を翻したが、時既に遅し・・・・・・・・
恭也、美由希、なのはに逃げ道を塞がれていた・・・・・・・・

ファイア「って、なのはも???」

なのは「お兄ちゃん、ファイアお兄ちゃん・・・ごめんね?? 私も着せ替えしたいの!!!!」

ファイア「裏切り者・・・・・・・・!!!!!!」

その日、町中に叫び声が響き渡ったという・・・

ああ、不幸だ・・・

終

第2話 それは精神的疲労なの!?

翌朝

ファイア「ん んゝゝ・・・・・・・・・・まだ眠い」

俺はいつも通りの時間に起きた。何故眠いのかというと、昨日の家に帰った後の出来事・・・・・・・・・・いや、忘れよう。あんな記憶二度と思い出したくない。

「はぁー」とため息をした後、自分の現在の魔力量を確認する。

ファイア「・・・・・・・・・・はぁ・・・・・・・・」

あまりの魔力量の少なさに再度口からため息が漏れる。

魔力の質だけでいえばSSSランク・・・・しかし、魔力の保有量は

良くてCランク、悪くいえばDランクの魔導師以下の量。魔力の平均値は約45万だ。しかも、デバイスが無いのでできるのは身体強化と部分障壁、あと設置型魔法陣による足場の補助のみである。

まあ、スキルの“障壁破壊者”（バリアブレイカー）があるだけましな．．．．．

ファイア「あれを解除するか．．．???．．．．．
駄目だな．．．．．解除したら“ ”まで持たない。それに鼬モドキも気付くだろうしな）．．．．．現状維持だな」

俺は思考を切り替えベッドから下る。そしてブレザーに着替え、台所に向かう．．．ちなみに今日の鍛練は休みだ。今日は昨日の罰として朝食と弁当を作らなければならないからだ。

なのは少し怒られただけで、俺はメイド服と朝食と弁当作り．．．．．なんか理不尽だ。

俺は本日三度目となるため息を吐きながら朝食と弁当作りを開始した。

ファイア「よし、こんな所か!!!」

高町家の食事は基本的に洋食が多いので俺が作る時はほとんど和食にしている。そして、今日のメニューは炊き込みご飯、豆腐とワカメの味噌汁、だし巻き卵、ぶりの照り焼きだ。何故今日もだし巻き卵を作ったのかというと、昨日美由姉の分だけ作ったら、母さんとなのはに文句を言われたからである。ちなみに恭兄と父さんの物には砂糖の代わりに醤油を入れただし巻き卵にした。

弁当のメニューも和食にしてある。メニューはふりかけご飯、肉じゃが、ひじきのお浸し、豚の生姜焼き、味噌茄子・・・等比較的バランスのよいメニューにした。

弁当箱に詰め時計を見ると、7時を示していた。

ファイア「(やっぱり、朝食と弁当を別々に作ると時間が掛かるな)」

そう思いながら、テーブルに料理を置いてゆく。

時刻は7時30分。そろそろ食事をし始めなければバスに乗り遅れるであろう時間なのだが、一名席に着いていない者がいる。

皆さん、誰だかお分かりでしょう。そう、高町　なのはだ・・・

ファイア「（昨日言った傍からこれか・・・）なのはを起こしに行ってくる」

そう言い、階段を上りなのはの部屋に向かう。

扉をノックし、10秒ほど返事を待ち、扉を開ける。

部屋に入るとすやすや寝ている愚妹と、必死に起こそうとしている鼬モドキがいた。

ユーノ「なのは、起きないと遅刻するよ」；；；」

なのは「・・・ん」く」

うん、とりあえず・・・

ファイア「鼬モドキ、その起こし方は間違いだ。」

鼬モドキが「何、そのモドキって！！　僕にはちゃんとユーノって言ーーー」とか言ってるが、まあどうでもよい。俺はなのはの耳元に近付き息を吸い込む。そして・・・

ファイア「起きろ、この愚妹がーーー！！！！」

と叫んだ。

なのは「――――にゃー!!? 何!! 火事ー!!!!」

ファイア「いや、朝だ。早く着替えないと遅刻するぞ」

横で耳?を押さえている鼯モドキを掴み部屋から出る。その後、なのはの「遅刻ー!!!!」と言う叫び声が家中にこだました。

ユーノ「た、大変だね・・・」

ファイア「・・・もう慣れたよ。」

今俺は廊下で鼯モドキと話しをしている。

端から見たらただの痛い子に見える――

ファイア「黙れ」

・・・

ユーノ「いきなり黙って、どうしたの??」

ファイア「なんか言わないといけない気がしてな。それより、今後の事なのだが俺も極力手伝うよ」

ユーノ「なっ!! 魔法が使えないのに危ないよ!!!! やめた方がいい

い」

ファイア「大丈夫だ。手伝うと言っても、なのはと鼬モドキの護衛くらいだ。それに俺は一応なのはの兄だからな」

ユーノ「一応??」

ファイア「俺、爆発事故の時父さんと父さんの知り合いを庇って大怪我を負ったらしいんだ。その時、頭を強打したみたいで過去の記憶が喪失して、行く宛のない俺を父さんが引き取ってくれたんだ・・・」

ユーノ「・・・・・・・・ゴメン、嫌な事聞いて」

ファイア「気にするな。俺は今は幸福だと思っているからな」

父さんや母さん、恭兄、美由姉、なのは、アリサ、すずか。いろんな人達が支えてくれたから。

俺には眩し過ぎるくらいの暖かさをくれたから・・・・・・・・

ユーノ「・・・・・・・・いいよ」

ファイア「いいのか!!」

ユーノ「その気持ちは痛いほどわかるから」

そう言って鼬モドキは自身の事を話してくれた。何でもスクライヤと言う一族に拾われたらしい。

ファイア「じゃあ、俺達は似た者同士だな!! 仲良くしようぜ!!」

ユーノ「うん!!」

ファイア「俺の名前は高町　ファイア。よろしくな!!」

ユーノ「僕の名前はユーノ　スクライヤ。よろしく!!」

俺とユーノは軽く握手した。(もちろんユーノは鼯のまま)

ユーノ「ところで早速お願いがあるのだけど……」

ファイア「ん? 何の?」

ユーノ「寝る時とお風呂の時、ファイアと一緒にじゃダメかな?」

ファイア「構わないけど、どうしてだ?」

すると、突然ユーノは顔を赤くして手をあたふたしだした。

ユーノ「なな、な　なのはがいるからだよ!!」

ファイア「……成る程。わかった、寝る時とお風呂の時な」

そういう事か。ユーノ、お前も昨日は大変だったんだな。

俺とユーノは会話を終えリビングに向かった。

時間は進んで夕方

朝食の評価は上々だった。余程美味しかったのか美由姉やなのはが俺のおかずを取ろうとしてきて苦勞した。

途中、恭兄がなのはにおかずを渡さないのを見て鬼いちゃんモードになりかけていたので冷や汗をかいた。

鬼いちゃんモードの恭兄を止めていたら、学校に行くのが昼からになる。

もちろん昼食の時もだ。アリサは「ちょっとぐらいいいでしょ!!!」と言い、すずかは「ゴメンね」といいながら、おかずを取っていた。

というか何故俺ばかりなんだ??

俺は今、母さんに言われて買い出しに行った帰り道だ。

無事目的の卵と味醂を買い終え、ぶらぶらと道を歩いていた。

横断歩道に差し掛かった時、対面から少女がスーパーの袋を膝に乗せ、慣れた手付きで車椅子を動かしていた。

ファイア「(あの年で車椅子に乗っているのか・・・それにあの慣れた手付き、何年もその生活を余儀なくしているのだろう。可哀相に・・・)」

そう思いながら少女の側を通り、横断歩道を渡りきると、後ろから「キャッ!！」と言う少女の声が聞こえた。

ファイア「???」

なっ!？」

振り返ると、先ほど擦れ違ったばかりの少女が車椅子から落ちている。

そしてなにより、すぐ側までトラックが迫っていた。

ファイア「くそっ!!そこから動くなよ!!!!」

身体に魔力を回す。

今の俺が使える数少ない魔法『身体強化』

足に力をこめる。

トラックを止めるのは不可能

時間は掛かるしリスクも高い

飛ぶような勢いで少女の元へと踏み込み、多少強引に車椅子を外す。

???「へっ???っ!!?」

少女が痛みに顔を歪めるが、心配している時間がない。

フィア「悪いが、今は我慢してくれ。それと、舌を噛むから話さない方がいいぞ」

??? 「ひゃっ!？」

少女を抱えるようにして持つ

投げる?？」

否

工程に無駄が多い

少女を庇うように転がり、横から迫ってくるトラックを避ける。

フィア「くっ!!!」

??? 「きゃっ!？」

機械的な排气音

トラックは止まる気配すらなく走り去った。

S i d e { . ? . ? . }

??? 「ありがとうございますー!!」

周辺の建物と違い、一際清潔そうな白い建物。

『海鳴総合病院』という名は即ち、この町にある唯一の総合医療施設。

その入口から一人の少女の元気な声が響く。

??? 「今日は本当にごめんなさいね、はやてちゃん」

はやて「いえ、ホンマに気にせんといて下さい。石田先生も忙しいのは分かっていますから」

石田「・・・でも」

何かの約束が反故になってしまったのであろう。石田と呼ばれた女医は、申し訳ないようにはやてと呼んだ少女に頭を下げる。

はやて「ええんですって。ほら、早く戻らんと他にも石田先生に診てもらいたいと思とる人はおるんですよ?」

石田「・・・じゃあ、今回の分は次回まで取っておいてくれ

る???」

はやて「はいな♪次回は楽しみにさせてもらいます!!」

石田「ふふふ、じゃあはやてちゃん、また今度ね」

はやて「石田先生も無理せんといってくださいね!!」

そう言っではやては石田に手を振り、病院から家へと続く道を車椅子で進んで行った。

はやて「晩御飯の材料も買うたし、後は家に帰るだけやな」

病院からの帰り道、ふと冷蔵庫の食材が少なくなっていたのを思い出し、寄ったのは近場のスーパー。わりとよく利用するお店

はやて「♪♪♪♪♪ あれ???」

家までもうすこしと迫った交差点で、何となく横断歩道を渡った所にいるポニーテールの少女に目がいった。

いや、少年か少女か見分けがつかない。髪の毛の長さからいうと女の子なのだが、服装が妙に男の子っぽい。

しばらく見ていると・・・・・・・・

はやて「（銀色の髪???）」

見間違えかもしれないが、少女?の髪が一瞬銀色になったような気がした。だが、それも瞬きをした後には黒色に戻っていた。

はやて「（見間違えやろか???）それにしても、見た事ない子やな。あんなに綺麗な子やったら忘れへんやろし・・・・・・・・」

アイドルのように整った顔立ち、濁りのない黒髪、そして蒼色の目。

同じ年ぐらいにも関わらず、纏っている雰囲気は不思議な感じがする。

そんな事を考えながら、はやてはゆっくりと横断歩道を渡り始めた。

はやて「つとと・・・あれ?？」

横断歩道も終わりに差し掛かった時、不意に車輪がその動きを止める。

はやて「んっ・・・・・・・・あれ???おかしいなあ。どないしたんやろ?？」

もう一度力を入れてみるが、車輪は動く気配をみせない。

はやて「??・・・・・・・・ホンマにどうしたんや???さっきまでちゃんと動いとったのに・・・・・・・・よっ!ほっ!」

更に二・三回動かなくなった車輪に力を加えるが、一向に動かない。

はやて「むうくく、不良品やったんか?この車椅子・・・」

ぶつぶつと愚痴を言いながらもその手は力を入れ続けている。

しかし、車輪は一ミリたりとも動かない。

はやて「・・・・・・・・ああ・・・・・・・・ん?？」

ため息をつき、右の車輪の所を見ると何か黒いものが見えた。

はやて「よっ・・・・・・・・なるほどな。石がひっかかったんやな。」

少し前屈みになりよく見てみると、右の車輪に石がひっかかっている。

はやて「はあゝ、ホンマに故障しとったらどないしよかと思ったわ
ゝ」

そう言つて石を取るために、更に前屈みになった時にソレは起こつ
た。

はやて「よっ・・・・・・・・なっ!? キヤツ!!!!」

自分で思つていたより前屈みになっていたらしい。

車椅子がバランスを崩し、派手な音をたてて倒れてしまった。

はやて「痛たたた、やつてもうたかあゝ」

ちょうど横に倒れたのが幸いした。

肘や腕に擦り傷はあるものの、得に目立った傷はなかった。

しかし、その体勢故に気が付かなかった・・・・・・・・
・

―――背後に迫っているトラックに―――

はやて「ほっ!!.....はあ、アカンなあ」

足に引っ掛かっている車椅子を退けようと力をこめる。

だが、どうも体勢が悪いのか上手く力が入らず動かない。

はやて「もう一回!!!!」

再び力をこめた腕で車椅子を押す。

はやて「~~~~..やっぱりアカンなあ」

少しでも動いてくれればよいのだが、車椅子は全く動じない。

はやて「誰かおらんか.....あっ!!」

誰か通らないか辺りを見回すと、視界に先程すれ違った少女?が見えた。

しかし、明らかに様子がおかしい。

こちらを見て驚きの表情を浮かべている。

はやて「?..?..? どないしたんやろか?..?」

助けてほしいという願いよりも、何故か少女？の表情が先に立つ。

はやて「・・・って、今はそれどころやあらへん！！！」

現状を思い出したはやては、少女？に声をかけようとした瞬間・・・

優しい風と、少しの痛みを感じた。

はやて「へっ???っ!!!？」

???「悪いが、今は我慢してくれ。それと、舌を噛むから話さない方がいいぞ」

先程、横断歩道の向こう側にいた少女？。

しかし、一瞬の間に目の前に移動していた。

そして、少々強引に車椅子をはやての足から引きはがす。

はやて「(な、何や今一瞬で・・・)」

???「少し我慢な??？」

はやて「は、はい!?! わひゃ!!!!」

急に告げられた一言に、頭で理解するより先に返事が出る。

混乱するはやてに対して、少女？ははやての体を横抱きにして抱えた。

そして・・・・・・・・・・

少女？はそのまま真っ直ぐ歩道の方へ、肩から飛んだ。

はやて「・・・・・・・・ツ!!」

???「・・・・・・・・くっ!!!!」

『ブロロロロオオオオ!!!!!!』

はやて「(なっ!?! トラック!!!! ひょっとして私・・・・・・・・
ひかれそうになってた・・・・・・・・??)・・・・!!!!」

Side　　ゝはやてゝ　End

記憶が戻ってから、厄介事に巻き込まれるな……

フィア「大丈夫だったか!？」

そんな事を思いながら、俺は少女に心配の言葉をかける。

???「ふえ???…ああ、大丈夫大丈夫」

フィア「そうか……ならよかった」

見た所、擦り傷以外目立った怪我はないし、意識もはっきりしている。

それに、取り敢えずトラックに当たってもいなさそうだ。

ホッと、安堵の息が漏れる。

すると、目の前の少女が遠慮がちにこちらを見上げている。

???「……あの……」

フィア「??どうした？」

???「えっと、名前教えてくれへんかなあ??？」

フィア「ん??ああ、俺は高町 フィアだ。フィアと呼んでくれ」

???「了解や!!フィアちゃんやな!!!!」

ファイア「・・・・・・・・俺は男だから、ちゃんは止めてくれ」

何となく予想はしていたが、やはり言われると凹むな。

???「男やったんか!? そんなに綺麗やのに」

ファイア「・・・・・・・・ああ、みんなから言われるよ・・・」

俺は体育座りをしていいじいじでした。

???「・・・・・・・・あはは。じ　じゃあ、ファイア君って呼ぶな。ほな、うちの名前は八神　はやて。ひらがな三文字では・や・て、や。うちもはやてでええよ」

八神はやて

疾風
はやて

迷っている時、くじけそうになった時、何処からともなく背中を押してくれる力強い風。

そんな事を考えながら、はやての瞳を真っ直ぐに見つめる。

ファイア「“はやて”か・・・・・・・・うん、この名前は君によく似合っている」

はやて「なっ!? フィツ、フィフィ　ファイア君!!!!」

十人中、九人が見惚れる穏やかな笑み。

免疫のないはやてが赤面するには十分な威力のようだ。

はやて「あう・・・・・・・・え、えっと・・・・・・・・その・・・」

フィア「はやて・・・落ち着け」

はやて「う、うん」

胸に手を当て大きく深呼吸を二回ほどしてくれた。

はやて「・・・・・・・・あの、助けてくれてありがとう。フィア君がおらんかったら、うち冗談抜きで死んどったわ」

フィア「いや、俺は当たり前の事をしたまでだ。助けがほしいと思った人がいたら、助けるのが当然だろ??」

はやて「でもフィア君が助けてくれたのは事実やから・・・・・・・・ホンマありがとうな」

フィア「ああ、はやても無事でなによりだ。女の子が傷を作っちゃいけないもんな。それがはやてみたいな可愛い子だったら尚更だ」

はやて「・・・・・・・・あう」

はやて「（か、可愛い・・・・・・・・あかん、フィア君と話しとったら心臓が持たんわ）」

はやてが赤面するその横では鈍感男?が首を傾げていた。

フィア「はやて、この家でいいのか?？」

はやて「うん。ごめんな、フィア君。家まで送ってもらって」

フィア「気にするな。俺がやりたいからやっただけだからな」

先程のトラックによるはやて轢き逃げ未遂。

それによりはやての車椅子は残骸へと変わってしまった。

そんなかわいそうな少女をフィアがほって置けるだろうか?？」

無理に決まっている。

はやて「でも、フィア君何か用事あったんちゃうの?？」

フィア「いや、ちょうど用事が終わった後だったしな」

まあ、正確には卵と味噌もはやてを助けた時に割れたから持つて帰る意味がなくなったのだが、言わなくていいだろう・・・

そして今、俺とはやてははやての家の前にいる。

はやてに何度も丁寧に断られたのだが、強引に押し切った。

第一、歩けない上に車椅子がないはやてを見捨てられる訳がない。

ちなみに、初めフィアがはやてを運ぼうとしたのはお姫様抱っこ。

しかし、はやてが顔を赤くして抵抗したので、現在ははやてはフィアの背中越しから顔を出している。

フィア「じゃあ、はやて。鍵を開けてくれ」

はやて「了解や!!」

“ガチャ”という音と共にドアが開き、二人ははやての家へと入っていた。

フィア「取り敢えずソファーに下ろすぞ」

はやて「うん。車椅子は明日知り合いの人に持ってきてもらおうわ」

フィア「・・・そうだな。出来るだけ早い方がいいだろう」

このままでは、はやてに出来る事がないに等しい。

日常生活をする以前に、その場から動くのも難しいだろう。

俺ははやてに救急箱の場所を聞き、はやてが怪我をした所を治療する。

そして、はやてに電話を借り母さんに事情を話した。

桃子「・・・・・・・・そうなの、それはよいことしたわね」

フィア「俺は当然の事だと思うぞ」

桃子「そんな事ないわ。普通、自分が死にそうになるような事をしないわ。だから、もう少し誇りなさい。それと怪我はなかった?？」

フィア「・・・ああ」

本当に優しい母だ。俺は高町家に拾われてよか――――

桃子「ところで、頼んだ卵と味醂はどうしたの?」

――背筋が震える。何故だろう??

フィア「・・・・・・・・・・・・はやてを助けた時に割れました」

桃子「そう・・・・・・・・・・・・家に帰ったら着せ替――――」

フィア「お願いします。それだけは、それだけは……」

メイドは嫌だ、バニーは嫌だ、俺は……俺は、俺は男だ――――！！！！」

はやて「（フィア君が壊れた！！？）」

突然、発狂しだしたフィアにはやては少し引いていた。

桃子「……まあ、今回は別の事にしましょう。少しはやてちゃんに代わってもらえるかしら？？」

フィア「ありがとう、ありがとう母さん。僕は幸せです！！！」

今だ戻って来ないフィア。正直、キャラが変わりすぎである。

桃子「……やっぱり着せ――――」

フィア「と言う訳ではやて、俺の母さんがはやてに用があるんだって。」

はやて「どういうくだりでそうなったんや！！？うち、めっちゃ気になるんやけど！？？」

フィア「はやて、そんな野暮な事聞くなよ。ほら……」

やれやれといった表情で受話器をはやてに渡し傍観に徹する。

数十分後、はやてが受話器を置いた。そして、俺に笑顔で……………

はやて「ファイア君、今日はうちの家で泊まる事なったでなく♪」

爆弾発言を囁ましてきた……………

その後、色々と説得したが「帰ってもええけど、セーラー服が待つとるそうやで」の一言で俺に逃げ道などないのを理解した。

ファイア「……………ところではやて、晩御飯はどうするんだ??？」

はやて「せやなあゝ……………こればかりはしゃあない、晩御飯は抜きやな」

ファイア「む……………ダメだぞはやて。ちゃんと三食栄養あるものを食べないと」

はやて「でも、車椅子がないわけやし……」

趣味である料理が出来なくなったはやては残念そうに俯く。

その様子で俺がする事は決まった。

ファイア「よし。今日は俺が晩御飯を作る。はやて、冷蔵庫から適当に材料を使うぞ?」

はやて「ふえ? でもそんなファイア君に悪いし……」

ファイア「はやては気を使い過ぎだ。もっと人を頼れ」

はやて「……ほんならお願いするけど、ファイア君料理出来るの?」

その一言が料理魂に火を付けた。

ファイア「よかろう、最上級の料理を作って見せてやろう!!!」

はやて「(ファイア君の口調が変わった!?!?!?)」

後にはやては語る。

あれは台所という名の戦場に向かう戦士(主夫)のようであったと・
・・・・

フィア「出来たぞ、はやて」

はやての晩御飯を作ると言って30分。

近くの椅子に座ったはやてとの話し相手をしながら簡単でありながら、味付けにこだわった料理を作った。

作ったものをご飯の入った丼に寄せ、再びはやてを連れて居間に戻る。

フィア「簡単なもので悪いけど、味は保証する」

はやて「・・・・・・・・確かにメツチャ美味しそうな親子丼やわ」

はやて「（・・・・・・・・というか、なんで料理が光るんや・・・・・・・・？）」

料理を作っている時から何故か光を放つ食材達にははやても苦笑が浮かぶ。

しかし、それをスルーしても目の前にある一品が美味しいだろうとというのが分かる。

彩りのある食材達は視界を楽しませ、鼻を擽るのは美味しそうな、そして懐かしい香り。

これは絶対に不味い訳がない。

はやて「（あれ・・・??）」

はやては気付いた。フィアの前に井がない事に。

はやて「なあ、フィア君のは？」

フィア「???・・・ああ、俺はいい。はやてが全部食べてくれ。おかわりもあるから遠慮するな」

はやて「それはアカン！！うち一人で食べるんは味気ないし・・・フィア君も井によそって一緒に食べよ！！！」

期待を込めた視線

純粹な瞳は見る者を魅了する魔法のように。

フィア「いや、それははやての為に作ったんだ。はやてが食べていいんだぞ」

はやて「せやから一緒に食べてくれへん???」

フィア「でも・・・」

はやて「フィア君、お願いや・・・」

潤んだ瞳で見つめてくるはやて。

その瞳に対抗手段は存在などしないだろう。

フィア「わかった。もう一膳持ってくる・・・・・・・・・・（その顔は反則だろ）」

怖ず怖ずと台所に戻ると井にご飯と具を乗せ、箸を一膳持って居間へと戻る。

鼻歌を歌いそうな程ご機嫌なはやての下へ戻って行った・・・・・・・・

夕食後

親子丼は、そこまで多く作っていなかったので綺麗さっぱりなかった。
った。

今はリビングで料理について談笑している。

はやて「フィア君は和食の他に作れるんや?」?

フィア「一応、和、洋、中、全部作れるが、和食以外はレパートリーが少ないぞ」

はやて「いや、レパートリー少なくとも十分凄いと思うで」

フィア「そうか??・・・・・・後、家が喫茶店だからデザートも作れるぞ」

俺がそう言うのと、はやては目をキラキラ輝かせ始めた。

やはり女性は甘い物が好きというのはデフォルメなのだろう。

はやて「・・・・・・・・なあ、フィア君。お願いがあるんやけど・・・・・・」

フィア「・・・・・・・・何となく予想出来たよ。わかった!!今度、作って持ってくるよ!!」

はやて「ホンマか!!ありがとう!!」

満面の笑みを向けてくるはやて。

フィア「(・・・・・・・・これは頑張らないとな)」

その笑みにフィアは、よりはやての期待に応えようと思った。

既に日が落ちて辺りが暗くなった頃。

フィアは目を擦っていたはやてを自室のある二階へと運んだ。

フィア「その部屋でいいんだよね?？」

はやて「うん、あっとるで」

フィア「・・・っと、じゃあ開けるぞ?？」

はやて「OKや!」

はやての了承をもらい、扉を開ける。

部屋の中は女の子らしく可愛いらしいぬいぐるみが、タンスの上に並んでいる

はやて「ほんならベッドに下ろしてくれるか?？」

フィア「・・・・・・・・」

はやて「フィア君?？」

フィア「や あた の しい」

本棚の一カ所

明らかにこの『正常な』部屋とは不釣り合いな鎖で繋がれた本。

そこにフィアは目を向けている。

そんなフィアに不機嫌になるのはこの家の主

背中に背負われたまま動けない少女。

はやて「フィア君!!」

フィア「うわっ!?! どうしたんだはやて」

はやて「・・・フィア君が下ろしてくれへんと動かれへんねんけど
??」

フィア「ふえ??? わ、悪い。今ベッドに下ろす!!」

はやて「むう」

はやての機嫌を損ねたことに後悔しながら、ベッドに下ろす。

はやて「なあ、フィア君。さっき小声で何言うと思ったんや?」

フィア「んゝ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ただの
戯言だ。気にしないでくれ」

はやて「そう言われると気になるやん。教えて!!」

フィア「いや、だから――――」

はやて「すゝ　　すゝ　　」

フィア「・・・・・・・・・・はあ。やっと寝付いてくれたか・・・」

結局、フィアがお気に入り之歌を歌う事を条件に追求するのをやめてもらった。

そして歌が気に入ったのか歌詞を書いて欲しいと頼まれてしまった。
ため息をして横を見ると、そこには幸せそうな笑みを浮かべるはやての姿がある。

ずっと一人だったので人肌が恋しかったのだろう

損ねたはやての機嫌を直す為に一緒に寝る事を強制された。

フィア「（・・・・・・・・・・まあ、こんな笑顔が見れたならいいか）」

まるで赤子のように安心仕切った表情をしているはやて。

ファイ「（今日、偶然会ったばかりの奴が何を言うかと君は笑うかもしれないが、これは“ ”なのだと思う・・・）」

ファイ「（・・・だから、俺は君にうるさいくらい世話を焼かせてもらおう。）」

ファイ「（ “ ” だからな・・・）」

ファイは決心し、眠るに着いた。

翌日

俺とはやては朝食を取った後、やはり不便なので車椅子を取りに病院に向かった。

代金ははやての両親の知人が払ってくれるらしい。

そして、はやての家に帰り身仕度をする。

フィア「じゃあ、俺は手伝いがあると思うから帰るよ!!」

はやて「ゴメンな。いっぱい迷惑かけて・・・」

フィアはむっとした表情をして、はやての頬つぺたを軽く抓った。

はやて「フィ、フィア君!!!!」

フィア「あのな、はやて・・・その言い方は間違えだぞ。

俺は全然迷惑だと思っていない。――――」

フィア「―――家族だからな」

はやてはキョトンとした後、目尻に涙を溜めながらとぎれとぎれに、

はやて「家 族 。 うちと フィア君 が???」

フィア「なんだ、俺じゃあ不満か??」

はやて「うーうん、そうじゃなくて・・・本当にええの??」

フィア「当たり前だろ。まあ、昨日会ったばかりの奴が言っても嬉しくないかもしれないけど・・・」

そう言った瞬間、はやてはフィアに抱き着き泣き始めた。

数分後

はやて「ゴメンな、服濡らしてし——」

フィア「はやて、言う言葉が違うぞ」

フィアははやてが言い切る前に遮る。

はやては「あっ」と小声を漏らした後、笑顔で

はやて「ありがとうな」

と言った。

フィアはその言葉に満足し笑みを浮かべ

フィア「どういたしまして」

と答えた。

そして、はやてに一枚のメモ用紙を手渡す。

フィア「俺の携帯の電話番号と、昨日の歌の歌詞だ。いつでも連絡してくれ」

はやて「うん、ありがとう」

フィア「じゃあ、また今度」

はやて「またね!!!」

フィアははやて家を後にした。

翠屋に着き、手伝いをするためにエプロンを付けようとするが、エプロンがない。

代わりに何故かチャイナ服が置いてある。

冷や汗が滝のように出てきた。

生き残る（逃げる）ために足を踏み出そうとした瞬間、肩を掴まれた。

錆びたネジの如くギギギギと頭を動かすと

桃子「言葉通り“別の事”にしたわよ♪だから――――」

桃子「――――OK??」

満面の笑みを浮かべ、凄い握力でフィアを掴む母（悪魔）の姿があった。

フィア「ふにゃあ――――！！！」

・ ・ ・ ・ ・ 今日も海鳴市は平和？ ですか？

終

第3話 猫かわいい!!!、なの♪

ある満月の夜

マンションの屋上・・・

二つの影が在った・・・

その二つの影の一つは黒き衣服に身を包み・・・

内側が朱く外側が漆黒のマントを纏い・・・

その手には漆黒の斧型の杖・・・

斧の中心に金色の宝石・・・

宝石と同じ髪の色を靡かせる少女がいた・・・

「???」
「ロストログアは・・・この付近にあるんだね・・・」

まだ幼い声

しかし、その声にはただならぬ決意を籠めているように感じる。

そんな少女を見守る様に佇むもう一つの影・・・

オレンジ色の身体・・・

額には青に近い紫色の宝石・・・

その影は明らか人ではなく獣・・・・・・・・いや、狼に見える・・・

??? 「形態は蒼い宝石。一般名称ジュエルシード」

??? 「グルル・・・」

??? 「そうだね・・・直ぐに手に入れるよ」

??? 「ウオオオオオーン!!!!」

狼の遠吠えが町に響き渡る・・・

これから始まる・・・

哀れな人形劇の幕を上げるように・・・

同刻

人気のない静かな公園・・・

その公園の中心に近い場所・・・

突然、前触れもなく一つの影が現れた・・・

影は白きローブを体全体に纏っている・・・

顔にもローブと同じ白色のターバンを巻いていて、その姿は白一色・
・

性別は疎か（おろか）顔さえもわからない・・・

身長だけで言えば、およそ9歳か10歳ぐらい・・・

影は上を見上げ、月を見たまま静止・・・

??? 「似ている魔力反応が二つ・・・・・・・・片一方は使い魔だな・
・・・・」

感情の一切感じられない無機質な声が風と共に消える・・・

??? 「・・・さて、どうなるのやら・・・」

やれやれといった仕草をしているのだが、やはり声に感情が籠っていない。むしろ、わざと感情を殺して言っているようだ・・・

影は半刻ほど月を眺め・・・

忽然と姿を消した・・・

翌朝

高町家のリビング

ファイア『聞こえているか?? ユーノ』

ユーノ『うん、バッチリ聞こえているよ』

俺は今ユーノと念話の練習をしている。

しかし、第三者の視点から見るとフェレットと戯れているようにしか見えない。

ファイア「（まあ、練習しなくても出来るけどな）」

心の中で少し苦笑する。

ユーノ『そう言えば、なのはが何か準備しているようだけど、どこか行くの???』

ファイア『んん?? ああ、今日はさすがの家に行くんだよ。ユーノもな』

ユーノ『そうなんだ・・・って僕も!?!』

予想外の発言に「キュッ!!」っと鳴くユーノ。

ファイア『なのはから聞いていないのか??!』

ユーノ『・・・いや、全く』

ファイア『・・・まあ、今日はそういう予定だから』

ファイアとユーノが戯れているリビングから見えない死角。

カシャ カシャツ

美由希「はぁ〜・・・フイーちゃん可愛いー♪今すぐ抱きしめたい」

桃子「ユーノ君も抱きしめたいわ!!!それはもう、ギュツと」

デジカメで写真を撮る桃子と、抱きしめたくてプルプル震えている美由希がいた。

・・・・・・いろいろな意味で駄目だ。この人達・

ガチャツ

ドアが開き待ち人の一人が現れる。

ファイア「恭兄、準備出来たのか??」

恭也「ああ、俺は準備出来たけど・・・・・・なのはい、準備出来たか?」

恭也は二階へと声を大きめに向ける。

どうやら毎度の如く心配なのは、なのだけのようだ。

なのは「あう・・・ごめゝん、もうちょつとゝ・・・・・・・・!!」

急ぎすぎて転ばなければよいが・・・・・・・・

美由希「あれ?? 恭ちゃんも一緒に行くの??」

我慢出来なくなりフィアを抱きしめようとやって来た美由希が恭也に聞いてきた。

恭也「ああ」

美由希「あゝそっかあ。で、恭ちゃんは忍さんに会いに行くつと」

思い出したようで恭也をからかう美由希。

さすがは桃子を母に持つだけある。

笑みが桃子にそっくりだ。

恭也「まあ・・・フィアとなのはの付き添いがてら・・・・・・・・な」

視線を逸らす恭也。

フィア「（やれやれ、素直に会いに行くとはいいいものを・・・）
」

ピコッ

・・・勝手に動くツインテール・・・もとい、いつものツインテールの髪型をしたなのはが姿を現す。

フィア「(・・・・・・・・あのツインテール・・・いつも思うがやっぱり謎だよな)」

いつも目の前にある(聞いてはいけない)疑問に首を傾げるフィア。
そこへなのはがやって来た。

なのは「お待たせ♪」

フィア「けっこう待った♪♪」

なのは「フィアお兄ちゃんの意地悪!!そこは待ってないって言うところなんだよ!!!」

フィア「嘘をつかない事も大切かな」と思っ「てな」

なのは「ぷ」

動くツインテールのから気を逸らすために、なのはを弄る。

恭也「フィア、弄るのもそこまでにしないとバスに乗り遅れるぞ」

フィア「そうだな、そろそろ行くか!!」

なのは「はい、ユーノ君おいで!」

ユーノ「キュッ!!!」

なのはがユーノを呼ぶと、走り寄り、なのはの肩へと移動した。

美由希「じゃあ、いつてらっしゃーい」

恭也「ああ」

フィア「ん」

なのは「行ってきました♪」

手を振る美由希に手をひらひらさせながら俺達は家を後にする。

月村邸

ピンポーン♪

なのはが呼び鈴を押すと、お馴染みの音が鳴り響く。

しばらく待っていると玄関が開き一人の女性が出て来た。

??? 「恭也様、ファイア様、なのはお嬢様、いらっしやいませ」

恭也「ああ、お招き預かったよ」

なのは「こんにちは〜♪」

ファイア「久しぶりだな」

微笑みながら会釈する女性の名はノエル。月村家に仕えるメイド長で、無口だが美人で凜とした雰囲気をした心の優しい人だ。

ノエルと俺は、料理関係でいろいろ話したりする。

例えば、新レシピについてとか・・・

ノエル「どうぞ、こちらへ」

ノエルに案内されテラスに着くと、アリサとすずか、そして二人の女性がいた。

すずか「なのはちゃん、恭也さん、ファイア君!!」

なのは「すずかちゃん!!!!」

ユーノ「キュッ」

自分もいると言いたいのかユーノも鳴く。

??? 「なのはちゃん、恭也さん、ファイア君いらっしやい♪」

一人の女性が話しかけてくる。

このメイド服を着た女性の名前はファリン。すずかの専属メイドで、明るく優しいドジな人でノエルの妹だ。

ファリン「・・・今、ドジとか言われたような・・・」

ドジなのに妙に鋭いな・・・そこだけ。

??? 「恭也、いらっしやい」

恭也「ああ」

もう一人の女性が恭也に歩み寄り声をかけた。

この女性は月村 忍。恭也と高校からのクラスメートで、今では凄く仲の良い恭也の恋人だ。

ファイア「（今、見つめ合ってるしな）」

ノエル「お茶をご用意致しますが、何が宜しいですか??」

恭也「任せるよ」

ノエル「なのはお嬢様は???」

なのは「私もお任せしましす♪」

フィア「んゝ・・・ノエル、三人共アールグレイで、なのはにはミルクとハチミツを付けてくれるか」

ノエルが俺に聞く前に三人分頼む。

「お任せ」というのはけっこう困るからな

ノエルはどうやら察したようで恭也となのはに頭を下げ、俺には微笑みながら目で“ありがとう”と伝えてくる。だから、俺も“気にするな”と目で伝える。

端から見たら、見つめ合っているようにも見える光景なので、三人の少女の機嫌が少し悪くなったのは言うまでもない。

ノエル「ファリン」

ファリン「了解です。お姉様」

ノエルがファリンを呼ぶと、ファリンが敬礼してノエルの隣に移動する。

正直、敬礼いらないうな・・・

忍「じゃあ、私と恭也は部屋に居るから」

恭也の手を取ってノエルにそう告げ部屋を出て行く。

ノエル「はい、そちらにお持ち致します」

ノエルとファリンも頭を下げ、忍と恭也の後に部屋から出て行った。

なのは「よっと」

椅子の上で寝そべっている猫を降ろし座るなのは。

猫は床に座っているフィアの隣に駆け寄り、フィアの膝上で寝始めた。

フィアの周りには、他にも数匹の猫が背中をよじ登ろうとしたり、肩へ乗ったりしていて、フィアも楽しそうに猫の撫でている。

アリサ・すずか・なのは「「（猫になりたいかも・・・・・・・・）」」

一瞬そう思った少女達がいたとか何とか・・・

アリサ「おはよう」

なのは「うん、おはよう」

フィア「・・・」

アリサが挨拶をしてきたので挨拶をするなのは。

フィアは猫に夢中で聞こえていないようだ。

アリサ「相変わらず、すずかのお姉ちゃんとなのはのお兄ちゃんは

ラブラブだよね」

すずか「ふふ、うん♪」

アリサの言葉にすずかは嬉しそう頷く。

すずか「お姉ちゃん、恭也さんと知り合ってから、ずっと幸せそうだよ」

なのは「うちのお兄ちゃんは……昔に比べて、なんだか優しくなったかな??」

フィア「……俺には無愛想だけどな」

アリサ・すずか・なのは・ユーノ「「「（貴方が言うな!!!）」」」

フィアは基本、無愛想で面倒臭がりやでサボり魔なのである。

学校の一日の授業の内、半分ぐらいしか真面目にしていない。（後の半分は授業中寝ているか、屋上で寝ているかのどちらかである）

更に学校自体を休んだりする。（既にユーノが居着いてから二回ほど休んでいる）

これで、容姿端麗・文武両道なのだから質が悪い。

教師・生徒からウケも良いので、何も言われないからやりたい放題である。

・ ・ ・ まあ、それはともあれファイアの言葉に周りのメンバーは心の中でツッコんだ。

ユ一ノ「キュツ」

猫と戯れていると、ユーノがリュックから出て来るのが見えた。

ファイア『……お前、勇氣あるな』

「ユーノ、何で？……はっ！？」

ユーノの目の前には、鼠を前にした猫の如くにじり寄る子猫。

「……名前は確かアインだったかな」

そう思いながら猫と戯れるフィア。

どうやら助ける気はさらさらないらしい。

そうこうしている内にアインはユーノに飛び掛かった。

ユーノ「キューー！？」

なのは「わっ！！？」

ユーノ「キュッキュキューー！！！」

アイン「ニヤツニヤツニヤツニヤ！！」

なのは「ああー！！？ユーノ君」

すずか「あっ、アイン駄目だよ！！！」

猫に追い掛けられているユーノを助けるため、立ち上がるのはとすずか。

つとそこへ、ファイアに念話が入る。

ユーノ『ファイ、ファイア！！助けて、お願い！！』

ファイア『えゝ・・・面倒臭い』

ユーノ『・・・・・・・・・・・・・・・・ファイアの女男』

ユーノが禁句をボソツつと小声で呟く。

瞬間、ユーノを追う猫の数が増えた。

ファイア『お前は猫の餌になるといい・・・・・・・・っっていうかなれ♪
♪』

猫と鼯の強烈な鳴き声が聞こえるが無視しよう・・・

っと、更にそこで・・・

ファリン「はーい、お待たせしました。アールグレイとクリームチーズクッキーです♪」

タイミングが悪く、両手に紅茶とクッキーを乗せたお盆を持つドジっ子が来てしまった。

ユーノ「キュキューー！！！！」

猫達「ニヤニヤニヤニヤッ！！！！！！」

ファリン「わ、わわあ、わあああー！！！！！？」

ユーノがファリンの足と足の間を通るので、追いつける猫達もおのずと通る。そしてファリンの周りを回り出した。

ファイア「（この後の展開が手に取るように分かるな・・・・・・・・・・・・・早く止めないと）」

ファリン「わあああー！！！！！！」

すずか「ファリン危ない！！！」

なのは「あー！！！！！！」

しかし、少し遅かったらしく倒れそうになるファリン。

ユーノ「プギュッ!？」

なのはとすずかの二人が駆け寄るが、それより速くファイア駆け寄り腰に手を廻して倒れないように支える。

その時、ユーノを蹴飛ばすのも忘れずに実行した。

だがしかし、ファイアは失念していた。

ファイアがファリンに駆け寄るのが見えた二人は、お盆を取ろうと手を伸ばした。

そこは良い・・・・・・・・・・そこは良いのだが、一つ忘れていた。二人の内、一人は“運動音痴のなのは”だということを・・・・・・・・

組み合わせがアリサとすずかなら問題ないのだが・・・・・・・・・・なのはとすずかだ。

運動音痴のなのはが、ファリンからお盆へと標的を一瞬で変更して掴む事が出来るかと聞かれれば、答えは至って簡単・・・・・・・・・・NOだ・・・・・・・・・・出来る筈がない。

その結果・・・

ガチャバシャン

アニメのように、頭から熱い紅茶を被ったファイアが出来上がったのは言うまでもない。

すずか「……あ……う」

なのは「ん……ビンゴ……???」

目を開け、確かめるすずかとなのは。その瞳の先に見えたのは……

ファイア「ん……約80度、適温だなあ」

ファリンがいるので避ける事が出来ず、紅茶を頭から被り上半身から湯気を出すファイアがいた。

そして何故か紅茶の温度を計っている。

なのは「わあ……!! ごめんなさいファイアお兄ちゃん……!!」

すずか「ファイア君!？」

アリサ「っていうか、あんた何で冷静なのよ。普通、“熱い!”とか言うでしょ……!!」

驚き慌てる二人の側に、アリサが近いて来てツツコム。

ファリン「……うん……はっ!! すずかちゃん、なのはちゃんごめんなさい……!! わあ……ファイア君、紅茶被ってる……!! ナプキン、救急車……!!」

慌てふためいているファリンの横でファイアは

ファイア「今回は第一波がファリンで、第二波がなのはだったか・・・」

普通に分析をしていた。

数十分後

とりあえずファイアで体を綺麗にしてテラス戻って来た。

ファイア「ふう、さっぱりさっぱり♪」

口調こそ男っぽいが、服装は男とは掛け離れていた。

何せ急に濡れてしまったのだから服の替えがない。

そして、必然的に着せられる服は・・・・・・・・・・女物と

なる。

ちなみに、服装は忍のお古である。

ノエル「申し訳ありません、フィア様。愚妹が迷惑を掛けたようで・
・・・・」

フィア「気にすんな。家の愚妹で慣れてる」

お互い苦勞するなという意味を込めてノエルに言う。

なのは「フィアお兄ちゃん、それどういう事なのかな?」

勿論、今の言葉が聞き捨てならないのはフィアを睨んでいた。

しかし、全然恐くない。

アリサ「事実でしょ」

なのは「アリサちゃん!!?」

すずか「あ、あはははは・・・」

なのは「すずかちゃんまで・・・・・」

フィア「周知の事実だろ?」

なのは「うう」

思い当たる節があるのか、それ以上なにも言えないのはであった。

S i d e くなのはく

なのは「(・・・・・・・・あっ!!!!)」

あのあと、少し雑談をしているとジュエルシードの反応を感じました。

ユーノ『なのは!!』

なのは『うん、すぐ近くだね』

ユーノ『そういえばフィアは?』

なのは『えっ!・・・・「アインを捜しに行く」って言って茂みの中に入ってしまったよ』

私はファイアお兄ちゃんの入って行った茂みの方（ジュエルシードの反応を感じた方向）に指と目線を向ける。

なのは「・・・・・・・・」

ユーノ「・・・・・・・・」

そして、目線を向けて気付いた。

ジュエルシードの反応を感じた方向だと・・・・・・・・

なのは『ど、どど　どうしよう。えゝと、えゝと・・・』

ユーノ『・・・・・・・・・・そうだ!!!』

ユーノ君が突然、膝から飛び降りて茂みへと駆けて行った。

なのは「ユーノ君・・・あっ!!」

アリサ「あら・・・・・・・・ユーノどうかしたの???」

なのは「うん、何か見つけたのかも。ちょっと捜して来るね」

私はユーノ君の意図を読み取り、席を立ちユーノ君の向かった茂みへと足を進めようとする。

すずか「一緒に行こうか???」

なのは「大丈夫、直ぐに戻って来るから」

私はすずかちゃんの同行を断り、茂みの方へと駆け出した。

ユーノ「・・・あっ！」

なのは「発動した！！！！」

私とユーノ君がジュエルシードの下へ向かって走っている最中、ジュエルシードの発動を感じました。

ユーノ「ここだと人目が・・・・・・結界を創らないと・・・・！！！」

なのは「結界??」

ユーノ「最初に会った時と同じ空間。魔法効果が生じている空間と通常空間との時間をずらすの・・・・・・僕の少しは・・・・得意な魔法・・・・！！！！！」

ユーノ君は目を閉じ集中し始めました。

ところで、最初会った時にそんなの感じなかったのだけど、もしか

して私が鈍いのかな・・・。

なのはが首を傾げていると、前方に淡く発光している緑色の魔法陣が現れる。

ユーノ「あまり広い空間は切り取れないけど、これぐらいなら・・・」

ユーノが言い終わるや否や、魔法陣がより強く発光し周りの景色が変わる。

なのは「・・・あっ!!」

結界が張られると直ぐにジュエルシールドが発動した物が現れるが・・・

アイン「にゃおくん♪」

なのは「・・・う」

ユーノ「・・・お」

・・・現れたのが先程まで子猫だった筈のアイン。

今は巨大な猫となっていて、あまりの大きさに二人は絶句している。

アイン「うにゃん」

ズシン　ズシン!!!

一鳴きして歩いて行くアインに、まだ呆けているのはとユーノ。

なのは「あ、ああ・・・あれは・・・」

ユーノ「・・・た、多分あの猫の“大きくなりたい”っていう思い・
・が・・・正しく・・・叶えられたんじゃないかな
??」

なのは「そ・・・そっかあ・・・」

片手で頭を押さえるなのは。

ユーノ「だけど、このままだと危険だから元に戻さないと・・・」

なのは「そ、そうだね。流石にあのサイズだとすずちゃんも困っちゃうだろうし・・・」

私とユーノ君は再び猫を見る。

アイン「ニャーーーーーン!!」

なのは「襲って来る様子はなさそうだし、ささっと封印を・・・
・・・レイジングハート!!」

私が首に架けているレイジングハートをとり、名前を呼んだ瞬間・
・・・

ヒュン ドオオoooooooooooo

一筋の閃光が走り、猫に当たった。

アイン「ニャアoooooooooooo!!!」

なのは「あ……!!!」

私はすぐに振り返り、閃光の放たれた方向を視る

そこには黒いBJバリアジャケットを着た金髪の少女が電柱の上にいました。

??? 「バルディッシュ、フォトンランサー電撃」

BD『Photon lancer full auto fire』

バルディッシュと呼ばれた杖から男性の響き、先程と同じ金色の閃光がいくつも放たれ猫へと向かって行く。

ドドoooooooooooo!!!

アイン「ウニャoooooooooooo!!!!!!」

猫はいくつもの金色の弾丸を受け倒れた。

ユーノ「な！！魔法の光。そんな・・・！？」

なのは「・・・！レイジングハート、お願い・・・！！！」

RH『Stand by ready set up』

なのははRHの名を呼び、BJを着て杖となったRHを手にして起き上がり逃げていくアインへと向かう。

RH『Flyier fin』

飛行魔法で猫の背に乗り、飛んでくる金色の弾丸を防いだ。

RH『my area Protection』

ドドツ ドドドドドツ！！

??? 「魔導師・・・？」

少女はなのはを視認した後、猫の足にフォトンランサーを再度放つ・
・・・

ドン！！！！

アイン「ニャーーーー！！！！！！！！」

なのは「わ、わぁー」

猫は足に放たれた弾丸を受け、気絶し横に倒れる。

猫の背に乗っていたなのはは必然的にバランスを崩すが飛行魔法で地面に着地した。

なのは「・・・・・・・・！！！！」

なのはは少女へとRHを構える。

ユーノ「（そろそろ驚かなくなってきたけど、僕がなのはに教える事はもう何もないのかも・・・・・・・・）」

ヒュン トツ ガサツ

なのは「・・・・・・・・あっ」

電柱の上に居た少女が、飛んで来て木の枝に着地しました。

??? 「同系の魔導師・・・・・・・・！！ロストログアの探索者か！！！！」

ユーノ「・・・・・・・・っ！間違い無い。僕と同じ世界の住人・・・・・・・・そして、この子ジュエルシードの正体を・・・・・・・・！！！！」

少女の正体がユーノと同じ世界の者だということがわかった・・・・・・・・ジュエルシードの事を知っている事も・・・・・・・・

??? 「バルディッシュと同型のインテリジェントデバイス・・・」

なのは「バル・・・ディッシュ・・・」

少女がバルディッシュと言う名前を呟くのが聴こえ、なのは少女の持っている杖に目を向ける。

??? 「ロストログア・・・ジュエルシード・・・!!」

BD『Scyfhuf orm setup』

杖から音声が聴こえ少女が杖を横に振ると、斧の形から先端部から金色の刃が出現し鎌の形に変わる。

なのは「・・・うっ!!」

私はその姿に体を少し疎ましてしまいました。

チャキ、とこちらに向け少女は開戦の言葉を告げる・・・

??? 「申し訳無いけど、ジュエルシードは貰っていきます!!」

なのは「あ・・・」

少女はなのはに向かって鎌を横薙に振るが・・・

RH『Evasion Flier fin』

なのはは飛行魔法を使い、難を逃れた。

BD『Arc saber』

??? 「ふうん!!」

なのは「あっ!!!」

RH『Protection』

ユーノ「なのは!」

レイジングハートが防御魔法を発動してくれたお陰で、その魔法は防いだが・・・

なのは「っ・・・あ」

魔力の塊から出て来た所を少女が切り掛かってきたが、なのははなんとかそれを反応し、柄で受け止める。

なのは「な、なんで急にこんな・・・」

??? 「答えても・・・多分・・・意味はない・・・」

なのは「くうっ!!」

何故そんな事するのかという問いに少女は意味がないと答えた。

なのは「(何故・・・何故、意味がないなんてわかるの??? それはお互いが話し合って決める事じゃないの???)」

なのは「なら一つだけ答えてくれる……」

??? 「……」

なのは「森の中で長い黒髪の“女物”の服を着た男の子に会わなかった???」

??? 「……会わなかった」

なのは「……そう」

なのはそれを聴いて安心し、少女は顔には出さないものの……

??? 「(えっ……ええっ!! 男の子なのに女物の服!?)」

内心では混乱していた。

そして、お互い杖を弾き合い距離をとる。

BD『Device form』

バルディッシュは斧へ

RH『Shooting mode』

レイジングハートは遠距離の攻撃を特化した姿へと変わる。

RH『Divain Baster stand by』

BD『Photon Lancer Get set』

いつでも撃てるようお互い魔法の準備をし、後は発動するだけの状態にして見つめ合う。

なのは「(きつと、私と同年くらい。綺麗な瞳と綺麗な髪・・・
・・・だけどこの子は・・・)」

アイン「・・・ニャ・・・オン」

なのはが思考している時にアインが目を覚まし、弱々しい声をあげなから逃走する。

私はその鳴き声を聴き猫の方へと顔を向けてしまった。

???「・・・ごめんね」

BD『Fire』

少女が小さな声で謝った後、杖から音声が流れ金色の弾丸が放たれる。

なのは「・・・あっ!!」

なのはが気付いた時には手遅れだった。

ドゴォーーン

かなりの威力があったのか、なのはは吹き飛び落下していく。

ユーノ「なのは！！！」

ユーノは走りながら魔法を構築した。

ユーノ「・・・ふっ」

地面に落下まで後少しの所で、ユーノの構築した衝撃吸収の魔法で地面への衝突は免れたのだった。

S i d e 〈 なのは 〉 E n d

S i d e 〈 ？ ？ ？ 〉

??? 「ごめんね」

私はもう一度、気を失っている白い子と使い魔であろう小動物に一瞥し、猫の後を追う。

……… だけど、これは偽善だ

そう実感する度に胸が痛くなる。

物思いに耽っていると、突然ジュエルシードの反応が消えた。

??? 「（反応が消えた!!! そんな・・・）」

私は戸惑いながらもジュエルシードが消えた地点へと急ぐ。

消えた地点に着くと、そこには数匹の猫と白いワンピースを着た黒髪の少女? が居ました。

その光景はとても綺麗で見惚れてしまいそうになってしまう。

??? 「（この子って確か・・・・・・白い子が言ってた男の子かな???）」

さっき戦闘した少女の言葉を思い出しながら、杖を構え声をかけた。

??? 「あの・・・この辺りに木ぐらい大きな猫が来ませんでしたか???」

一般人に何を言っているのかと顔が熱くなったが、返ってきたのは・

??? 「名前」

??? 「へっ!？」

意外な言葉だった。

??? 「だから名前」

??? 「えっ あつ、 わ、私の名前はフェイト・テストロッサ」

??? 「フェイト……運命か、良い名前だな。俺の名前は
高町 フィア “性別は男”だ。よろしくな」

そう言つて笑顔で手を前に出すフィア。

フェイトは顔を赤くしながら握手した。

フィア 「ん？ 顔が赤いけど、どうかしたか?？」

フェイト 「な、なんでもないよ（か、顔が……近い）」

フィア 「??」 ところで栗色の髪の子と黽っぽい動物見なかったか?? 友達がこっちの方に向かったと聞いて来たのだが、見つかったのは猫だけでな」

猫 「ナッ」

猫を撫でながら困った顔をするファイア。

フェイト「それなら、あっちの方で見かけたよ」

私は罪悪感を感じながらファイアに白い子の居る方向を教える。

ファイア「おおー！！そうか・・・ありがとう」

そう言って彼は私が教えた方向へと、猫とともに歩き始めた。

ファイア「・・・・・・・・・・妹の事は気にするな・・・戦闘の途中でよそ見する奴が悪い」

フェイト「えっ！！！」

ファイア「・・・・・・・・・・まあ、そんな事は
どうでもいいか・・・・・・・・君の捜し物はこれかい??」

彼は小袋を私に放り投げる。

私はそれを手でキャッチして中身を見た。

フェイト「ジュツ、ジュエルシールド！！！」

中にはジュエルシードが入っていた。それも二つ・・・・・・・・

ファイア「一つ目は勝利者への賞品。二つ目は俺からのプレゼントだ・
・・・・・・・・」

ファイア「・・・・・・・・・・じゃあ、また会おう」

呆然とする私にそれだけ言うと、白い子がいる方向へと走って行った。

S i d e 〈フ ェ イ ト〉 E n d

その後、ファイアはなのはを抱っこし、月村邸へと帰還した。

二人のクラスメートは赤面しながら心配し、クラスメートの姉は早く部屋へと急がせ、二人のメイドは介抱する準備をしていていた。

そして、極度のシスコンは鬼いちゃんモードでファイアに襲い掛かり、小一時間程鬼ごっこをして事なきことをえたとか・・・・・・・・・・

終

第4話 消せない記憶・・・なの

新月の夜

焰に飲み込まれる村

瓦礫と成り果てた家々

助けてと叫ぶ人々

俺は必死に救いの手を差し延べる・・・

何度も・・・何度も・・・

不意に景色が変わる

そこは暗闇だった・・・

見渡す限り闇 闇 闇

此処でも助けてと叫ぶ声が聞こえる

声ができる方向を見ると少女が居た

俺は少女に近づき手を差し延べる

しかし、少女はその手を掴もうとせずに言った

“ どうして助けてくれなかったの??” と

そう言って、いつの間にか傷だらけになった少女は息を引き取った

瞬間、周りからたくさんの手と声が現れる

“ 何故?”

“ どうして??”

“ どうして、どうして??:??:??:?”

“ 助けて”

“ 助けて、助けてよ”

悲鳴にも似た叫びが頭の中で響く

「すま　　ない」

「すまない、すま　　ない」

俺はうずくまり謝る

そうする事しかできないから

ファイア「うわあああああ!!!!!!」

ユーノ「ど、どうしたの??」

俺の叫び声にユーノが心配そうに聞いてくる。

ファイア「いや、何でもない。階段から落ちる夢を見ただけだ」

ユーノ「そう・・・」

納得しない顔をしながらもユーノは再びベットで寝息をたて始めた。

ファイア「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ファイアはユーノが寝たのを確認すると、外に出るために自室を後にする。

ファイア「・・・・・・・・・・・・・・・・クソッ」

外に出て夜空を見上げ、悔しさと悲しみが合わさった声を漏らす。

その数秒後、ファイアの姿はそこにはなかった・・・・・・・・

翌朝

なのは「行ってきま〜す♪」

ファイア「いつてらっしゃい」

さて、今日は日本国内は全国的に連休だ。

そこで今回は高町家と月村家とアリサで二泊三日の旅行に出かける事になった。

そして何故、俺がなのは達を送り出しているのかというと、俺は事前にはやての家にお泊りする事を言っていたからだ。

俺はなのは達を見送った後、戸締まりをし昨日の内に用意しておいたリュックとクーラーボックスを持って高町家を出た。

途中スーパーで食材を買い、はやての家に着いた俺はインターホンを押し返事を待つ。

はやて「はいはい♪」

ガチャ

しばらくすると声が聞こえ、扉が開いた。

はやて「あゝ、やっぱりファイア君やったか。別にインターホン鳴らさんでええのに」

ファイア「いやあ、何時もの癖でな……今度から気をつけるよ」

はやて「だって、か 家族やもんな!!!!」

少し頬を赤く染め、満面の笑みをファイアに向けるはやて。

その顔には陰りは少しもなかった。

家に入ったファイアとはやてはソファで談笑する。

少しした後、ファイアはリビングに移動しテーブルの上に置いてあるクーラーボックスを待ってはやての所へ戻って来た。

はやて「さっきから気になったんやけど、中身は何なん?? マグロ?」

ファイア「流石にそれはないだろう。中身はこれだ……」

そう言ってクーラーボックスを開けると、中にはたくさんアイスが入っていた。

はやて「わあゝ♪」

フィア「はやてはどれがいい??」

はやて「んゝ、じゃあキャラメルで」

フィア「ほい」

はやてにキャラメルアイスを渡し、自分にはチョコレートアイスを取る。

そして二人は手に持ったスプーンでアイスを食べ始める。

はやて「んゝ♪美味しゝい」

フィア「ふむ、アーモンドを砕いたものを入れて正解だったな。触感がいい」

はやて「そやなゝ、こんな美味しいアイス食べたことないわゝ」

フィア「俺は和菓子の方が得意なのだが、口の合ったならよかった」

仲良くアイスを食べ終えたフィアとはやては図書館へと向かった。

図書館

S i d e ～はやて～

はやて「うゝん、どこ行ったんやろか??」

図書館に来た私とフィア君はそれぞれ読みたい本のあるコーナーに行くため別れた。

そして、日が暮れてきたので帰ろうとフィア君を探しているのが見つからない。

はやて「・・・・・・・・・・・・・・・・あっ!!」

童話のコーナーに彼はいた。そして、一冊の本を繰り返し何度も何度読んでいる。

その表情はどこか怒っているような、悔しがってような複雑な感じだった。

はやて「（何ちゅう名前の本なんやろか???.?）」

私はそつとフィア君の背後に近き・・・

はやて「何読んどるの??」

フィア「うわっ!？」

はやての声に驚いてフィアは本を床に落としてしまった。

はやては本を拾い表紙のタイトルを見る。

はやて「時の 旅人?・・・どんなお話なんや??？」

フィア「んん??あゝ、一人の旅人の旅路を綴った物語だよ。」

フィアが簡潔に本の内容を教えてくれる。

はやて「んゝ、それだけじゃちよつとわからへんから、借りてみるわゝ」

フィア「・・・・・・・・・・ところではやて、俺に用があるのか?」

はやて「あっ!そうやった。日が暮れてきたから、フィア君に帰ろうって言いに来たや!!」

フィア「もうそんな時間か。んじゃ帰るか」

そうしてはやてとフィアは図書館を後にした。

夜

家に帰って来た私とフィア君は夕食を食べ、お風呂に入って今は布団の上でフィア君の読んでいた本を読んでいる。

その隣ではフィア君が椅子に座って本を読んでいる。

タイトル名は“罪と罰”

なんちゅう本を読んどるんや

フィア君ホンマに同じ年なんやろかと思ってしまった。

私の読んでいる本“時の旅人”の内容はというと・・・・・・・・

はやて「（え〜と、何々・・・・・・・・

昔々ある所に一人の旅人がいました。

ある日、旅人は一つの村を訪れました。

その村は、その時盗賊に襲われていました。

逃げて来た村人達は旅人に言います。

“盗賊を退治してください”と

旅人は軽く頷き光り輝く剣で盗賊達を退治しました。

そして、負傷した村人達の傷を“奇跡”の力で治します。

旅人は村人達にとっても感謝され、再び歩き始めます。

旅人は様々な場所で“奇跡”を起こします。

辺境の土地で人食い妖怪を討伐したり

とある王国で流行り病を治したり

隠れた里で水に困る人達のために水源を見つけたり

色々な者達を救いました。

救って感謝された時もありました。

救えなくて殺されそうになった時もありました。

しかし、旅人は救い続けます。

所代わって宿泊施設近くの小さな滝

その川のほとりで 高町 士郎と桃子が散歩をしていた。

桃子「はあ、良いわね。こういう休日は・・・」

士郎「ああ、そうだな」

桃子が立ち止まり、川を眺めぼつりと呟き士郎もそれに同意する。

桃子「お店も若い子達に任せられるようになってきたし・・・」
「

士郎「子供達も・・・まあ、実に元気だしね・・・」

しばし沈黙が続く

桃子「それに・・・・・・・・あなたも」

沈黙を破ったのは桃子

その短い言葉に深い意味が隠されている事を気付いている士郎は、
たった一言で返す。

士郎「ああ、そうだな・・・」

桃子「ふふ・・・」

二人は自然と笑みを零す。

士郎「結構・・・・・・・・時間掛かったもんな」

桃子「・・・・・・・・うん」

士郎「もう桃子や子供達に迷惑を掛ける事もないさ・・・・・・・・」

昔というには程遠いだろうが、士郎がしていた仕事・・・・・・・・
・・・・・・・・ボディーガードの仕事を思い出す。

士郎「これからはずっと翠屋の店長だからな!!!!」

桃子「・・・・・・・・ありがとう、あなた。」

だが、今はもう昔とは違い翠屋の店長だと、士郎は愛する妻に告げた。

士郎「俺が軽傷で済んだのも全部……ファイアのおかげだから……」

桃子「ええ……」

士郎は一年半前に、世界的に有名な歌手であり、一時期高町家に居候をしていた女性　ファイアッセ・クリステラ　を爆発から助ける為に、自らを盾にし大怪我を負うはずだった。

しかし、結果は軽傷。軽い切り傷や擦り傷、火傷だけ。

ファイアが士郎とファイアッセの盾になっていたからだ。

ファイアはいつの間にかそこにいて、どういう方法で士郎とファイアッセを守ったのかはわからないが、確かに士郎はファイアに守られたと感じた。

なぜなら、爆発後の士郎とファイアッセの周辺には、1、2メートル先にいるファイア以外の物や人がなかったからである。

そして、ファイアは左腕、左足の複雑骨折、背中には重度の火傷と切り傷を負っていた。

士郎「あの……死が迫った時……視界に一瞬“白銀”の何かが俺達を爆発から守った。直ぐに目をつぶってしまったが、あれは間違いなくファイアが何かしたんだ」

桃子「あなたが怪我をして病院に担ぎ込まれたと言われた時は、一瞬目の前が白くなったわ。でも、病院に行ってあなたの姿を見た時

はホッとしたわ。だけどフィアは・・・・・・・・・・」

士郎「ああ、フィアは医者に生きているのが奇跡だと言われるくらい
の重傷だったよ。それに・・・・・・・・・・」

桃子「意識を取り戻さないかもしれない。もし意識を取り戻したと
しても普通の生活には戻れないだったわね」

士郎と桃子は、その時の事を思い出し悲痛な顔になる。

なぜなら、その時のフィアは痛々しいくらい全身に包帯を巻き、生
きているのが不思議であつたからである。

士郎「正直、悔やんだよ。こんな小さな子に、残酷な運命を与えて
しまった事を・・・・・・・・・・」

桃子「だけど、フィアは意識を取り戻したわ・・・一週間後に」

士郎は医者に記憶喪失だと言われて、更に後悔の念に駆られたが爆
発の時の内容を説明し、感謝と謝罪をした。

士郎「ああ、俺達は直ぐに病院に駆け付けて、感謝と謝罪をしたさ。
そしたらフィアは・・・・・・・・・・」

士郎と桃子はその時のフィアの言葉を思い出して、涙を浮かべた。

フィア『そうですか・・・・・・・・俺はその時の事を知りませんから、
実感はわからないですけど、“士郎さんとフィアッセさんは無事で
したか”??』

士郎「あの時、フィアは自分の事よりも俺やフィアッセの事を気にしていた。……自分が重傷なのにも関わらず……」

士郎は手を強く握り締めながら言葉を続ける。

桃子「ええ、そして無事だと告げると“そうか、よかった……
……俺の事は気にしないで下さい。俺がやった事ですから……
……後悔はないです”と記憶喪失なのに、それが 自分の 使
命 みたいに言って……」

桃子は涙を流しながらも、途切れ途切れに言葉を言う。

士郎「帰り際に“士郎さん、家族を大切にして下さい”と言われた
時……俺は泣いたよ。」

桃子「私も恭也も美由希もなのはも、全員泣いていたわ……
そして、あなたの泣いた所も初めて見たわ」

微笑をしながら、士郎の方に顔を向ける桃子。

士郎「ま まあ、その時に俺はボディガードを辞める決意をした
んだ。……全く、家族を大切にすることを子供に教えられる
なんて、自分もまだまだだなぁって思ったよ。」

少し罰が悪そうに、頬をかき苦笑いする士郎。

桃子「その後、医者が驚愕するくらい早く完治して、身寄りのない
フィアを引き取って……」

士郎「なのはと同じ学校に通わせて・・・・・・・・」

桃子「色々あったわね、本当に・・・・・・・・」

士郎「ああ、俺が普通の生活を送れるのもフィアのおかげだ・・・・・・・・」

そう言って士郎は立ち止まり空を見上げる。

士郎「・・・・・・・・桃子」

桃子「何???」

士郎「こんな俺だが・・・・・・・・傍に居てくれるか??」

桃子「何をいまさら・・・・・・・・嫌だと言われても傍に居るわよ」

士郎「・・・・・・・・ありがとう」

士郎と桃子は、二人寄り添って川のほとりを後にした。

はやて家

俺が本に集中しているといつの間にかはやてがベッドですやすやと寝ていた。

ふと、時計を見てみると短い針と長い針が12の数字を指している。

ファイア「・・・・・・・・・・」

ファイアは椅子から立ち上がり本棚の方へと足を進ませた。

そして本棚の前で静止し、やはり初めてはやての部屋に来た時と同じように、この部屋に不釣り合いな一冊の鎖の巻かれた本に視線を向ける。

ファイア「俺が　俺が必ず　書　破壊する・・・・・・・・」
俺はそのためにいるのだから・・・・・・・・」

その言葉は誰にも聞かれないまま闇へと消えていった・・・・・・・・

終

第5話 和風喫茶

琥珀屋へようこそ♪♪♪なの

温泉からなのは達が帰って来て数日

なのははフェイトの事で考えているようだ。

たびたび思考の海に入って中々帰って来ない。

これが元でいざこざが起ころなければよいのだが………

俺？俺はというと………

ファイア「じゃあ、行ってくる」

桃子「いってらっしゃい……！」

士郎「気をつけてな」

俺は学校を休み、たくさんの和菓子や食材を屋台に入れて、朝早くに高町家を出た。

今日は一ヶ月ぶりの移動型和風喫茶 琥珀屋の営業日である。

移動型和風喫茶 琥珀屋……強いて言うなら喫茶 翠屋の移動バージョンだ。

前は二週間に一回くらいのペースで営業していたのだが、今回は色々あって一ヶ月にまで伸びてしまっていた。

そのお詫びにと思い、今日はいつもより多くの量の和菓子と食材を用意している。

そして俺は、屋台を引きながら今回屋台を開く場所……遠見市の公園に向かう。

ちなみにこの屋台、かるく大人の男性二人がいて引けるくらいの重さなのだが、フィアはまるで屋台を引いていないかのように普通に歩いている。

重くないのだろうか？？

そんな疑問をアリサが以前したのだが、フィアいわく……

フィア『この屋台が重いと言っていたら、恭兄の剣撃を受け止められない』

だそうだ……正直、人外である。

公園に着き屋台を開く準備をしていると、ゲートボールをしている老人達がフィアに話し掛けてきた。

老人「おはよう、フィア君。朝からすまないけど、みたらし団子と梅茶をくれんかね」

フィア「ああ、いつもありがとうございます。みたらし団子と梅茶ですね。畏まりました。準備いたしますので、少々お待ち下さい」

フィアは数人分の折り畳み式の長椅子を出した後、みたらし団子と梅茶の準備に取り掛かった。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

フィア「ありがとうございました!!!」

お昼のお客ラッシュが過ぎ、屋台の時計を見てみると短い針が1を指していた。

ファイ「んんっ・・・・・・・・ん??・・・・・・・・はあっ!？」

ファイは軽く伸びをして、何気なく木がある方向を見ると・・・・・・・・が一人、中に入れそうなダンボールが置いてあった・・・・・・・・木の下に人・・・・・・・・それも二つ。

しかも、ご丁寧に中からこっちが見えるよう穴が空けてある。

ファイ「(スネ○クなのか!？中身はあの○ネークなのか!?!?!まさか俺の和菓子为国家機密になっていたとか・・・・・・・・)」

あまりにも不自然過ぎて、混乱しているファイ。

ファイ「・・・・・・・・(フェイトの魔力を感じるな。・・・・・・という事はフェイトのバックには大佐がいるのか!?!?!?)」

・・・・・・・・いるわけねえだろ!?!?!?!!

ファイ「(・・・・・・・・ちょっと驚かすか♪)」

ファイは身体強化を足に使い、一瞬でダンボールの後ろに回り込み、ダンボールを開けた・・・・・・・・

S i d e 〈フエイト〉

朝早くに私の住んでいるマンションの公園の近くで、微弱だが魔力の反応があった。

私は管理局の連中にばれたのかと思い、迎撃するためしばらくマンションで待機している。

フエイト「アルフ・・・・・・・・どう思う?？」

フエイトは自分の使い魔である額に宝石を付けた女性――アルフに意見を問う。

アルフ「私は多分管理局の奴らじゃないと思うな・・・・・・・・だいたい、管理局がこんな魔法が知られていない世界に来るわけないよ」

フエイト「・・・・・・・・そうだね。でも、もう少し様子を見よう・・・・・・・・」

アルフ「はいはい、分かってるよ。私のご主人様」

私達は微弱な魔力の反応がする存在の様子見を続けた。

午後1時30分

アルフ「……ねえ、フェイト……」

フェイト「……外、見てみようか」

私達は我慢出来ず、ベランダから公園を見た。

フェイト「えっ!？」

公園には何故か行列が出来ていた。

フェイト「……屋台……??？」

その行列の先には屋台があり、そこから魔力の反応が出ている。

アルフ「フェイト、私が見てこようかい??」

フェイト「ううん、私も行く」

アルフ「駄目だよ!! 危ないよ!!!!」

フェイト「大丈夫、私には秘策があるから……」

私達は敵かどうかを確かめるため行動を開始した。

ガサゴソ　ガサゴソ

アルフ「………ねえ、フェイト」

フェイト「何??? どうしたの?」

アルフ「本当に大丈夫なのかい? これで??」

アルフが不安そうに言ってくる。でも、大丈夫。だって………

フェイト「大丈夫だよ。このダンボールの中に隠れて移動すれば、見つからないってリニスが言ってたから……」

アルフ「リニスが!!!……そっかあ、なら大丈夫だね!」

アルフも納得してくれたので、私達はダンボールで隠れながら屋台の見える木の下まで移動する。

そして、あらかじめ空けておいた穴で屋台を営業している人物を見た。

フェイト「……ファイア!」

アルフ「知り合いなのかい???」

屋台を営業している人物がファイアであることがわかり驚くフェイト。

ファイアの事を知らないアルフは、驚くフェイトにファイアの事を尋ねる。

フェイト「えっ……ああ、この前会った白い子のお兄さんだよ。」

アルフ「それじゃあ、私達の敵?」

フェイト「違うんじゃないかな……ジュエルシードくれたし……」

アルフ「ジュエルシードを!」

フェイト「うん、でももう少し様子を見よう」

そう言って屋台の方に視線を戻すと・・・・・・・・

フェイト「・・・・・・・・いない!？」

フィアの姿はそこにはなかった。

そして、不意に視界が明るくなり後ろから声が聞こえてきた。

フィア「・・・・・・・・何やってんだ? お前達?？」

振り返ると呆れた顔をしているフィアがいた。

S i d e 〈フェイト〉 E n d

時刻は午後2時

折り畳み式の長椅子に一人の少女と一人の女性、そして一人の少年が座っていて、屋台には“ 本日の営業は終了しました ”と書かれた看板が掛けられている。

ファイア「……………で、話を纏めるとマンションにいたら微弱な魔力の反応を感じて様子をみてたら全然何もしてこなくて、教育係に教えてもらった潜入方法で屋台を見に来たら、俺が居て見つけたと……………」

……………全然、話が纏まってないのは気のせいだろうか??

フェイト「……………うん」

ファイア「(リニスっていう人ナイス!!!!)」

その教育係のセンスに共感するファイア。

ファイア「ん、話はわかった。ちょっと待っててな」

ファイアは屋台に戻ると秋刀魚定食と和菓子、そして玉露入りの緑茶を持ってフェイトとアルフの所に向かう。

ファイア「余り物で悪いが食べてくれ」

フェイト「いや、いいよ!?!」

アルフ「え〜・・・フェイト、食べなよ〜♪すごくおいしいよ!!」

自分の使い魔が既に食べているのを見て少し恥ずかしそうな顔をするフェイト。

ファイ「そうそう、いいからいいから〜♪♪」

フェイト「じゃあ、いただきます」

遠慮がちのフェイトだったがファイ（何故かハイテンション）の言葉に折れ、秋刀魚の塩焼きを口へと運ぶ。

フェイト「美味しい」

ファイ「そうか、よかった」

その後、フェイトとアルフは無言で秋刀魚定食と和菓子、玉露入りの緑茶を口へと運んでいた。

フェイト・アルフ「「ごちそうさまでした」」

フィア「お粗末様でした♪」

フェイト「・・・／／／（綺麗）」

ああ、やっぱり美味しいと言ってくれると嬉しいな・・・・自然と笑顔になる。

ん・・・何でフェイト顔を赤くしているんだ???

フェイト「あ　ああ　あの、ありがとう・・・ジュエルシードをくれて」

フィア「気にしないでいいぞ。あれは俺には全く無意味な物だから・・・」

ナデナデ

そう言ってフェイトの頭を撫でるフィア。フェイトの顔が更に赤くなる。まるで茹蛸のようだ・・・

フェイト「でも、何で妹さんに渡さなかったの??／／／」

フィア「賞品は勝者に渡すもんだろ・・・・まあ、ユーノは怒るだろうがな」

ナデナデ ナデナデ

ファイア「あっ……でも俺がくれたって言うのは、内緒だぞ」

フェイト「あ あう／／／／／」

アルフ「……………（この子ならフェイトを救ってくれるかも）」

アルフは思った。

ファイアならフェイトに笑顔を取り戻せるのではと……………

フェイト「今日はありがとう」

ファイア「感謝される覚えはないのだが……………まあ、どういたしまして」

話も一通り終わり、帰り際フェイトに頭を下げられた。

フィアは軽く返事を返しフェイトと別れた。

フィア「（和菓子が少し余ってよかった．．．．．はやてを所に
持って行こう．．．）」

フィア「．．．．．フェイト．．．なんで悲しい瞳をする
んだよ」

フィアは一言呟いた後、はやての家に行くため公園をあとにした。

時間は進み夜

なのは「リリカル・マジカル!!」

フェイト「ジュエルシード・シリアル19」

なのは・フェイト「封印!!!!」

金色と桜色の砲撃がジュエルシールドにぶつかり、ジュエルシールドは封印状態になった。

RH『Device mode』

レイジングハートは通常形態へと戻る。

なのはは朝とは違う、何かを決意した顔つきで一步、一步静かにジュエルシールドの下へ歩いていく。

ユーノ「やった！なのは、早く確保を！！」

・・・全く・・・・・・空気の読めない淫獣だ

アルフ「そうはさせるかい！！！」

なのは・ユーノ「・・・あっ！！」

アルフが襲い掛かり、ユーノが攻撃を弾いた。

フェイトも結界の前に移動してくる。

なのは「（目的があるもの同士だからぶつかり合うのは仕方がないかもしれない・・・）」

なのはは一步を踏み出し、フェイトに自分の事を告げた。

なのは「この前は自己紹介出来なかったけど、私なのは・・・高町 なのは 私立聖祥大付属小学校三年生」

BD『S r i h e f o r m』

バルディッシュから音声の流れ、なのははレイジングハートを構える。

なのは「（・・・・・・・・・・だけど知りたいんだ！！！！どうして、そんな寂しい瞳をするのか・・・・・・・・・・）」

フェイト「・・・・・・・・ふっ！！！！」

なのは「あっ」

RH『F l i e r f i n』

フェイトがなのはへと襲い掛かり、なのはは飛行魔法を発動する。

金色と桜色の砲撃が幾つもの軌跡を残す。

RH『F l a s h m o v e』

フェイトに背後をとられたなのはだが、高速移動魔法で逆にフェイトの背後に回る。

RH『D i v e n s h o o t e r』

BD『D e f e n c e r』

なのはのディバインバスターの簡易版を防御魔法で防ぐ。

なのは「フェイトちゃん!!!!」

フェイト「……………あ」

なのはの叫びにも似た大声に、フェイトも攻撃の手を止める。

なのは「話し合うだけじゃ……言葉だけじゃ何も変わらないって
言っていたけど、だけど話さないと……………言葉にしないと伝
わらない事だってきつとあるよ!!!!ぶつかり合ったり、競い合う事
になるのはそれは仕方のないかもしれない……………だけど何も
わからないままぶつかり合うのは、私は嫌だ!!!!」

なのはの真剣な言葉に、フェイトの瞳が揺れる。

なのは「私がジュエルシードを集める理由は、それがユーノ君の探
し物だから…………ジュエルシードを見つけたのはユーノ君で、ユー
ノ君はそれを元通りに集め直さないといけないから……………私
はそのお手伝いで、だけどお手伝いするようになったのは偶然で、
今は自分の意志でジュエルシードを集めてる……………自分の暮らして
いる街や、自分の周りの人達に危険が振りかかったら嫌だから!こ
れが私の理由!」

フェイト「……………っ……………私は」

アルフ「フェイト!答えなくていい!!」

なのはの思いにフェイトは心を開きかけたが、アルフが邪魔をした。

なのは「フェイト「……………あっ!?!」」

アルフ「優しくしてくれる人達の所で、ぬくぬく甘ったれているガキンチヨになんかに何も教えなくていい!!!!」

なのは「えっ!?!」

アルフ「私達の最優先事項は、ジュエルシールドの捕獲だよ!!!!」

アルフの言葉に、フェイトの心は閉ざされて再び攻撃の構えに戻る。

なのは「っ!?!」

ユーノ「なのは!?!」

なのは「大丈夫!?!」

ユーノが心配そうになのはにかけていると、フェイトがジュエルシールドの元へと走りだした。

ガシンッ!!!!!!!!!!

ユーノ「あ……」

アルフ「……え」

ジュエルシールドを間に、レイジングハートとバルディッシュがぶつかり合う。

すると、二つのデバイスに輝が入っていく。

「????」

ドンッ!!

なのは「きゃあっ!!」

フェイト「っう!!!!」

ジュエルシールドが激しく光る直前、誰かがなのはとフェイトを弾き飛ばした。

そして、ジュエルシールドが辺りを光りで飲み込んでいく・・・

アルフ「フェイト!?!」

ユーノ「なのは!?!?!」

それぞれがそれぞれの名を呼ぶが、光により視界が全く見えないので二人の安否を確認出来ないでいた。

なのは「イタタタタ・・・」

フェイト「う、ううん」

ユーノ「なのは! 大丈夫!?!」

アルフ「フェイト、大丈夫かい?!?!?!」

なのは「うん、一応・・・」

フェイト「大丈夫だよ」

ユーノはなのは下へと、アルフはフェイトの下へと駆け寄り、無事だとわかりホッとするユーノとアルフ。

???『そうか・・・無事で何より』

なのは・フェイト・ユーノ・アルフ「「「!!!!!!!!!!」」」

突然の念話に四人は驚き辺りを見渡す。

そしてジュエルシードの近くを見ると、体全体に白いローブを纏い、顔を白いターバンで隠した人物が立っていた。

アルフ「誰だい！あんたは!!!!」

???「・・・・・・」

アルフの問い掛けに答えず、???はなのは達に背を向けジュエルシードの前で何かを呟く。

その瞬間、ジュエルシードの下に白い魔法陣が出現し、ジュエルシードの周りをルーンがリング状に回転する。

暫くすると（時間にして数十秒）ジュエルシードの暴走は止み、ただの宝石のように静まった。

そして、???はジュエルシールドを手を持った後、なのは達の方に体を向ける。

???『誰と言われてもな………ただの旅人だと答えておこう。』

ユーノ「!!!!…まさか………いや、そんなはずは……」

男性か女性かわからない無機質な声が念話に流れ、ユーノは驚き神妙な面持ちで自問自答をしている。

フェイト「あ、あの、ジュエルシールドを渡してくれませんか？」

アルフ「ちよっ フェイト!!!!」

フェイトがバルディッシュを片手に持ちながら、旅人に近づいていく。

旅人『……………』

ポイツ

旅人は黙ったまま、フェイトにジュエルシールドを放り投げた。

旅人『デバイスが破損しているな』

そう念話で言った後、指を鳴らすとレイジングハートとバルディッシュ

シユの周りに先程と同じように、ルーンがリング状に回転し、ルーンが消えるとレイジングハートとバルディツシユは元通りに直っていた。

なのは・フェイト「ありがとう!!」

旅人『気にするな・・・・・・・・・・それでは失礼する』

なのはとフェイトのお礼を受け取り、まるで始めからいなかったかのように、旅人は消えた。

アルフ「フェイト! 私達も帰ろう!!」

フェイト「・・・うん」

ユーノ「待て!!!」

ユーノが言った時には既に遅く、フェイトとアルフはその場を去っていった。

その夜の空は、どこか悲しそうに見えたのだった・・・・・・・・

終

祝♪5万ヒット達成なの!!!

ファイア「アクセス数5万ヒット達成!!!」

なのは「こんな作者の駄文を読んでくれてありがとうなの」

フェイト「作者は亀さんだから更新は遅いかもしれないけど、これからよろしく!!!」

作者「……なんか俺の扱い酷くねえか?」

なのは「気のせいなの! 私の出番が少ないと思っているだけなの!」

作者「思っているだけなんだったら、レイジングハートをこっちに向けないで!!!」

RH『Starlight breaker』

なのは「ちよつと逝ってこいなよ」

作者「ちよつ、それ本編でまだ出てないから……待って! 打たないで!!!……ぎゃあああああ!!!」

チーン

ファイ「フェイト・・・・・・・・君はあれをもうすぐくらうんだよ」

フェイト「え・・・・・・・・ええ!!?」

がくがくぶるぶる

ファイ「おい、大丈夫かフェイト!!体が凄い震えているぞ!!」

フェイト「大丈夫大丈夫??」

ファイ「フェイトーーーー!!」

なのは「早々と人が二人いなくなりました♪」

ファイ「いや、♪を付けるなよ・・・」

なのは「気にしたら逝けないの♪」

ファイア「おっ、おう・・・それで、この後どう進めればいいんだ？
??」

なのは「さっき作者から奪っ——もらった進行用紙が・・・..
あったあった」

ファイア「・・・・・・・・（ここから逃げだしたい）」

なのは「“5万ヒット達成を記念してリクエスト小説を書きたいと
思います。リクエストがありましたら、感想・コメントのコーナー
にご記入ください”だって・・・」

ファイア「“後、本編の主人公 高町 ファイアを自分の小説に出した
いという方、感想・コメントのコーナーに一言書いて下さい！！！！
”・・・・・・・・・・って俺!？」

なのは「リクエスト小説・・・・・・・・ファイアお兄ちゃんとの
ラブラブ小説・・・・・・・・」

ファイア「あ・・・・・・・・なんかグダグダだなあ・・・・・・・・どう
締めくくろう・・・・・・・・」

作者「ということでリクエスト小説、主人公の出張を募集しており
ます。こんな小説を書いてほしい、ファイアを自分の小説に出張させ
たい方、感想・コメントのコーナーにご記入ください。」

ファイア「作者!?! いつの間に!?!?」

作者「ふふふ、俺はギャグでは死なないのさ」

フェイト「じゃあ、マジで殺ればいいんだね………♪」

作者「首がミシミシ逝ってる。っというか息が出来な……い……」

再びチーン

なのは「何はともあれ」

フェイト「これからも 魔法少女リリカルなのは くの時の旅人く
を」

なのは・フェイト・ファイア「よろしくお願いします!!!!!!」

第6話 狂人と旅人の邂逅・・なの!???

とある日

S i d e
{ ??? }

次元空間内に一隻の船が航行していた。

カツツカツツカツツ カシユー

ブリッジへと続く通路を一人の女性が歩いている。

自動的に扉が開き、女性はブリッジへと入って行く。

時空管理局 次元空間航行艦船「アースラ」

それがこの船の名前だ。

??? 「皆、どう？ 今回の旅は順調？？」

男性クルー「はい、現在第三船速にて航行中です。目標次元には、今からおおよそ160ベクサ後に到達の予定です。」

男性クルー2「前回の小規模次元震以来、特に目立った動きはないようですが、二組の搜索者が再度衝突する危険性は非常に高いですね。」

男性クルーに問い掛けた女性「……この女性は艦船「アースラ」の艦長である。」

??? 「そう……」

??? 「失礼します。リンディ艦長♪」

リンディ「ん、ありがとうね。エイミィ」

女性艦長の名前はリンディ・ハラオウン。若い……………のかな????

リンディ「ふふふフフ・・・・・・・・」

とても若くて美人で優秀な艦長である。

リンディ「そうね・・・小規模とはいえ、次元震の発生はちょっと厄介なもの・・・ね。危なくなったら、急いで現場に向かってももらわないと・・・ね、クロノ??」

エイミイと呼んだ女性が自分の前に置いた紅茶を飲み、艦長席の下に立つ一人の少年に声を掛ける。

クロノ「大丈夫!!! 分かってますよ、艦長。」

この少年の名前はクロノ・ハラオウン。艦長リンディの息子であり、未来のシスコンである。

クロノ「僕はそのために居るのですから・・・」

一枚のカードを指に挟み、少年は母親にそう告げた・・・・・・・・

Side 〵リンディ〵 End

高時空間内

「時の庭園」

Side
　　＼アルフ＼

フェイト「うあああああっ・・・・・・・・っう！！！！あああああっ・・・・・・・・ぐうつ・・・・・・・・ああああ！！！！！！！！」

アルフ「何だよ・・・・・・・・どうして・・・・・・・・どうして！！！！！！」

フェイトが・・・・・・・・フェイトが何をしたっていうんだい！！！！

アルフ「あんまりじゃないか。あの女！！」

アルフ「・・・・・・・・・・・・・・・・聴きたくない・・・・・・・・聴きたくない！！

!!!!!!」

私はフェイトの悲痛な叫びを遮るために、耳を塞ぎ壁にもたれ掛かる。

しかし、耳を塞いでも叫びは聴こえてくる……………

アルフ「（私は無力だ……………）」

アルフ「（……………ファイア……………私はどうすればいいんだい……………助けてくれよ、ファイア……………）」

暫くすると、鞭の音が止みあの女——プレシア・テストロッサの驚いた声が耳に届いた。

プレシア「……………何故……………何故、貴方が此処にいるの!!!!?時の旅人!!!!!!」

アルフ「（時の旅人???）」

アルフは旅人という言葉に反応し、奥の扉を開く。

そこには、いつかの全身白一色の旅人と名乗った人物が気絶しているフェイトを抱え、プレシアと対峙していた。

旅人「……………」

パチンッ!!!!

指を鳴らす音とともに、フェイトの周りにルーンがリング状に回転し、痛々しい傷が消える。

旅人『アルフ・・・・・・・・フェイトを連れて地球へ転移して、ジュエルシードの搜索を続けろ!!!!』

旅人はアルフに近づきフェイトを渡すと念話で逃げろと伝える。

アルフ『・・・・・・・・ありがとう（なんで私の名前を・・・・・・・・）』

アルフは名前を呼ばれた事に疑問を感じながらも、念話でお礼をいうと、フェイトを抱え、時の庭園を後にした。

途中、激しい雷の音が聞こえ振り返りながら・・・・・・・・

S i d e 〈アルフ〉 E n d

時の庭園

アルフがフェイトとともに立ち去った後、プレシアと旅人は互いに鋭い視線を向け相對している。

旅人『・・・久しぶりだな、プレシア』

プレシア「ええ、久しぶりね。何年ぶりかしら・・・・・・・・・・けど」

先に話しかけたのは旅人。念話で懐かしむように、プレシアに無機質な声を発する。

プレシアもその言葉に同意を示した後、溢れんばかりの殺気を旅人に向け・・・・・・・・・・

プレシア「・・・どうして・・・・・・・・・・どうして、私の娘を・・・・・・・・私のアリシアを助けてくれなかったの!!!!!!!!!!」

悲しみと怒りをのせた声を上げた。

旅人『すまない・・・・・・・・・・』

プレシア「何が・・・何が英雄よ!!!! 人一人・・・救え・・・なくて・・・・・・・・」

プレシアは旅人に向かって雷の魔法を放つ。

旅人は避ける事をせず、障壁を張りプレシアの攻撃を防ぐ。

旅人『言い訳はしない・・・・・・・・』

プレシア「ああああああ・・・・・・・・」

プレシアは、なおも攻撃を放つ。しかし、旅人には一撃も当たらない。

暫くして攻撃が止み、再び二人は対峙する。

旅人『だけど、お前のやった事・・・・・・・・F・A・T・Eプロジェクトは許される事じゃない!!!!』

プレシア「私は・・・私はただあの子の笑顔を見たかった!!!!
・・・・・・・・だけど、生まれたのはアリシアの形をしたまがい物・・・・
・・・・・・・・」

瞬間、プレシアの横にバイタルポッドが出現した。

その中には、フェイトとそっくりの少女が入っている。

その少女を愛おしそうな目で見るプレシア。

プレシア「・・・・・・・・だから行くの・・・・・・・・ジュエルシードの力で・・・・・・・・忘れられた都――アルハザードへと・・・・・・・・」

プレシアは虚空を見つめた後、旅人に狂気の目を向ける。

旅人『・・・・・・・・プレシア、アルハザードに死者蘇生の記述は記されていない』

プレシア「!?!?・・・・嘘!・・・・嘘っ!!!!」

頭を左右に振り、旅人の言葉を必死で否定するプレシア。

その姿は先程と違い、まるで子供のようだ。

旅人『残念だが事実だ・・・・・・・・・・』

プレシア「うあああああ!!!!」

その場に泣き崩れるプレシアに、旅人は近づくところある言葉を念話で伝える。

旅人『・・・・・・・・俺なら肉体にアリシアの魂を定着させる事ができる・・・・・・・・』

プレシア「・・・・・・・・アリシアを・・・・・・・・アリシアを生き返らせてっ!!!!!!!!!!」

プレシアは旅人のローブを掴み懇願する。

旅人『・・・・・・・・あれは俺の責任でもある。ただし、ジュエルシードを集めてくれ・・・・・・・・あれは危険だ。』

そう念話で伝え、旅人は時の庭園から消えた。

S i d e 〈フエイト〉

フエイト「ん・・・・・・・・ん・・・・・・・・」

アルフ「フエイト、気が付いたのかい」

フエイト「・・・・・・・・うん・・・・・・・・此処・・・・・・・・は・・・・・・・・私の
・・・・・・・・部屋!？」

なんで私は部屋にいるんだろう??

私は確か・・・・・・・・母さんの所に行って、ジュエルシードが少ししか集められなかったからお仕置きをされて、その後・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・わからない。そうだ！アルフに聞いてみよう・・・・・・・・

フェイト「アルフ、何で私達ここにいるの???」

アルフ「ああ、それは――――」

アルフはフェイトに時の庭園での一件を話した。

フェイト「そう・・・・・・・・旅人さんが傷を治療してくれたんだ・・・・・・・・」

そこでフェイトは気付く。旅人が自分達の味方であるとは限らない事を・・・・・・・・

フェイト「(母さんが危ない!!!)」

私は直ぐさま時の庭園に転移しようとする、念話がかかってきた。

プレシア『フェイト、ジュエルシードの搜索を続けなさい。』

フェイト『母さん！無事だった!!』

プレシア『何を言っているのあなたは・・・・・・・・時の旅人は私の旧き友人よ。』

フェイト『ええっ!!』

その念話を聴きフェイトは驚いた。

フェイト「（だからジュエルシードをくれたんだ・・・）」

プレシア『わかったならジュエルシードを捜しなさい・・・・・・・・・・
・私は暫く眠るわ、次は必ず母さんを喜ばせて頂戴・・・・』

フェイト『はい・・・・・・・・・・！！！！』

母さんは疲れているんだ・・・お休みなさい・・・・・・・・母さん・・・

フェイト「アルフ、母さんのためにジュエルシードを捜しに行こう
！！！！」

私はアルフを連れ、ジュエルシードの搜索に向かった。

S i d e 〈フェイト〉 E n d

公園の茂みに蒼い菱型の宝石が存在していた・・・・・・・・

蒼い宝石――ジュエルシードは淡い輝きから強い光となり、自ら浮き上がり木の中へと入っていく・・・・・・・・

そして、木は大木へと大きさを換え、まるで“木のお化け”そのもののように変化した・・・・・・・・

フェイト「・・・・・・・・!!」

アルフ「・・・・・・・・発動・・・・・・・・したね」

アルフは建物の屋上、フェイトは長い棒の頂点にて、ジュエルシードの発動を感知する。

フェイト「アルフ・・・・行こう!!!!」

アルフ「アイよ!!」

黒き魔導師と朱き狼はその場からジュエルシードの下へと向かった。

一方、なのは達も同じくジュエルシードの発動を感知し、ジュエルシードの下へ向かっていた。

アルフ「オオ、生意気にバリアを張れるのかい!!」

フェイト「うん、今までのより強いね・・・!それに・・・あの子も居る!!」

フェイトは木のお化けに警戒しながら、なのはを見据える。

アルフ「フィアも居る・・・ってアレは刀かい??あんな物で何を??」

フェイト「フィアも戦闘に参加・・・するのかな??」

二人はフィアを見て、刀で木のお化けに立ち向かうのかと、少し呆れた表情をする。

木『オオオオオオオー!!!』

木のお化けは根を地面から出し、なのはとフィアに向け攻撃してきた。

なのは「あっ、ユーノ君逃げて!!!」

フィア「的になるからな・・・」

ユーノ「・・・はい」

ユーノは半泣きになりながら、茂みに入ってしまった。

フィア「眠い・・・そして、めんどい・・・」

戦闘中とはおもえない言葉を口にするファイア。

その間にも木の根が迫ってくる。

RH『Flier fin』

ドドドドドゴン!!!!!!!!!!

レイジングハートから音声の流れ、なのはは空へと上がった。

フェイト・アルフ「ファイア!!!!!!!!?」

なのは「飛んで、レイジングハート!!!!!!!!もっと高く!!!!!!!!」

なのはの言葉にレイジングハートは呼応し、足に生えている桜色の翼が羽ばたき、更に上空へと昇る。

フェイト「……………っ!!!!!!!!」

アルフ「あんた、ファイアの妹だろう!!!!!!!!助けに行かないのかい!!!!!!!!」

木『オオoooooooo!!!!!!!!』

なのはが振り返る事もせず、木のお化けを見据える事に対して、フェイトは強く睨み、アルフは怒声をあげる。

なのは「大丈夫だよ!ファイアお兄ちゃんがこれぐらいでやられるなんて絶対ないから!!!!」

信頼しているから……自分の好意を寄せている人の強さを知っているからこそ……心から言える言葉

フェイト「ファイア!!」

アルフ「……えっ!？」

フェイトはなのはから視線を外し、ファイアが居た場所を見る。

砂煙が晴れるとそこには……

ファイア「我流剣舞 力技^{りよくぎ}“八重桜”」

木のお化けの根を斬り落としたファイアがいた。

なのは「ね……!!!!」

その姿は、ただの子供ではない……

木『オオオオオオオー!!!!!!!!!!』

何時もと雰囲気の違い黒髪の少年……

ファイア「フェイト、なのは!!!!俺がこいつをぶった斬る……!!!!!!!!!!お前達は砲撃の準備をしろ!!!!!!!!!!」

そして、この場の誰よりも存在感がある黒髪の剣使いが小太刀を構え、敵へと駆け出した。

ファイア「我流剣舞 二の型“柳”!!」

フェイト「す、凄い・・・」

フェイトは、木のお化けと戦闘をするファイアを見てポツリと口にした。

何故なら、ファイアは刀一本の使用のみで、敵を圧倒しているのだから・・・

アルフ「(生身で圧倒するなんて・・・ファイアは人間なのかい!?)」

敵の木の根を、必要最低限の動作で避け、斬り裂き、刀で受け流し、時には斬り裂いた根を踏み台にして攻撃してくる根を避ける・・・

その動作一つ一つに違和感が無く、流れるように舞っているようだ・

そう・・・・・・・・まるで、風に身を任せる“柳”のように・・・・・・・・

木『オオオオオオオオオー！！！！』

ファイア「・・・・・・・・“ハシれ”」

木のお化けはファイアが危険だと認知したのか、新たな木の根を全てファイアに向け、攻撃してくる。

ファイアは、全身に更に身体強化の魔法を施す為、魔法の鍵となるスペルを呟く。

ファイア「・・・・・・・・“疾風^{ハヤク}・・・・・・・・ハシれ”！！！！！！！！」

ファイア「・・・・・・・・“Over Drive”！！！！」

ドン！！！！！！！！

ファイア「フンツ・・・・・・・・！！！！」

スペルを言い終えると同時に、ファイアの速度が上がる・・・

先程の流れるような動きとは違い、疾風^{はやて}の如く敵の本体へと突き進

ありえない出来事に、なのは達は驚愕する。

バリアが紙のように斬れた・・・・・・・・・・そして、
何より敵の本体部分に“十文字”の斬撃が刻まれていたからだ・・・

ファイアの攻撃は横に居合で“一閃”・・・・・・・・その“一振り”で
二つの斬撃を“同時”に生み出したのだ・・・・・・・・驚かな
い筈がない。

呆然としているなのは達に、念話がかかる。

ファイア『なのは、フェイト！撃てっ！！』

ファイアの念話に、なのは達は我に返り砲撃の準備をする。

RH『Shooting mode』

なのは「いくよ！！レイジングハート！！！！」

なのははレイジングハートを砲撃型に変え、十八番となってきてい
る砲撃魔法を繰り出す。

なのは「撃ち抜いて！デイベイン！」

RH『Buster』

レイジングハートから桜色の砲撃が、木のお化けへと放たれる。

フェイト「・・・・・・・・貫け轟雷」

二人はジュエルシードからやや距離を取り、互いに見合いながら昨夜の事を話す。

フェイト「・・・っ・・・・・・・・・・だけど、譲れないから・・・」

BD『Device form』

なのは「私は・・・フェイトちゃんとお話がしたいだけなんだけど・・・」

RH『Device mode』

自身のデバイスだけではなく、自分のデバイスさえも心配するなのはに、フェイトは一瞬心が揺れるも、バルディッシュをなのはに向ける。

なのは「私が勝ったら・・・ただの甘ったれた子供じゃないってわかってくれたら・・・」お話し、聞いてくれる!!」

フェイト「・・・・・・・・!!!!」

なのはがフェイトに自分の話を聞いてもらう為に、戦う意志を伝えている頃・・・フィアとアルフは・・・

アルフ「戦闘に参加したって事は、私と戦うのかい??」

フィア「ダルいからやダ・・・それとも戦りたいの??」

ニコッ

アルフ「冗談抜きで遠慮するよ!？」

ファイアの言葉と目が笑っていない笑顔に、アルフは引き攣りながら拒否する。

ファイア「・・・・・・・・・・管理局・・・・・・・・・・か」

ファイアは怠そうに頭を掻きながら、そう呟いた・・・・・・・・・・
・

終

第7話 未来のシスコン登場・・・なの!!

海鳴臨海公園

二人の少女がジュエルシードをめぐる対峙している・・・

なのは「・・・・・・・・・・」

フェイト「・・・・・・・・・・」

なのはとフェイトが動き、ぶつかり合おうとした瞬間、両者の間に魔法陣が現れた。

魔法陣から現れた者は、片手でなのはのレイジングハートを掴み、もう一方の手に持った杖でフェイトのバルディッシュを防いだ。

「???」 「ストップだ!!!」

なのは「・・・あ」

「???」 「此処での戦闘は危険過ぎる!!!!」

フェイト「あ・・・」

突然現れた人に、二人はデバイスを簡単に止められ、呆然とする。

「???」 「時空管理局執務官 クロノ・ハラオウンだ! 詳しい事情を聞かせて貰おうか!!!」

クロノはなのはとフェイトを一瞥し、自身の役職を堂々と言った。

アルフ「くっ・・・!!」

ユーノ「時空管理局・・・」

ユーノが木の枝からユーノを眺めていた。

クロノ「まずは二人共武器をひくんだ」

クロノを含め、三人はゆっくりと地上へと降り立った。

クロノ「このまま戦闘行為を続けるなら・・・!!」

クロノは突如空から襲ってきた魔力の弾丸をシールドで逸らした。

アルフ「フェイト、撤退するよ！離れて！！」

アルフは次の魔力弾を撃ち、地面に着弾すると激しい爆風と砂煙がおき、視界が悪くなる。

クロノ「くっ……！！」

なのは「っ……あ……！！」

着弾前に飛び上がり、ジュエルシールドのもとへ向かうフェイトをなのはが見つける。

フェイト「（もう少し……）うわあああっ！？」

後僅かという所で蒼い魔力弾がフェイトを襲い、フェイトは避けきれず数発ともに受けてしまい墜落していく。

アルフ「フェイト！？」

なのは「フェイトちゃん……！！？」

アルフは急いで墜落していくフェイトを助けた。

クロノ「……」

なのは「ダメッ……！！」

再度魔力弾をアルフ達に撃とうとするクロノに、なのはが止めには

いる。

しかし、少し遅かったらしく無情にも撃ち出された魔力弾はアルフ達のもとへと向かう・・・

なのは「ダメー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」

フィア「やれやれ・・・追撃するのは感心しないな（魔法陣は見せなくなかったんだけどな・・・）」

フィアはアルフ達と魔力弾の間に割り込み、魔力弾を太刀と拳で薙ぎ払う。

そして、自分の魔力で作りだした設置型魔法陣の上に着地した。

「ファイア 少少お仕置が必要だ・・・な！！」

そう言って設置型魔法陣を蹴り、クロノへと突っ込む。

クロノ「な、何を……くっ……!!」

魔力弾を太刀と拳で薙ぎ払われ、呆氣に取られていたクロノは迎撃に遅れシールドを張る。

ファイア
「・・・Break」

パリン!!!

クロノ「なっ!?!」

しかし、フィアのスキルによりシールドは硝子のように割れ突破される。

フィア「とりあえず、海で頭冷やしてこい」

ドゴッ!!!

クロノ「かはっ!!!!!!!!!」

バチャッン!

バチャッン!!

バチャッン!!!

ボツチャーーーーン!!!!!!!!!!!!!!

クロノは三回海面を跳ね沈んでいった……

なのは・ユーノ「（（うわー………ひどっ………）（（「「

その光景を見て、なのはとユーノはクロノに合掌する。

ファイア『アルフ、今の内に退け・・・』

アルフ『ありがとう!!』

アルフ「逃げるよフェイト、しっかり掴まって!!」

フェイト「・・・う・・・アルフ・・・ファイア・・・」

ファイアはアルフ達の方に顔を向け、逃走を促す。

アルフはフェイトが落ちないように気をつけながらその場を後にした。

クロノ「一体何をするんだ!!」

アルフ達が立ち去った直ぐ後に、海から帰還したクロノがファイアに怒鳴ってくる。

ファイア「いやあ、女性に対する接し方になってないと思って・・・」

クロノ「そんな事で・・・大体、君も女せへブルバアアアアッ!!!!!!?」

バチャッン!

バチャッン!!

バチャッン!!!!!!

バチャッン!!!!!!

バチャッン!!!!!!

ボツ・・・・・・・・チャーーーーン!!!!!!

ファイア「よーーーーく頭冷やしとけ・・・・・・・・よーーーーくな・・・・・・・・」

クロノを蹴飛ばした張本人は黒いオーラを出していた。

なのは「ちよつと・・・・・・・・やり過ぎじゃない・・・・かな?？」

ユーノ「あの子がそう言ってしまうのは、しょうがないと思うけど・・・・・・・・」

ファイア「・・・・・・・・ユーノ、残念だよ。君までそんな事を思っていたなんて・・・・・・・・」

ユーノ「えっ・・・・・・・・!？」

ユーノが後ろを振り向くと・・・・・・・・

なのは「いえ・・・・・・・・別に」

そんななのはにフィアは黒い笑みを向ける。

なのはは思った・・・・・・・・フィアお兄ちゃんを怒らせては駄目だと・・・・・・・・

そして、この場は何とも言えない空気に包まれていた・・・・・・・・

時空間内 アースラ

アースラの一室に蒼色の魔法陣が浮かび上がり、4本の柱が出現し霧散すると、その場にファイ達が現れた。

なのは「・・・・・・・・ユーノ君・・・・・・・・ユーノ君、此処って一体・・・・？？」

ユーノ「時空管理局・・・・時空航空船の中だよね・・・・」

なのはは先程いた場所とは違う、見たことのない場所に一瞬で変わったので、不安そうに体のそこかしこに包帯を巻いている、フェレット・・・・・・・・ユーノに尋ねる。

ユーノ「えと・・・・簡単に言うとも幾つもある次元世界を自由に移動する為の船・・・・」

なのは「あ、あんまり簡単じゃないかも・・・・」

ユーノの説明不足・・・・・・・・ではないな。なのはにはもつと勉強させた方がいいな。

ファイ「要するに・・・・・・・・自分の知らない土地・・・・世界に行く為の乗り物・・・・例えて言うなら、飛行機で外国に行くみたいなものだ・・・・・・・・」

なのは「うーん・・・・何となくわかったかな・・・・・・・・」

まだ完全には把握していないが、まあいいだろう・・・・

ユーノ「大体そんな感じ・・・・世界と世界の狭間を渡るのがこの船で、それぞれの世界に干渉するのを管理しているのが、時空管理局

なの」

なのは「そうなんだ・・・」

大きな自動扉を抜けると、海水で服がびしょ濡れの少年・・・・・・・・クロノが、なのはとユーノに向けて言葉を発する。

・・・出来るだけファイアに視線を向けないように・・・

クロノ「ああ、何時までもその格好じゃ窮屈だろう?? バリアジャケットとデバイスは解除して平気だよ」

なのは「あ・・・そっかあ・・・そうですね・・・それじゃあ・・・」

なのははレイジングハートを待機状態に戻し、いつもの見慣れた聖祥の制服姿に戻る。

クロノ「君も元の姿に戻った良いんじゃないか？」

ユーノ「ああ、そういえばそうですね・・・ずっとこの姿でいたから忘れていました・・・・・・・・」

なのは「ほえ??・・・うえ!??・・・ああ」

ファイア「おお~~~~♪」

ユーノは発光し、人の姿へと戻る。その光景に、なのはは固まり、ファイアは目をキラキラさせている。

ユーノ「ふう・・・なのはにこの姿を見せるのは久しぶりになるのかな???」

ファイア「ユーノ・・・やるなく♪変身できるなんて・・・今度、教えてくれないか??」

ユーノに詰め寄りキラキラした目でユーノを見るファイア。

ユーノ「いや・・・これは変身じゃなく――」

なのは「ほえ?? えっ・・・うえ・・・え・・・えっ・・・ふえええええー！！！！！！！」

ユーノの説明を遮るように、なのはの絶叫がアースラ艦内全体に響き渡った。

ユーノ「な・・・なのは??」

なのは「ユーノ君ってユーノ君って・・・あの、その・・・何だ、だって・・・うそっ!?! ふえええー！！！！」

ファイア「うう・・・キーンときた・・・」

まだ混乱しているなのは・・・その横でなのはの絶叫を諸にくらったファイアが頭を叩いている。

クロノ「・・・君達の間で、何か見解の相違でも??:?」

ユーノ「えーと、なのは・・・僕達が最初に出逢った時って、僕はこの姿じゃあ・・・」

なのは「違う違う、最初からフレットだったよー!!!!」

混乱は治まった様だが、まだ驚きが残っているなのは・・・正直、面白い♪

ユーノ「あ~~~~~」

ポク・・・ポク・・・ポク・・・ポク・・・チーン

何処かの寺の見習い坊主が、何か閃いた時の音が聞こえたような・・・

ユーノ「あああああー!!!!」そうだそうだ、ごめんごめん。この姿見せてなかった・・・」

なのは「だよね!? そうだよね!!!? びっくりした・・・」

クロノ・ファイア「ああ~~~~~そろそろいいか??:?」

なのは・ユーノ「あ~~~~」

長くなりそうなので、俺とクロノが止めに入る。

クロノ「君達の事情はよく知らないが、艦長を待たせているので出来れば早めに話を聞きたいのだが……」

ファイ「……と言うわけだ。早く行くぞ……ふわぁぁぁ……」

ファイは面倒臭そうに頭を掻きながら足を進める。

なのは「あ……はい」

ユーノ「すみません……」

クロノは少し急ぎ足で先導し、4人は艦長の居る部屋へと向かった。

クロノ「艦長、来てもらいました」

なのは「あ……」

ファイア「ほう・・・」

クロノの案内でとある一室の扉を開くと、そこは純和風の部屋だった。

リンディ「お疲れ様まあ三人共、どうぞどうぞ楽にして♪」

なのは・ユーノ「・・・・・・・・・・はい」

ファイア「わかった」

内心、“この人が艦長？”と知っているなのはとユーノ・・・・・・・・・・
・ファイアは即座に返答しているが、多分・・・・・・・・何も考えていないの
であろう・・・・・・・・

そして、ユーノが何故ジュエルシードが地球にあるのかを話した。

リンディ「・・・・成る程、そうですか。あのロストロギアーーージュエルシードを発掘したのは貴方なのですね」

こんなに若い少年がロストロギアを発掘したことに感心するリンディ。

ユーノ「・・・それで、僕が回収しようと・・・」

リンディ「立派だわ」

クロノ「だけど、同時に無謀でもある!!」

ユーノ「・・・・・・・・」

クロノの言った言葉は正しい。戦闘経験や実力の乏しいユーノに、古代遺産の回収など自殺行為に等しい・・・・・・・・

なのは「あの・・・ロストロギアって何なんですか??」

ユーノ「ああ、それは・・・」

リンディ「遺失世界の遺産・・・と言ってもわからないわね・・・」

リンディがロストロギアの説明をしようとするが、早速専門用語（管理外世界においては）を出してしまう。

リンディ「ええっと・・・・・・・・次元空間の中には幾つもの世界があるの。それぞれに生まれ育っていく世界・・・その中に極稀に進化し過ぎる世界が在るの。技術や科学、進化し過ぎたそれらが自分達の世界を滅ぼしてしまつて、その後取り残された失われた世界の危険な技術の遺産・・・・・・・・」

クロノ「それらを総称してロストロギアと呼ぶ。使用方は不明だが、使いようによつては世界どころか、次元空間をも滅ぼす力を持つ事もある危険な技術・・・・・・・・」

リンディ「しかるべき手続きを持つてしかるべき場所に保管されていなければならない品物、貴方達が捜しているロストロギア――ジュエルシードは次元干渉型の“エネルギー結晶体”。いくつか集めて特定の方法で起動させれば、空間内に次元震を引き起こし最悪の場合、次元断層を引き起こす危険物!!!!」

リンデイの話しの途中にクロノが補足説明を入れる・・・

クロノ「君とあの黒衣の魔導師がぶつかった時に発生した振動と爆発・・・・・・・・あれが次元震だよ」

クロノの言葉に、なのはは昨夜あった事を思い出す・・・

クロノ「たった一つのジュエルシードが・・・全威力の何万分の一の発動でもあれだけの影響があるんだ。数個集まった時の影響は測り知れない・・・・・・・・」

ユーノ「聞いたことがあります・・・旧暦の461年・・・次元断層が起こった時の事」

ファイア「・・・・・・・・っ！！！」

クロノの言葉に、とある事件の事を思い出し口にするユーノ・・・

ユーノの言葉に、壁に寄り掛かっていたファイアがかなり動揺していた。

クロノ「ああ、・・・・・・・・あれは酷いものだった・・・・・・・・！！！」

リンデイ「隣接する並行世界が幾つも崩壊した・・・・・・・・歴史に残る悲劇・・・・・・・・」

ファイア「（あいつらによって起こされた悲劇の一つ・・・・・・・・）」

クロノは悲痛な顔で、言葉にするのも辛いようだ。

リンディは流石は艦長なだけあって、平然しているようだが、言葉の節々に隠しきれないものが滲み出ていた。

そしてフィアも平然としているように見えるが、組んでいる腕は服が破れるくらい強く握られていた。

リンディ「繰り返しちゃいけないのよ・・・」

フィア「(そう・・・二度やらせはしない・・・絶対に・・・)」

カチャカチャ

なのは「あっ・・・!!?」

なのはは緑茶に角砂糖を入れる音で我に返るような声を上げた。

フィア「・・・ふむ・・・今度試して見るか・・・」

なのは「フィアお兄ちゃん、お願いだからやめて・・・」

興味深そうに、角砂糖入りの緑茶——リンディ茶を見つめ、ポツリと呟くフィアなのはは慌ててやめるようお願いした。

リンディ「これより、ロストログア——ジュエルシードの回収については、時空管理局が全権を持ちます」

なのは・ユーノ「「えっ!?!?」」

これからの事は管理局が全て行うと言う言葉に、なのはとユーノは驚きと戸惑いの声を発する。

クロノ「君達は今回の事を忘れて、それぞれの世界に戻って元通りに暮らすといい」

なのは「でも・・・そんな・・・」

クロノ「次元干渉に係わる事件だ。民間人に介入して貰うレベルの話じゃない!!」

ファイア「・・・・・・・・随分と、勝手な事を言うのだな・・・管理局は」

クロノ「何!!」

なのはは納得できないようで、反論しようとしたが言おうとする前に、クロノが遮り民間人が係わる事を拒否する。

それを見兼ねたファイアが助け船をだした。

ファイア「そうだろうか??いきなり現れて、人の意見も聴かず権力で黙らせる・・・・・・・・そんなの誰も納得できるわけがない」

クロノ「う・・・・・・・・」

ファイア「それに異変があったにも係わらず、直ぐに対応しなかった君達も悪いと思うぞ・・・」

フィアの言葉は正論のため、クロノは何も言い返す事が出来ず、視線を向ける事しかできない。

フィア「……まあ、管理局という組織を知っていて、知らせもしないユーノも悪いがな……」

ユーノ「……はい」

俺はクロノの視線を気にせず、ユーノに視線を向ける。

ユーノは申し訳なさそうに俯いた。

リンディ「クロノ、フィア君の言っている事は正論だわ。」

リンディ「まあ、今日の所は帰ってもらって、今夜一晩ゆっくり三人で話し合って、それから改めて貴方達の意志を聞きましょう」

リンディの提案に、なのはは渋々だが了承する。

だが、俺はその提案が無駄になることを確信していた。

なのはが諦めるわけがない。とくに、フェイトとの繋がりを断たれるとなれば尚更だ。

クロノ「送っていこう。元の場所で良いね?」

ユーノ「ちょっと待ってください!! お話したいことがあるのですが……」

クロノ「……なんだい?」

立ち上がろうとしたクロノだが、ユーノの話しの内容を聞くために、座り直す。

ユーノ「なのは、レイジングハートを貸してくれるかな？」

なのは「ふえ?? あっ・・・うん」

なのはは疑問に思いながらも、レイジングハートを渡す。

ユーノ「レイジングハート、昨夜の映像データを展開してくれないかい??」

RH『あの時の衝突により、衝突以前の映像データは消失しておりますが・・・』

ユーノ「じゃあ、修復した直ぐ後の映像データを展開して」

RH『OK』

少しの電子音が響いた後、ユーノの横に映像データが展開される。

ユーノ「これを見てください・・・」

クロノ・リンディ「!?!?!?」

なのは「これってあの時の・・・」

ファイア「・・・」

その映像データに映る全身白一色の人物を見て、クロノとリンディが驚きをあらわにする。

ユーノ「次元震が起こった直後に介入してきた人物なのですが、“旅人”と名乗っていました・・・」

クロノ「時の・・・旅人・・・」

リンディ「間違い・・・ないわね・・・」

ざわざわざわざわ

なのは「えっ・・・えっ・・・!!」

クロノの言葉を聞き、クルー達もざわめきだす。

なのはは、何故みんなが驚いているのか分からず、あたふたしている。

ユーノ「やっぱりですか・・・これは僕の見解なのですが、多分この先も旅人は介入してくると思います」

リンディ「そうですね・・・」

なのは「あの・・・旅人さんって何者なんですか?????」

なのはが質問すると、クロノが答える。

クロノ「・・・英雄だよ。数多の次元世界における・・・」

リンディ「救った世界や人々は数知れず・・・正体不明で、姿も時代によって様々・・・唯一の特徴が全身を白一色の布で隠しているという事だけ・・・」

クロノ「（・・・僕にとっては偽善者だけだな・・・」

なのは「す、凄い・・・」

クロノとリンディの説明を聞き、何故みんなが驚いたのか納得するなのは。

ユーノ「・・・後、ファイア」

ユーノは、さっきから静かに壁に寄り掛かっているファイアに、声をかける。

ファイア「・・・ZZZ」

ユーノ「ちょっ、ファイア！起きて！！」

ファイア「ん??寝てないよ!??」

あまりに長い話だったので寝ていたファイア。しかも、授業中に先生に起こされた時に、言いそうな言葉を口に出す。

ユーノ「いやっ・・・寝て・・・まあ、いいや。ファイア、どうして今まで魔導師って教えてくれなかったの!?!?」

なのは「ふええ！？そうなの！！」

ユーノの言葉に驚くのは。それはそうだろう・・・自分の大好きな兄が、自分と同じ魔導師と言われたのだから・・・

ファイ「そうみたいだな・・・魔法の使い方の記憶しか戻ってないがな・・・」

ユーノ「そうなの？？」

ファイ「ああ・・・っといっても思い出したのは身体強化と障壁、あと設置型の足場魔法陣だけだし・・・」

まあ、過去の記憶も戻っているが話さないでおくとしよう。

リンディ「・・・わかったわ。旅人の事に関しては、今度の時まで調べておきます・・・貴方達は地球に帰りなさい」

なのは・ユーノ「・・・はい」

ファイ「わかった・・・」

こうして、俺達は話しもそこに地球へと転移した・・・

様々な思いを抱えて・・・

終

幕間 それぞれの思惑・・・・・・・・なの!!?」

S i d e 　　くクロノく

三人の民間人が管理外世界――確か地球だったかへ帰った後、シヤワーで海水を洗い流し服を着替え、エイミィと先程の高町　なのはと黒衣の魔導師の戦闘データを見ていた。

エイミィ「凄いや!どっちもA A Aランクの魔導師だよ!!」

クロノ「ああ・・・・・・・・」

エイミィが驚くのも分かる。管理局・・・・・・・・まあ、管理局だけ

ではないが・・・Aランクまでならばそれなりにいるのだが、Aランクから一気に数が減りAランクともなると更に少ないのは当然の事だ。

エイミィ「こっちの白い服の子は、クロノ君好みの可愛い子だし♪」

クロノ「エイミィ・・・そんな事はどうでもいいんだよー!？」

どうして母さんやエイミィといると真面目な空気にならないのだろうか。

エイミィ「魔力の平均値を見ても、この子で127万、黒い服の子で143万!!最大発揮時は、更にその3倍以上!!クロノ君より魔力がかなり上回っちゃってるね♪」

滅多に見る事の出来ない数値を見て、エイミィがやや興奮している。とりあえず訂正しないと・・・

クロノ「魔法は魔力値の大きさだけじゃない・・・状況に併せた応用力と的確に使用出来る判断力だろう!!」

エイミィ「じゃあこの子は??・・・」

そう言って映し出されたのは、ファイアの姿・・・

エイミィ「魔力の平均値は45万。最大発揮時はその2倍程度・・・
・・・だけど生身で魔法植物相手に圧倒している。・・・ありえない
よ・・・それにこれ・・・」

エイミィは、ファイアが木のお化けのバリアを紙のように斬り裂き十文字の斬撃を刻むシーンを指差し、驚愕する。

クロノ「ああ……恐らく希少技能レアスキルだろうな……多分、障壁破壊系の……僕のシールドも簡単に破られたしな……」

咄嗟とはいえ、生身の拳で僕のシールドを破るなんて普通ならまず出来ない。

何かしらのスキルがあるに違いない。

エイミィ「まあ、そんな顔しないで……信頼しているよ。アースラの切り札だもん、クロノ君は!!」

クロノ「むう……」

どうやら、顔に出ていたようだ。エイミィから励ましの言葉を貰うとは……

クロノ「(高町　ファイア……少し調べてみるか……)」

Side　　クロノ　　End

時の庭園

そこで狂人の魔導師――プレシアはある人物を待っていた。

プレシア「・・・・・・・・・・」

旅人「すまない、少し手間取った」

一つの強風がプレシアの前で吹き、旅人が現れた。

そして相変わらず男性か女性かわからない無機質な声で、プレシアに謝罪の言葉を言っている。

プレシア「・・・・・・・・まあ、いいわ。それで??」

旅人「準備の8割は終わった。このままいけば確実に成功する・・・・・・」

プレシア「そう・・・・」

準備が順調なことに安堵するプレシア。

旅人「・・・・・・・・アリシアが」

旅人「・・・・・・・・・・アリシアが生き返ったらフェイトはどうするのだ・・・・・・・・」

プレシア「あんなまがい物・・・・どうでもいいわ!!!!」

フェイトの事を思い出すのが嫌なのか、怒鳴るプレシアに旅人は言葉続ける。

旅人「・・・・では何故、人造魔導師を造ったのだ・・・・・・・・」

旅人「・・・・・・・・薄々感じていたのだろう・・・・」

旅人「・・・・・・・・記憶の刷り込みをしても、所詮それは他人の記憶を持っている一人の人間に過ぎない事を・・・・・・・・」

プレシア「・・・・・・・・」

凶星なのであろうプレシアは否定もせず、旅人の言葉を聞いている。

旅人「・・・・・・・・フェイトは君に褒めてもらおうと、認めてもらおうと必死で頑張っている。だから・・・・」

旅人はそこで一旦言葉を切り、そして・・・

旅人「・・・・・・・・家族として接してあげてくれないかな・・・・」

一つのお願いをプレシアに言った。

プレシア「・・・・・・・・わかつている・・・・・・・・わかつて
いるのよ！！！！あの子が私のために頑張っていることくらい・・・・・・・・」

プレシアの今まで咳止めていた思いが、溢れ出てきた。

その顔は狂気に魅せられた表情ではなく、娘にどう接すれば良いのかわからない母親の顔だった。

プレシア「・・・・・・・・造った初めはよかった・・・・・・・・私はアリシアと瓜二つのあの子を見て喜び、笑顔になったわ・・・・・・・・でも、気付いてしまった・・・・・・・・アリシアとは似ているけど違うと言う事を・・・・・・・・恐れてしまった・・・・・・・・これはアリシアを侮辱しているのではないのかと・・・・・・・・どうしたら良いのかわからなくなった・・・・・・・・自分の思いがわからずお仕置きと称して、あの子を傷つけた・・・・・・・・あの子に罪はないのに・・・・・・・・本当はわかっていた・・・・・・・・ただ、認めたくなかった・・・・・・・・」

旅人「・・・・・・・・プレシア、それは現実から逃げているだけだ・・・・・・・・ちゃんと向き合わなければいけない・・・・・・・・それにアリシアは侮辱しているとは思わないと思うぞ・・・・・・・・寧ろ、妹が出来たと喜びそうだ・・・・・・・・」

プレシア「ふふ・・・・・・・・今思えばそうね・・・・・・・・アリシアがそんな事思うわけがないわね」

旅人の言葉に、先程の重い空気が少し軟らかくなる。

旅人「では、この話し・・・・・・・・」

プレシア「ええ、わかったわ・・・・・・・・出来るだけ考慮しましょう」

旅人「・・・・・・・・ありがとう」

旅人はプレシアに背を向け立ち去る。・・・・・・・・だが不意に止まり・・・・・・・・

旅人「プレシア・・・・・・・・この言葉を覚えていてくれ・・・・・・・・」

プレシア「・・・・・・・・わかったわ」

旅人「No sacrifice, no gain・・・・・・・・”・・・・・・・・・・・・・・・・それでは・・・・・・・・」

そう言って旅人は消えた。恐らくどこかに転移したのだろう・・・・・・・・

そして、その場に残ったのは溜まっていた憑き物が落ちたような姿の、一人の魔導師だけだった・・・・・・・・

高町家

ファイアの部屋

ファイア「はぁ．．．．．ついに魔導師だとばれたか．．．」

ファイアは窓を開け、夜空を見上げながらため息を零す。

ドクンッ！！！！

ファイア「あぐっ！？」

突然の胸の痛みに耐え切れず、ファイアは床にうずくまる。

ファイア「．．．うぐう．．．．．————」

ファイアは苦しみながらも、何かを呟く。

そして、数秒後ファイアは少し息を切らしながらも立ち上がる。

ファイア「まだ．．．．．まだ俺は“ ”を集めなければなら
ない．．．．．」

そして少年は再び夜空を眺め．．．．．

ファイア」

あの日見た夢

とても悲しくて

過去の僕はどんな風に言い訳をしていたのだろうか

抗えない運命感じ

闇雲に抗う度に

あの日の君達という存在が

この想いを強くする

揺るぎない自分、未来を変えたくて

君達の強い眼差し（まなざし）を信じて

旅立った天^{そら} 一人涙流す

諦める事は したくないから

┌

少年は歌う・・・・・・・・理想を貫き通すために・・・・・・・・

少年は願う・・・・・・・・理想が叶うことを・・・・・・・・

歌声が消えた時、少年はそこにはいなかった・・・・・・・・

終

第8話 海上での共闘・・・なの・・・

高町家

フィアの部屋

午前4時、いつも通りに目覚まし時計が鳴り始める。

“・・・ふっ・・・ふっ!!・・・筋肉が・午前4時を・・・ふっ・・・お伝えします・・・ふっ・・・ふっ・・・筋に・・・!!!!”

ピッ

ファイア「・・・・・・・・最悪な目覚まし音だ・・・・・・・・というか誰の声だよ、これ・・・・・・・・」

俺は悪態をつきながらも着替え、道場へと向かった。

道場

キン！！ ガキン！！！！

激しい鉄のぶつかり合う音が響いている。

ファイア「・・・・そこっ！！！！」

恭也「甘い！！」

恭也の振り下ろした小太刀を避け、懐に入ろうとしたフィアだが、恭也のもう片方の小太刀がフィアの進行を阻む。

フィアは一旦、恭也から離れ距離をとる。

そして二人は静止し・・・刹那、恭也がフィアに向かって駆け出した。

恭也「（“神速”！！）」

恭也は高速を超える速さの剣撃をし・・・

フィア「・・・二の型“柳”」

フィアは自分の最も得意する“見切り”と“先詠み”を最大限に生かした型で迎撃する。

恭也「はあああー！！！！」

フィア「・・・・・・・・ふっ！！」

背後から振り下ろされる小太刀を、フィアは左手の短刀で受け流し、右手の太刀を“先詠み”をして自分の右横に振る。

ガキーンッ！！！！

甲高い音が鳴り、フィアは太刀が止められた事を理解する。そして、左横から迫り来る小太刀をバックステップで避け、再び目では視認

できない兄を“先詠み”を頼りに迎撃する。

このやり取りが数分続いた後、二人は道場の床に仰向けに倒れ込んだ。

恭也「はあ、はあ……ファイア、いつの間に強くなった??」

恭也「今まで“神速”を使った戦闘で、お前は一度も勝てなかった……なのに、さっきの戦闘ではほぼ互角の戦いをした。」

ファイア「………防御を重点にした戦い方に変えたただけだ」

俺は少し考えた後、恭兄にそう言ったが、それだけではない……

元々、“柳”という剣舞の型は、自分より強い者に負けないように防御に重点をおいた型だ。

あくまでも“負けないように”なので、勝つ事は難しい。現に、今まで何度か善戦はあったにしても、勝った事や引き分けた事は一度もなかった。

なぜなら、“神速”を“見切る”事や“先詠み”で行動を予測する事が出来ても、身体が恭兄のスピードについていけない。

今回、ほぼ互角に戦えたのは身体強化の魔法を使ったからである。

まあ、それも恭兄が慣れていなかったからであって、慣れてしまえば勝率は3割……いや、2割といった所だろう。

恭也「……………まあ、いいか。ところでなのはは何の目的で学校を休んでいるんだ?？」

フィア「何をしているかは言えないが、なのはは自分の信念を貫くためにやっているよ……………」

恭也「……………危険な事か?？」

フィア「大丈夫、命の危険はないよ……………」

一応、そう言っておかなければこのシスコンは“俺”を（ここ重要）攻撃してくるから……………」

恭也「……………なんか失礼な事、考えなかったか?？」

フィア「考えてないぞ……………」

恭也「そうか、なら昼食を食いに行くか」

ふ……………危ない危ない。恭兄の事だから、即答しなければ怪しまれていただろう。

フィア「……………なのは、フェイト……………無茶をするなよ」

フィア「……………俺も、俺のすべき事をしないとな」

俺は10日前に家を空けた妹と、悲しい瞳をする少女の事を心配しながらも昼食を食べるため道場を出た。

海上

フェイト「アルカス・クルタス・エイギアス・・・煌めきたる天神よ、いま導きの元、降りきたれ・・・バルエル・ザルエル・ブラウゼル・・・」

そこで少女が、大掛かりな儀式魔法——天候操作魔法を発動している。

アルフ「（ジュエルシードは多分海の中、だから海に電気の魔力流を叩き込んで強制発動させ位置を特定する・・・そのプランは間違っていないけど・・・でも、フェイト!!!）」

晴れていた空は、黒雲に覆われ雨を降らせる。

フェイト「撃つは雷、響くは轟雷・・・アルカス・クルタス・エルギアス・・・!!!!」

巨大な魔法陣からは雷がほとばしり、フェイトの周りに九つのスフ

イアが形成される。

フェイト「はあああああー！ー！ー！ー！！！！！！！！」

九つのスフィアから轟雷が撃ち込まれ、その後も雨が強くなり突風が吹き荒れ、黒雲から次々と雷が海へと落ちる。

これはフェイトの魔法の中でも上位に位置する魔法――サンダーフォールである。

フェイト「はあ、はあ・・・っ・・・見つけた、残り6つ！！！！」

海から青白い光の柱が、6つ空高く昇る。

アルフ「（これだけの魔力を撃ち込んで、更に全てを封印して・・・こんなの、フェイトの魔力でも明らかに限界越えだよ！！）」

フェイト「アルフ、空間結界とサポートをお願い！！！！」

アルフ「ああ、任せといて！！！！（・・・何があろうともアタシがフェイトを守ってみせる！！！！）」

青白い光は竜巻と成り、海の水を空へと運び荒れ狂う。

フェイト「行くよ！バルディッシュ・・・頑張ろう！！！！」

フェイトはジュエルシールドを封印するために、その小さな体で巨大な竜巻に向かっていった・・・

アースラ

リンディ「呆れた・・・とんでもない無茶をするわね、この子!!」

クロノ「無謀ですね・・・間違いなく自滅します。アレは個人の出せる魔力の限界を超えている!!!」

なのはがブリッジに着き、最初に目にしたのは、フェイトが荒れ狂う海で蒼雷がほとばしる中、ジュエルシードを封印しようとしている姿だった。

なのは「フェイトちゃん!!あの、私急いで現場に――」

クロノ「その必要はないよ」

なのは「えっ・・・!」

クロノ「放っておけば、あの子は自滅する」

なのは「っ!!!?」

フェイトの下に向かおうとするなのはに、クロノが信じられない言葉を発する。

クロノ「仮に自滅しなかったとしても、力を使い果たした所を叩けばいい」

なのは「でもっ!!!」

クロノ「今の内に捕獲の準備を」

クルー「了解」

なのはがクロノから映像に映るフェイトを観ると、蒼雷がフェイトとアルフに襲い掛かった瞬間であった。

なのは「・・・・・・・・」

リンディ「私達は、常に最善の選択をしなければいけないわ。残酷に見えるかもしれないけど、これが現実・・・・・・・・」

なのは「でも・・・・・・・・!!」

????『行かせてあげようか????』

なのは「!!!」

リンディやクロノの言う事はわかるが、納得のできないなのはに、誰かから念話がくる。

なのは『誰っ!?!』

??? 『・・・ただの旅人だよ』

なのは『旅人さん!??』

念話している相手が旅人だとわかり、驚くのは。旅人はそれに構わず話を進める。

旅人『私も助けに行きたいのだが、生憎もう少し時間が掛かる。私の代わりにあの子を助けてやってくれないか?』

なのは『行かせて下さい!!!』

旅人『ありがとう・・・君を送る前に一つ聞きたい。君はあの子に何を言いたいのかな??』

なのは『それは・・・』

旅人の質問に、自分の気持ちに違和感があるのはは、返答出来ずにいた。

旅人『まだ・・・わかっていないみたいだね。でも、その気持ちを忘れないで。それが君を強くするから・・・』

なのは『はい!!!』

旅人『じゃあ、私の今から言う言葉を復唱して!!!!・・・』

“私は白い鳥――”

なのは“私は白い鳥――”

クロノ「?」

突然、呟きだしたなのはに首を傾げるクロノ。どうやら気付いていないようだ。

旅人『――自由に次元^{そら}を渡り 思いを伝える――』

なのは「――自由に次元^{そら}を渡り 思いを伝える――」

旅人『――さあ、飛ぼう 次なる次元^{そら}へと――』

なのは「――さあ、飛ぼう 次なる次元^{そら}へと――」

旅人『――この思いを誰かに伝えるために――』

なのは「――この思いを誰かに伝えるために――」

クロノ「おい、何を詠唱しているんだ!!!」

ようやく気付いたクロノ。だが、既に遅く詠唱が完成する。

旅人・なのは「『――“Migratory bird”（渡り鳥）』」

詠唱が言い終わると同時に、なのはの足元に懐中時計に八枚の翼を持つ鳥が刻まれた銀色の魔法陣が浮かび上がり、なのはの姿が徐々に薄くなっていく。

クロノ「これは転移魔法!!!」

なのは「ごめんなさい。高町　なのは、指示を無視して勝手な行動を取ります!!」

その瞳に宿るのは決意の光・・・

絶対に助けるという、強い意思を持って、白き少女は黒衣の少女の下へと、飛び立った・・・・・・・・・・

大空の雲の上、そこに銀色の魔法陣が描かれたかと思うと一人の少女が現れた。

なのは「行くよ! レイジングハート!!」

その一人の少女――なのはは始動キーを紡いでいく・・・これからの戦闘に覚悟を決めるように

なのは「――風は空に――星は天に――輝く光はこの腕に――不屈の心はこの胸に！レイジングハート、セーットアップ！！」

RH『stand by ready set up』

なのははバリアジャケットを着用し杖をその手に、飛行魔法によりゆっくりと降りて行く。

フェイト「！！！」

なのは「・・・！」

降り立ったなのはとフェイトの視線が交差する。

アルフ「フェイトの邪魔をするなぁー！！！！」

アルフはなのはがジュエルシールドを奪いに来たと思い、襲い掛かって来た。

ユーノ「違う！僕達は君達と戦いに来たわけじゃない！！」

だが、少し遅れて来たユーノの防御壁により立ち止まる。

なのは「ユーノ君！！来てくれたの！」

フェイト「!?!」

ユーノ「うん、なのはなら絶対に行くと思って、準備していたんだ。でも、まさか転移魔法まで使えるなんてね……」

なのは「私は復唱しただけだよ。送ってくれたのは旅人さん」

ユーノ「やっぱりか」

旅人『……話はそれぐらいにして、早くしてくれるかな。少し前からやっているんだが、いい加減防ぐのが面倒だし』

なのは・フェイト・アルフ・ユーノ「「「えっ!?!?」」「」」

なのは・フェイト・アルフ・ユーノは、念話の主を見つけるため、それぞれ辺りを見渡す。

なのは・フェイト・アルフ・ユーノ「「「あっ!?!」」「」」

四人が自分達より上空を同時に見て声を漏らした。

そこには、蒼雷をたった一人、銀色の魔法障壁シールドで防ぐ旅人の姿があった。

旅人『今の状況がわかったかな?』

念話で相変わらず無機質な声が響く。だが、なのは達には若干怒っているように思えた。

なのは・フェイト「すみません」

ユーノ「と、とりあえずジュエルシールドを停止させないと酷い事になる！！！」

アルフ「そ、そうだね・・・サポートするよ！！」

二人は竜巻を楔で抑え付けた。

なのは「フェイトちゃん、手伝って！ジュエルシールドを止めよう！！」

なのははデバイスで、己の魔力をフェイトに供給する。

BD『Power charge』

バルディッシュから音声が流れると、今にも消えそうだった魔力刃が蘇る。

なのは「二人できちんと半分こ！！！！」

フェイト「・・・ありがとう・・・封印・・・しよう」

なのは「ユーノ君とアルフさんが止めてくれてる。だから今の内！二人で“せーの”で一気に封印！！」

RH『Sealing mode setup』

BD『Sealing form setup』

レイジングハートに続くように、バルディッシュも己の意志で形態

を変える。

フェイト「バルディッシュ……うん、行こう!!!」

フェイトはバルディッシュを構え、ジュエルシードの元へと向かう
なのはを追い掛ける。

なのは「（一人ぼっちで寂しい時に一番してほしかった事は、“大丈夫??” って聞いてもらう事でも、優しくしてもらう事でも無くて……）」

なのはは足元に巨大な桜色の魔法陣を展開し、フェイトに顔を向けると、フェイトもなのはの方を見ていたのでウインクして微笑んだ。

なのは「デイベインバスターフルパワー、いけるね!!!」

RH『All right my master』

フェイト「……!!!」

フェイトも足元に、先程と同じ程度の巨大な魔法陣を展開した。

なのは「セーラーのっ!!!!!!!」

フェイト「サンダー」

なのは「デイベイン」

フェイト「レイジーー!!!!」

なのは「バスターー!!」

フェイトの蒼雷をも飲み込む金色の雷が、竜巻に襲い掛かり、なのはの今まで一番太い桜色の砲撃が竜巻を薙ぎ払っていく。

旅人「（凄まじい威力だな。とりあえず結界を張っておくか・・・）」

竜巻が可哀相なぐらいの光景が目の前に広がり、少し感心する旅人。しかし、直ぐさま結界を張り、辺り魔力の余波と衝撃波がいかないようにしていた。

アースラ　ーブリッジー

エイミィ「ジュエルシード六個全ての封印を確認しました!!」

映像を見ている全てのクルー達は、驚き言葉を失っている。しかし、クロノはその言葉とは別の所に視線を向けていた。

クロノ「やっと見つけた。あの偽善者を・・・。」

リンディ「・・・・・・・・・・」

憎しみを表わにするクロノに、母であるリンディは黙ったまま複雑な顔を浮かべている。

クロノ「艦長、転移魔法の使用許可を・・・！！！」

リンディ「・・・・・・・・わかったわ。転移魔法の使用を許可します。ただし、自分を見失わない事」

許可しなくても転移するだろうと思ったリンディは、忠告をし転移魔法の許可をした。

クロノ「了解です。では、時空管理局執務官　クロノ・ハラオウン　転移します！！！」

本当にわかったかどうかは定かではないが、クロノは返事だけするとなのは達のいる海上へと転移した。

リンディ「・・・・・・・・・・はあ」

クロノが転移した後、リンディは人知れず一人ため息を零した。

海上

なのはとフェイトの間に青白い光の柱が天へと昇り、ジュエルシードが浮かび上がり、空からは大雨が降ってきている。

なのは「（やっと、やっとわかった……私の気持ち。私がフェイトちゃんに言う言葉の答え……同じ気持ちを分け与える事、寂しい気持ちも悲しい気持ちも半分こに出来る事。・ああそうだ、やっときちんと形になった）」

なのははやっとフェイトに伝えたい言葉——“想いの形”に気付いた。

なのは「（私、この子と分け合いたいたいんだ）」

フェイト「……」

フェイトは何かを感じ、なのはに顔を向けている。

なのは「お友達になりたいんだ」

フェイト「あ……!!」

雨は何時の間にか止み、雲の隙間からは太陽の光が二人を優しく包んでいた。

旅人「（やっと気付いたな。寂しい気持ちも悲しい気持ちも分け合って、少しでもわかり合おうとする……他者を思う気持ち。その想いの強さが君を強くする）」

なのはが、自分の気持ちに気付いた事に感心する旅人。

フェイト「……私は……………なっ!!!!」

クロノ「悪いけど、話はそこまでだ。君を連行する!!!!」

フェイトは戸惑いながらもなのはに言葉を返そうとするが、突如現れたクロノによってバインドで拘束され遮られる。

そしてクロノの手には六個のジュエルシードが握られていた。

なのは「フェイトちゃん!!!!」

クロノ「今からアースラに転そ……………うわっ!!!!」

旅人『（馬鹿野郎!!!!避ける!!!!）』

フェイトをアースラに転送させようと準備する前に、旅人がクロノを蹴り飛ばした。その瞬間、

ズガンッ!!!!!!

先程の蒼雷より数倍威力が強い、次元から撃たれた紫色の雷が、旅人を襲い掛かった。

なのは・フェイト「旅人さん!!!!」

たくさんの煙が立ち上り、魔力の余波と衝撃波が広がる。なのはとフェイトは旅人の安否を呼びかけた。

やがて煙が晴れていき、旅人の居た位置を見ると、

旅人『D h i m e n j o n g a t e o p e n N o 0 7 A i
a s ー ー 次元ゲート 開門 ナンバー07 アイアス（投槍を
防ぎし英雄の円盾）』

上空に手を翳し、何事もなかったように立たずむ旅人の姿があった。その手の上には見る者を呆けてしまう程、美しい盾が展開されていた。

銀色に輝き、淵にはギリシャ文字が刻まれている。そして、盾の中心からは蕾が開くように、七枚の虹色の花びらが描かれていた。

旅人『ほら、ジュエルシールドは半々だ』

なのは・フェイト「「あ、ありがとう」」

旅人はなのは達に近づき、それぞれに三つずつジュエルシールドを手渡した。そして呆然としているクロノに、

旅人『さっきのお前は最低だ。それともう少し冷静になれ』

と念話で言った後、風のように消えた。

アルフ「フェイト・・・私達も帰ろう」

なのは「レイジングハート、ジュエルシールドを」

RH「All right my master」

フェイト達はこの場を去り、なのははレイジングハートの中にジュエルシードを収めた。

ユーノ「とりあえず、僕達もアースラに戻ろう」

なのは「・・・うん」

クロノ「・・・・・・・・」

そして、なのは達もアースラへと帰還した。

アースラ　ーブリッジー

旅人が海上から消えた直後、突如アラーム音が鳴り響く。

エイミィ「次元干渉！？別次元から本艦にて、先程と同じ魔力攻撃来ます！あ、！！あと六秒！！！！」

エイミィの報告後、直ぐに紫色の雷がアースラを襲う。

ズガガーン!!!

エイミィ「きゃあー!!」

リンディ「っ! (次元干渉の魔法・・・かなりの高魔導師ね。今回の事件の黒幕かしら)」

クルー達が大きな揺れに悲鳴をあげている中、リンディは事件の終幕に近づいてきている事を感じていた。

リンディ「こちらの損壊はどれくらい調べて!!」

紫電が去ると、すぐにエイミィに指示を下す。

エイミィ「アースラの損壊はありません!!」

リンディ「どういう事??」

損壊がない事に、疑問を持つリンディ。しかし、その疑問はすぐに解決した。

エイミィ「わかりません・・・艦長! アースラの上に魔力反応確認!!」

リンディ「(まさか) 映像に映して!!」

エイミィ「はい!!」

数秒経過し、ブリッジに映像が展開される。そこには旅人が立っていた。

そして旅人は一瞥すると、指を鳴らし足元に魔法陣が出現すると、一瞬の内に消えた。

リンディ「補足を!!!!」

エイミィ「駄目です。ランダムに連続転移しているため補足できません!!!!」

リンディ「（取り逃がした事は名実、とりあえず今は・・・）ふう、それではクロノ執務官達が戻って来るまで待機」

こうして、一人の少女が自分の気持ちに気付いた共闘は終わりを迎えて、物語は終幕へと加速していく……………

終

十万ヒット記念なのッ♪♪(前書き)

作者「風邪が治ったので頑張って書きました!!!!!!」

ファイア「当たり前的事だから、威張るな」

作者「相変わらず、作者に冷たい主人公ですね。どうしてこうなったのか……………」

ファイア「お前のせいだろボケ」

作者「みよんにいらいらしているな」

ファイア「最近、俺の出番が少ないからな」

作者「……………あゝっ」

ファイア「イラッ」

作者「逃げ……………ぶべらバア!!!!!!」

なのは「ファイアお兄ちゃんが作者をぶっ飛ばしているので、代わりに私が言うよ」

なのは「魔法少女リリカルなのは 〱時の旅人〱 十万ヒット記念小説 始まります……………」

.

十万ヒット記念なのッ♪

作者「十万ヒットだ〜!!!!」

フィア「この小説がこんなに読まれているとは……………」

なのは「作者はヘタレなのに……………」

フェイト「同感だね」

作者「やった〜やった〜♪」

フィア・なのは・フェイト「「ウザイ!／の!／よ!」」

作者「ヘグエっ!?!」

作者は奇声を出し、その場に倒れた。

フィア「アホはほっというて、前回の前書き通り俺の剣舞の説明をする。えっと……………」

ゲシッ ゲシッ！！ ガサゴン

ファイアは気絶している作者を蹴り、仰向けにして作者のポケットをまさぐる。

ファイア「――・・・あった、あった

我流剣舞

御神真刀流 小太刀二刀術をファイア自身が使いやすいようアレンジした技術。美由希が舞のようだと言ったことからファイアが名付けた。

我流剣舞 力技 八重桜

斬撃を流れるように八回、相手にぶつける剣技。しかし、一度防がれると大きな隙ができるため、通常あまり使用しない。

我流剣舞 二の型 柳

“海上での共闘・・・なの・・・”で説明した通り、ファイア自身の得意とする“見切り”と“先詠み”を最大限に発揮する型。作中では自分より強い相手に有効とあるが、弱い相手や互角の相手にも有効なオールマイティの型でファイアが好んでよく使う。

我流剣舞 居合 紫電昇華

自分の強化した身体を最大限に使った剣技。ファイア自身の最高の技。身体を限界まで捻り、更に身体強化した腕を横薙ぎに振るう。紫電の如く速く、一撃で相手を倒すために編み出した技。その斬撃はもはや魔法の域に在り、一振りで縦と横の軌跡を同時に生む。ただし、この剣舞は“Over Drive”と併用しないと使用できない。

Over Drive

ファイアのできる魔法の一つ、身体強化をより強く発揮させるための鍵^キスぺル。

まあ、こんなところか……………」

フェイト「これは大分チートだよ……………」

なのは「というか、こんな事書いているなら早く更新しなよ」

作者「相変わらず、精神的に痛め付けるな……………」

ファイア「当たり前だろう。作者はそのためにいるのだし……………
(復活が早くなってるな)」

なのは「全力全壊なの♪♪」

フェイト「・・・バルディッシュ」

作者「・・・・・・・・このままでは、話が進まないからやめて!!!!」

なのは・フェイト「・・・チツ」

作者「キャラ全然違うよね!!!!」

フィア「早く話を進めろ!!!! 駄目作者」

作者「はいっ!! 今回は十万ヒットを記念してゲストをお呼びしたんですが・・・・・・・・あれえ???」

フィア「いないな」

なのは「いないの」

フェイト「いないね」

作者「あれえ・・・どうしてだ??」

フェイト「作者、嘘はいけないよ??」

作者「いやっ、違っ」

なのは「作者、惚けるのはよくないの」

作者「だから話を聞ミギャー!!!!!!」

チュドーン♪

ファイ「ところでさっきから気になっていたのだが、このダンボール箱は何だ??」

倒れている作者の横に、“なまもの生物”と書かれたシールが貼られているダンボール箱が二つある。

よく見ると一つはガタガタと小刻みに震えている。

フェイト「なまもの生物って何が入っているのかな??」

ファイ「この大きさだと鯖かな？」

なのは「えっ！これナマモノって読むんだ。てっきり、イキモノって読むのかと思ったよ!!」

ファイ・フェイト「……………」

なのは「どうしたの??」

ファイ「何でもない・・・なのは、フェイト帰るか!!」

フェイト「うん!!!!」

なのは「ファイお兄ちゃんがそう言うなら・・・」

???「ちよつと待てええー!!!!!!!!」

大声が響き渡り、少し小柄な青年がダンボール箱を突き破って出て来た。

フェイト・ファイ「「やっぱり／か」」

なのは「ふええええー！ー！！？？」

作者が復活するまで少しお待ち下さい

〵NOW Loading〵

作者「俺ふっか〵〵つ！！！」

ファイ「殴るぞ」

作者「ひい！！で、では紹介いたします。“なのはSS・free dom”より、阿部隆浩さんです」

隆浩「どもー阿部隆浩でーす」

作者「そもそも一人、“魔法少女リリカルなのはStriker
S Caliver&P;phantom”より、神藤昶さん・
・ってあれ??」

キヨロキヨロ

ファイ「どうした??」

作者「いや昶さんの姿が見えなくて」

隆浩「昶先輩ならあそこに居るよ」

隆浩が指差す方向には、未だ放置されている、未開封のダンボール
があった。

ファイ「まだ入っているのか?物好きなだな??」

作者「物好きというか変人じゃないか?」

隆浩「その解釈は面白いけど違うよ。単に気絶しているだけだ」

作者「何故に??」

隆浩「いやーオイラが先輩を迎えに行った時、“女装させられるか
ら嫌だー!ー!ー!ー!”とか言いながら二階堂さん(作者)
から逃げていたから、手刀で気絶させてダンボール箱に梱包してみ

ました♪♪♪」

フィア「ナイス♪」

作者「何がナイスだよ！とりあえず起こさないと！！！」

作者「おゝい、大丈夫かゝ」

作者はダンボール箱を開け、気絶している昶の肩を揺する。すると、昶は目を少し開け、すぐに目を見開く。そして……………

昶「隆浩……………！！！！！」

作者「俺こんな役回りばかり……………！！！」

何故か作者を全力で殴打した。

作者が再度復活するまでお待ち下さい……………

……………なうろーでいんぐ……………

作者「俺復か――」

ファイア・隆浩「それはもういい」

作者「あい・・・それではあらためて、“魔法少女リリカルなのは Strikers Caliver&Phantom”より、神藤昶さんです」

昶「さっきは取り乱してすみません、神藤昶です」

ファイア「気にするな。この作者はある意味無敵だ」

隆浩「昶先輩ダメですよ。簡単に人を殴ったりしたら」

昶「テメエのせいだろ!!!いきなり現れて手刀で気絶させやがって!!!」

隆浩「いいじゃないですか。とても楽しかったですよ・・・..
おいらが」

昶「くうーー!!!」

ファイア「言い争っているところスマンが、俺特製の抹茶と栗最中だ。よかったら食べてくれ」

昶「ありがとうございます」

隆浩「あつ、どうも。……所で魔王と死神はどこ行ったんだ??」

フィア「ん?? ああ、なのはとフェイトなら作者が地球に帰したって言ってたぞ。馬鹿作者だから、あんまり人が多いと話がうまく書けないんだよ……」

作者「グハッ!!」

隆浩「ホントに使えないな、作者」

作者「ドフエツ!!!」

昶「もう止めろ! 作者のLPはもうとっくに0だ!!!」

フィア・隆浩「U・R U・S A・I ♪ H A・N A・S E ♪」

昶「仲良いな、おい!!」

フィア「話が変わるが作者、隆浩と昶の強さはチート級だと思わないか??」

隆浩「何言ってるんですか。昶先輩はともかく、おいらは弱い子羊ですよ!!!」

昶「テメエが弱い子羊だったら、ほとんどの奴が弱い子羊だよ!!!」

作者「うゝん、あらためて見るとやっぱりチートだよな、隆浩と昶の能力……ウチの主人公が可愛く見えるよ」

隆浩「ちなみにファイア先輩の能力は??」

作者「それなら………ほい、設定書」

昶「どれどれ……?」

隆浩「フムフム………十分チート
だろ!」

昶「バリアブレイカー“障壁破壊者”あるからシールド無意味だし」

隆浩「御神真刀流　小太刀二刀術を会得しているから陸戦はチート級だろ」

ファイア「隆浩、俺は御神真刀流　小太刀二刀術を会得はしているが使わない………いや、使えないと言った方が正しいな」

昶「どういう事だ??」

ファイア「俺の身体が壊れるんだよ、御神真刀流　小太刀二刀術の技を使うと………神速使った日には一週間は身体が動かなかったし……」

隆浩「うええ、つらいな」

昶「つということは、ファイア先輩が使えるのは……」

ファイア「我流剣舞と身体強化、部分障壁、設置型魔法陣の4つだけだ」

隆浩「それでもおいらはチートだと思うな」

昶「だからお前がそれを言える立場じゃないだろ!!!!」

作者「まあ、この話はまた今度にして……………」

昶・隆浩「立ち直るの早っ!!!」

作者「なのはとフェイトから、フィアと昶と隆浩にプレゼントを預かったんだ。ほい」

フィア「…………ウサ耳スクール水着？」

昶「…………ネコ耳メイド服??」

隆浩「…………トラ耳チャイナドレス??」

フィア・昶・隆浩「……………」

ダッ!!!!

作者「あっ!!!逃げるな!!!!」

フィア・昶・隆浩「…………誰が」

隆浩「…………スクール水着／メイド服／チャイナドレスなんて」

昶「着るかーーーーー!!!!!!」

作者「まあ、逃げてでも無駄だけどな……作者ご都合スキル
発動!」コスチューム・チェンジ“CT”!!!!!!」

作者がスキルを宣言すると、ファイア・昶・隆浩の身体が光に包まれる。

そして、光がおさまると可愛いらしい女せ――

ファイア・昶・隆浩「「女性じゃない!!!!」」

作者「ナレーションにツツコむなヨボロバっ!!」

ファイア「よし!!作者は逝なくなった。今のうちに服を脱ごう」

隆浩「おいら、着ると思ってなかったよ……着るのは昶先輩だけだと思っていたのに」

昶「俺は確定なのかよ!!まあ、さっさと脱……
・げない!!!!」

???「無駄だよ……作者に破れない+脱げないようして貰ったから」

???「それに隆浩、私の事また魔王って言ったよね??」

ファイア・昶・隆浩「「ビクッ!!!!!!」」

昶「フェイト……先……輩??」

隆浩「魔・・・王」

ファイア「地球に帰ったんじゃ・・・・・・・・」

フェイト「あれは嘘だよ。作者に脅は——お願いして、帰ったって言ってもらったんだ」

昶「今脅迫って言ったよね!!!!」

フェイト「気にしちゃ駄目だよ」

ニコッ

ファイア「笑顔怖い・・・何故か怖いよ!!!!」

なのは「まあ、それはおいといて撮影会だね♪」

フェイト「だね♪♪」

なのは「その後、私は隆浩と“お話し”しないと・・・・・・・・ね♪」

隆浩「い、」

ファイア・昶・隆浩「「嫌だ————!!!!!!」」

作者が復活・・・・・・・・・・はどうでもいいけど、フィア・昶・隆浩の撮影会とお話しが終わるまで少々お待ち下さいお待ち下さい♪♪♪

Please waiting

作者「ソロ○ンよ!!!! 私にかえぐつ・・・・・・また気絶させる気か!!!!」

フィア「・・・・・・・・・・死ぬか??」

作者「すみません」

なのは「立場が低い作者だね・・・・・・・・・・さてと、さっき撮った写真をFM3のサイトに貼らないと・・・・・・・・・・」

フィア「FM3って、あの逝かれた集団のサイトか?? やめろ! 兄

を社会的に抹殺する気か!!」

なのは「もう何十枚載せているから大丈夫だよ」

フィア「何が大丈夫かわからねえー!!」

昶「不憫な」

隆浩「というか、ボロボロのおいらに掛ける言葉はないの??」

フェイト「あれは隆浩が悪いよ」

昶「自業自得だな」

隆浩「畜生ー!!」

作者「さて、そろそろお別れの時間だな」

フィア「今回は何をしたかったか分からんな」

作者「んー、しいて言うなら暇つぶバアらぁッ!!」

フィア「ふう・・・とりあえずこれで終わりらしいから、お土産に俺特製の三色団子と翠屋のケーキを持ってっくれ」

隆浩「なんかおいら此処に来てすごく疲れたんだけど・・・」

昶「俺もだ」

フィア「また作者の思い付きで喚ばれるかもしれんが、その時はよ

ろしくな」

昶「はい、こちらこそ」

隆浩「よろしくう!!!」

そして、二人の足元に魔法陣が浮かび上がり二人は消えた。

ファイ「行ったか・・・・・・・・・・・・・・・・こんなへボ作者の小説だが、魔法少女リリカルなのは　　（時の旅人）　　をよろしく頼む・・・」

ファイ「それではな・・・・・・・・・・」

そして、誰も居なくなつた。

第9話 伝えたい・・・だけど、伝えられない想いの・・・

なのは「もし」

フェイト「もし、私達がもっと」

なのは「違う場所で」

フェイト「違う出会いをしていたなら」

なのは・フェイト「きっと仲の良い友達になれた筈」

なのは「だけど、それはif^{もしも}の話」

フェイト「現実はとても残酷で」

なのは「私達は敵同士」

フェイト「想いを伝えたい。けど、伝えられなくて」

なのは「気持ちを分けてほしい。でも、分けてもらえなくて」

フェイト「だから、せめて最後まで自分の想いを貫こう」

なのは「だから、最後まで想いを貫こう。想いを分け合ってくれるまで」

なのは・フェイト「そう、あなたに!!!!」

ファイア「この物語の結末」

旅人『それは誰にもわからない』

ファイア「交差する想い」

旅人『伝えたいけど、伝えられない』

ファイア「伝えてしまうと、自分の決意が揺るぐような気がする」

旅人『だけど、物語は刻一刻と加速していく』

ファイア「想いを伝えられないまま」

ファイア「魔法少女リリカルなのは　　時の旅人　　始まるぞ」

時の庭園

フェイトとアルフが時の庭園に転移すると、プレシアと旅人がいた。

フェイト「・・・旅人さん」

旅人『・・・』

旅人は黙ったまま壁にもたれ掛かっている。

プレシア「フェイト、ジュエルシードはどうしたの?？」

フェイト「あ、あの、ごめんなさい母さん・・・まだ、九つしか集

まってない・・・・・・・・です」

自分の甘さで、あまりジュエルシードが集められなかった事を悔やみながら、フェイトはプレシアの質問に弱々しい声で答える。

プレシア「そう・・・・・・・・頑張ったわね。フェイト」

フェイト「・・・・・・・・え」

アルフ「・・・・・・・・はあっ!!!?!」

プレシアの予想とは百八十度違う言葉に、フェイト達は意味が分からず数秒固まっていたが、元に戻り驚きの声を呟く。

アルフ「（あの鬼婆が、フェイトに労いの言葉!? ありえない! まさか旅人が!!）」

アルフは旅人の方に目を向けると、旅人はアルフが何を聞きたいかわかっているかのように、ただ首を横に振った。

プレシア「流石、私の娘ね」

フェイト「っ!!・・・・・・・・えへへ」

そう言って右手をフェイトの頭に置き撫でる。フェイトは打たれる
と思い、一瞬目をつむったが撫でられているとわかり、はにかんだ。
そして、脳裏に偽りの記憶である情景が浮かぶ。

またプレシアはその姿を見て、自分の娘――アリシアとの生活を
思い出していた。

プレシア「（アリシアも褒めた時、こんな風にはにかんでいたわね。……だから、もう一度取り戻さないと。あの頃の生活を、あの幸せを！！フェイトと共に！！！！）」

ただ娘のために、ただ自身の理想（我が儘）のために狂った魔導師は、自分の心の内で一つの可能性を見つけ、フェイトに語る。

プレシア「フェイト、私がどうしてジュエルシードを集めていると思う??？」

フェイト「……それは母さんが自分の願いを叶えるために必要だから」

プレシア「そう、私の願いはね……アリシア……あなたの姉を生き返らせる事なの」

フェイト・アルフ「「えっ!!?」」

突然の姉の存在を発言され、フェイトとアルフは再び固まった。プレシアはそれに構わず言葉を続ける。

プレシア「アリシアはね、事故で死んだの。私はアリシアを生き返らせるために何十年も研究したわ」

フェイト「……母さん」

アルフ「……」

母親の悲しい顔にフェイト達は、母さんがどれだけアリシアという

存在を大切にしていたかを知った。そして狂い、どれだけの年月を掛けていたのかを・・・

プレシア「そして見つけたの、アリシアを生き返らせる手段を・・・でも、そのためにはジュエルシードが必要・・・だからフェイト、ジュエルシードを集めてきて頂戴。貴女は優しい娘だから、人を傷つける事に躊躇してしまうけど、今回だけは心を鬼にしなさい。この計画が成功すれば平穏な生活に戻れるのよ」

フェイト「・・・・・・・・はい！母さん！！」

母のあの頃の生活に戻れると言う言葉を信じ、フェイトは返事をした。しかし、心の中では一人の少女・・・そして一人の少年の事を思い浮かべていた。

フェイト「・・・・・・・・なのは・・・・・・・・ファイア」

フェイト「（ごめんなさいなのは。私はまだ貴女に想いを伝えられない）」

フェイト「行ってきます。母さん」

プレシア「行ってらっしゃい。フェイト」

今まで返事を返してくれなかった母さんが、返事を返してくれたことを嬉しく思いながら、フェイト達は地球へと転移した。

プレシア「ううっ!!ごほっ、ごほっ!!!!」

フェイトが地球に転移した後、プレシアは血を吐き膝を着く。

旅人『やれやれ、よくその蝕んだ身体で生きてこれたな。今治してやろう“Holy mend　―神聖なる癒し―”』

無機質な声・・・だが、少し呆れた声を念話で出しながら、旅人は詠唱する。すると、銀色の魔法陣がプレシアの足元に出現し、ルーンが円状に回転する。

プレシア「ふう、ふう・・・・・・それで準備の方は??」

呼吸を落ち着かせ、プレシアは計画の進行状況を旅人に尋ねた。

旅人『完璧だぞ。誰にも気付かれてはいない』

プレシア「流石ね。それで聞きたい事があるのだけど・・・」

旅人『何をだ???』

プレシア「ジュエルシールドとはどういうものなの? 私にはエネルギー結晶体にしか見えないのだけれど」

プレシアの質問に旅人は数十秒静止していたが、説明を始めた。

旅人『一般にジュエルシードはエネルギー結晶体と管理局や研究達は言っているが、それは半分正解で半分間違いだ。ジュエルシード・
・正式名称は “Immortal prof 一堕ちた神の証一”、堕ちた神々が創った宝石。そしてある程度の数を集め、定められた手順を踏むとその膨大な力で、願いを叶えてしまう世界の理を振凶げる（ねじまげる）代物……』

プレシア「なるほど。確かに危険ね」

プレシアはジュエルシードの危険性を改めて感じた。定められた手順を踏めば世界を支配することも、破壊することもできるのだ。悪用しない輩がいない筈がない。

旅人『まあ、願いを叶えるためにはそれ相応の対価が必要だがな』

プレシア「じゃあ私の願いの対価は何??」

旅人『プレシアが望むのは未だ現世にある、アリシアの魂の定着。それは人の身で出来ることではない。よって“――の”か“――の”だろう』

プレシア「っっ!!??・・・そんな話、聞いてないわ!!」

旅人が対価の内容を言うと、プレシアは驚愕し旅人を睨んだ。

旅人『言っていないが、あの時それらしい言葉は伝えた筈だ』

プレシア「・・・・・・・・あっ」

少し考えるとある言葉を思い出す。旅人は確かに伝えている、それらしき言葉を。

旅人『・・・・・・・・すまない。俺は・・・・俺はいつも無力だ』

プレシア「・・・・・・・・」

旅人の声は相変わらず無機質だが、プレシアには自身の無力さに腹がたっている感情が滲み出ているように思えた。その証拠に自身を表現する言葉が“私”から“俺”になっている。

旅人『俺は自分が気付いた助けを求める者達を全て救いたくて！だけど、この手は隙間だらけで！！全てを・・・・救えなくて！！！！』

旅人は溢れ出てくる感情を抑えることが出来ず、壁に拳を何度も叩きつける。その拳には血が滲み出ていた。

プレシア「ごめんなさい、あなたはこんなにも悔やんでいるのに無責任な言葉を言って」

旅人『いや、謝らないでくれ。これは俺の偽善で、背負うべき咎だ』

旅人『・・・・・・・・また来る』

そう言い旅人は転移魔法を使いどこかに消えた。

プレシア「・・・・・・・・ねえ、旅人・・・・いや“――”、あ

なたは救える者達を救って、救えなかった者達の咎を背負って、一人傷ついてあなたに救いはあるの？あなたの願いは何なの？？」

プレシアの呟きに誰も答える者はいなかった。

アースラ

モニタールーム

クロノ「・・・・・・・・」

モニタールームの一角でクロノは熱心に何かを調べている。

クロノ「・・・はあ、何もないか」

ため息をはくクロノ。そのモニターにはフィアと旅人のことについての検索結果が映されていた。

クロノ「（フィアの方はレアスキルでそれらしき人物を検索したが全く酷似していないし、旅人の方は逆に情報が膨大過ぎる）」

その少しのデータと膨大なデータに苦戦すること2時間。

クロノ「っ！！これは！！！！（旅人がいた世界で度々7、8歳くらいの同一人物の少年が度々確認されている。そして、旅人が消息を絶ったのが約一年半前。ファイが高町家に居候し始めたのも約一年半前）」

事前になのはから教えてもらっていた情報と照らし合わせると、あまりにも時期が一致し過ぎている。

クロノ「（まさか、ファイが旅人なのか）」

クロノ「もし、もし旅人がファイなら問いたださなければならない。父を何故見殺しにしたのかを……」

その呟きには、深い憎しみと哀しみが籠められていた。はたして、旅人はクロノの父を見殺しにしたのか。本当の事実はその場にいた者だけしか知らない。

海鳴臨海公園

S i d e 〴 なのは〵

私はフェイトちゃんともう一度お話しをするために魔力を放出している。

リンディさん達が調査した結果、フェイトちゃんのお母さんがこの事件の黒幕の可能性が極めて高いらしい。

ちなみに、指令を無視した時のリンディさんは恐かった。お兄ちゃん（恭也）にキレたフィアお兄ちゃん並に恐かった。

それにしても、フェイトちゃんのお母さんはどうしてこんな事をフェイトちゃんに頼むのだろう？

ねえ、フェイトちゃん。お母さんがいるのに、どうして悲しい瞳をするの??

なのは「（私は、悲しい瞳をするフェイトちゃんを助けたい！ちゃんとお話しをして、想いを伝えてほしい！！だから、出て来てフェ

イトちゃん!!!)」

ファイア「魔力反応を確認。来たぞ!!」

BD『Size form』

ファイアお兄ちゃんの言葉とともに、フェイトちゃんのデバイス――バルディッシュの音声が響く。

私達は一斉に音声がした方に振り向くと、一本の街灯の上にバルディッシュを鎌状にしたフェイトちゃんが立っていて、その隣にはアルフさんがいた。

フェイト「……………なのは」

なのは「……………ふえ」

フェイトちゃんが私の名前を呼んでくれた!?

フェイト「私はあなたにあの時の言葉の返事を返せない。けど……」

俯いていたフェイトちゃんが顔を上げ私を見る。その瞳は、今までの悲しい瞳ではなく、海上に転移する時の私と同じ決意の光を宿していた。

フェイト「けど、何時か返事を返すから!! だから今は!!!!」

アルフ「フェイト……………」

ユーノ「フェイトさん」

ファイア「・・・・・・・・」

本当は伝えたい・・・けど伝えられないもどかしさが、フェイトちゃんと言葉と表情にひしひしと滲み出ていて、私の心が一層痛み出す。

どうして私達は戦わなければならないのだろうか？私の頭の中でそんな言葉が何度も浮かんでは消える。

もっと違う形で出会えていたならきっと分かり合えた、私はそう思う。

でも現実残酷なもので、私達は相対している。自分の想い（我が儘）を貫き通すためには、戦う事しか出来ない。

本当は戦いたくない。けど、自分の想いを捨てる訳にはいかない。逃げる訳にはもっといらない。だって、フェイトちゃんもこんな気持ちだと思うから！だから！！

なのは「うん、この戦いは避けられない・・・よね。だから賭けよう！！お互いが持っているジュエルシードを全て！！！！」

戦おう！！私が今だせる全力で！！！！

RH・BD『Put out』

私の言葉と同時に、レイジングハートとバルディッシュが自分達を持つジュエルシード全てを排出する。

なのは「全てが終わってから聞くね!! フェイトちゃんの言葉!!」

フェイト「……………うん!!」

私がレイジングハートを前に構えると、フェイトちゃんもバルデイツシュを前に構える。

なのは「今は別々の道だけど、この未来^{未来}の道で一緒に過ごしたいから!! 勝負しよう、お互いの全力で!!!!」

その言葉を合図に私とフェイトちゃんは海上へと飛びたった。

Side なのは End

アースラ ーブリッジー

Side ークロノー

エイミィ「戦闘・開始だね」

クロノ「・・・ああ」

モニターではなのはとフェイトがお互い魔力でスフィアを形成し、睨み合っている。

だがクロノにはこの戦闘に興味はなかった。

クロノの視線は一点、なのはとフェイトの戦闘を傍観しているフィアを映していた。

クロノ「（この戦闘、なのはが勝ってもフェイトが勝っても、やる事はあまり変わらない。それよりもその後の事を・・・フィアが旅人なのかという事と、プレシア・テストロッサの逮捕。それが一番先決だ。）」

エイミィ「・・・ねえ、クロノ君」

クロノ「ん???どうした???」

思考の海に入っていたクロノの耳にエイミィの声が響きエイミィの方を見ると、何時ものはやけた雰囲気と違う真剣な表情のエイミィがいた。

エイミィ「何を、焦っているの？」

クロノ「っ!?!? あ、焦ってなんか――」

エイミー「嘘だね。声の上擦ってる」

エイミー「最近のクロノ君なんかおかしいよ。もう少し冷静になろう」

エイミーの言葉にクロノは自分の母――リンディの言葉を思い出すと同時に、自分が冷静になれてない事に気が付いた。

クロノ「ああ、わかった。ありがとうエイミー。」

エイミー「どういたしまして♪」

何時、どんな時、どんな状況でも冷静に物事を判断し、最善の道を選択しなければならない。

クロノはその事を改めて心に留め、再び視線をモニターに移した。

S i d e

くクロノく

e n d

海鳴臨海公園

噴水の近くでファイア、ユーノ、アルフがなのはとフェイトの激しい戦闘を見守っている。

ユーノ「……どうして人は争うのかな?？」

アルフ「そんなのアタシにはわからないねえ」

ユーノの呟きともとれる質問に、アルフは何も考えず即座に答えた。

ファイア「……人は自分の中に正義を掲げている。いや、正義と言うより我が儘だな。それは他人にとっては悪である時もあり、正義の時もある。自分が信じた正義（我が儘）を貫き通すために他人と衝突仕合うする。その規模を大きくしたのが戦争だ。」

ユーノ「……確かにそうだね」

ファイアの淡々と答えた言葉に、ユーノは納得する。

アルフ「ところで、アタシ達は戦わなくていいのかい??」

ファイア「戦わなくていいだろう。これは俺達の戦いじゃなくなのはとフェイトの想いを貫き通す戦いだ。俺達が戦っても意味がない……」

アルフ「それもそうだねえ」

フィアとユーノを少し威嚇しながら質問したアルフだが、もったもな事を言われ納得し安心する。

もし、フィアとアルフが戦っていたならアルフは魔力弾による遠距離攻撃で時間稼ぎしか出来ない。正々堂々正面から戦うなら、数分で間違いなくフィアにボロ雑巾にされるだろう。アルフは前の戦闘からそう感じていた。

BD『Power charge』

なのは「あっ!？」

バルディッシュの音声が聞こえフェイトの周りに蒼い雷を纏わせたスフィアが出現する。

なのははシールドを張ろうとするが、突如杖を持つ左手に金色の拘束具――バインドが掛かり、一瞬動きが止まる。その隙にフェイトはなのはの右手、両脚にバインドを更に掛けた。

アルフ「ライティングバインド!・・・フェイトが本気だ!！」

ユーノ「なのは!!!今サポート――ヒッ!!!!」

助けに駆け付けようとするユーノの目の前に太刀が振り下ろされた。

フィア「自分の信念を貫く者同士の戦いに邪魔をするな!!!!」

アルフ・ユーノ「「っ!!!」」

フィアの殺気が混じった気迫に、ユーノだけではなくアルフも身を

縮こませる。

なのは「（ファイアお兄ちゃん）」

フェイト「（ファイア）」

二人はファイアに感謝していた。この戦いは恐らく自分達のこれからの道が決まる戦い。他人に邪魔をしてほしくはなかった。

フェイト「アルカス・クルタス・エイギアス・・・唸りし電狂
今導きの下 討ち掛かれ・・・バルエル・ザルエル・ブラウゼ
ス・・・・・・・・フォトランサー・フアランクスシフト！！打ち砕
け・・・・・・・・ファイア！！！」

フェイトはなのはが身動きがとれない間に儀式魔法を詠唱し終え、
千を越えるフォトランサー（魔力弾）をなのはに打ち出した。

なのは「くっ！！！！（全て避けられない！防がなきゃ！！）」

フェイト「・・・・・・・・くううつ！！！」

避けられないと判断したなのはは防ぐためにシールドを張る。だが、
如何んせん数が多過ぎた。魔力弾の雨がなのはを包み込む。

一方、フェイトも急激な魔力の消費に歯を食いしばっていた。

ユーノ「なのは！！！！」

アルフ「フェイト！！！！」

ファイア「（これがフェイトの本気か。あれは俺でも全て避けられないな。防ぐなんて以っての外……いや、身体強化と設置型魔法陣による緊急離脱の連続なら或いは……）」

ユーノとアルフがなのはとフェイト、それぞれに叫び声をあげている中、ファイアはフェイトの使っている儀式魔法の対策を考えていた。

まあ、フェイトと戦う事などありえないのだが。

フェイト「ふう……はあ、はあ……っ!!?」

なのは「ぷはぁ……撃ち終わるとバインドも解けちゃうんだね」

フェイトは掌に魔力弾を形成し、煙の立ち上る方向を見据える。

やがて煙が晴れていき桜色の魔法陣を出現させたなのはが現れた。

そのBJは多少ボロボロだが、フェイトの攻撃は殆ど効いているようには思えなかった。

ファイア「（あの凶悪な砲撃の威力、高い防御力、そして機動性……やはり御神の血は争えんな）」

あの魔力弾の雨をこの程度の負傷で切り抜けるバトルセンスを持つなのはに感心するファイア。

なのは「今度はこっちの——」

RH『Diven』

なのは「番だよ!!!」

RH『Buster』

フェイト「うあああああ!!」

フェイトは魔力弾を放つが、なのはの砲撃によりあっさりと呑み込まれ消え去ってしまう。

フェイト「くうっ!!!（直撃!?でも、なのはだって耐えたんだ。私だって!!!）」

フェイトはなのはに対抗心を燃やし、耐える選択をとった。しかし、それは選択肢間違いであり、なのははフェイトが耐えている間に、再度チャージをしていた。

ファイア「（おいおい、あんなに威力の高い砲撃・・・収束砲撃魔法を撃つつもりか?）」

フェイト「っう・・・はあ、はあ・・・ふう（何とか耐えきれた）・・・!!!えっ!？」

砲撃を耐えきったフェイトがなのはの方を見ると、先程より強い桜色の光を放っているのがいた。

なのは「受けてみて!!!デイベインバスターのバリエーション!!!」

RH『Starlight Breaker』

フェイト「くっ!!!・・・なっ!?バインド!?!」

チャージが終わらない内に攻撃をしようとしたフェイトだが、先程自分がやったようにバインドで動きを封じられていた。

なのは「これが今の私の全力全開、スターライトブレイカー――
――！！！！」

殺傷設定にしていたなら軽くオーバーキルであろう収束砲撃魔法がフェイトを呑み込んだ。

アルフ「フェイト！！！！」

ファイア「（全力全開じゃなくて全力全壊だな………つとフェイトを助けに行かなくてはな）」

フェイトを心配するアルフ。いくら非殺傷設定でも、あの光景を見ていれば誰だって心配もする。

ファイアはというと、久しぶりの登場なのに解説と思考ばかりしている。やっぱり主人公より脇役じゃないの――

ファイア「………デリート消去」

――みぎやあああああ――！！！！

なのは「はあ、はあ………ふう………あつ！フェイトちゃん！！」

後の事を全く考えていなかったなのは。フェイトに叫ぶが氣を失っているため海へと落ちていく。

フィア「よっと・・・バルディッシュ、フェイト」

BD『Thank you』

フィア「どういたしまして♪」

なのは「フィアお兄ちゃん!!」

しかし、海に落ちる寸前にフィアが受け止める。事前に向かっていたから間に合ったが、用意していなかったなら間に合っていなかっただろう。

フィア「愚妹・・・後先考えずに砲撃魔法を撃つな」

なのは「ごめんなさい、フィアお兄ちゃん」

フェイト「んっ・・・くう・・・あ」

なのは「あっ！フェイトちゃん大丈夫？」

フェイト「・・・・・・・・うん」

なのは「私の勝ちだね??」

フェイト「そうみたい・・・・・・・・だね」

BD『Put out』

フェイトが負けを認めるとバルディッシュがジュエルシードを排出

した。

なのは「飛べる？」

フェイト「うん・・・・・・・・ふええ！？／／／」

フェイトはなのはに返事を返した時に気付いた。フィアにお姫様抱っこをされている自分に・・・・・・・・そして顔を林檎よりも遥かに赤く染め慌てて腕から飛び降りる。

フィア「まあ、二人共。お疲れ様」

なのは・フェイト「／／／」

そう言ってフィアは二人の頭を撫でる。好意を寄せる人に撫でてもらっているので二人共顔が真っ赤だ。

フェイト「・・・・・・・・なのは」

なのは「何???」

フェイト「ありがとう」

なのは「うん!!!!」

フェイトの感謝の言葉。それが何に関して感謝なのかは、本人達にしかわからない。

こうして、少女達の想い（我が儘）を貫き通す戦いは終わった。

しかし、物語は刻一刻と終幕へと進んでいく

終

第10話 ありがとう・・・そして、さようなら・・・なの

なのは「私達の最後の戦いは終わり」

フェイト「お互い微笑み合っていた」

なのは「でも、時間は待ってくれる事はなく」

フェイト「私達を終幕へと導いていく」

なのは「告げられたのは残酷な真実」

フェイト「見つけたのは自分の本当の気持ち」

なのは「さようなら、そんなの嫌だから」

フェイト「進もう」

なのは・フェイト「前に!!!!」

ファイ「母の命令を忠実に聞く人形だった金髪の少女」

旅人『少女は白き少女と黒髪の少年によって心を開き始める』

ファイ「終幕を迎える物語」

旅人『少女は一を失い一を手に入れた』

ファイ「一を失い悲しみに暮れる少女」

旅人『しかし、少女は悲しみを乗り越え歩み出す』

ファイ「新たな未来（道）をたくさんの人達に支えられて」

ファイ「魔法少女リリカルなのは　　時の旅人　　始まるぞ」

なのは「えへへ／／／」

フェイト「・・・／／／」

未だファイアに撫でもらっている二人。それを暖かい目線で見つめるユーノとアルフ。だが、その光景はファイアの一声によって破れる。

ファイア「！！ 二人共、俺から離れろ！！！」

なのは・フェイト「「えっ!?!」」

突然の言葉に意味が理解出来ず固まるのはとフェイト。

ファイア「ちっ！（通常の身体強化を使っても攻撃範囲内か・・・しょうがない）」

ドン！！！

なのは「きゃあ！」

フェイト「うわっ!!」

フィア「部分障壁最大出力・・・展開!!!」

フィアはなのはとフェイトを思い切り突き飛ばし、頭上に太刀を構える。そして、部分障壁を最大出力で展開した。次の瞬間――

ズガーーーーーン!!!!!!

フィア「くうううおおおおおー!!」

巨大な紫色の雷がフィアを襲った。フィアは魔力の質だけならば、SSランクなのでしばらく拮抗していたが、魔力量が少量なので――

フィア「うあああああー!!!!」

魔力が切れ部分障壁が消える。そして、フィアに雷が直撃した。

なのは「フィアお兄ちゃん!!」

フェイト・ユート・アルフ「「フィア!!!」」

あまりに突然の事で呆然としていた四人だが、慌ててフィアにいる砂煙の中に駆け寄る。

フィア「フェ・・・イト・・・なのは・・・無事か??」

砂煙が晴れると満身創痍のファイアが立っていた。その姿は痛々しく、服はボロボロで頭と頭上に翳していた右腕からは多量の血が流れていた。

ファイア「大丈夫・・・そう・・・だな・・・後を・・・頼んだ・・・」

ファイアは二人の無事を確認すると、地面に崩れ落ち気を失った。

なのは『クロノ君!!』

クロノ『わかっている!!座標軸設定、転移!!!!』

フェイト「母さん・・・」

なのは急いでクロノに念話をし、クロノは四人をアースラへと転移させる。

その時漏らしたフェイトの言葉は誰にも聞こえなかった。

アースラ

医療室

そこになのは、フェイト、アルフ、ユーノ、クロノがベッドに寝ているファイアの容態について話していた。

なのは「それでファイアお兄ちゃんは大丈夫なんですか??」

クロノ「身体の方は、見た目程酷い怪我ではないらしい。ただ、魔力を限界まで消費したため、最低今日一日は目を覚まさないそうだ」

なのは「それじゃあ」

クロノ「魔力不足で気を失っているだけだ」

なのは「よかった・・・」

ファイアが無事なことがわかりホッとするなのは達。

クロノ「それじゃあブリッジについて来てくれるか??」

タイミングを見計らってクロノがなのは達をブリッジに連れていく。

アースラ ーブリッジー

クルー1「第二小队転送完了」

クルー2「第一小队侵入開始」

なのは達に着くと、クルー達が各隊の状況報告をしている。すると、なのは達がやって来たのに気付いたリンディがこちらにやって来た。

リンディ「お疲れ様。それから、フェイトさん初めまして」

フェイト「……………初めまして」

フェイトはリンディの優しい言葉と態度に怖ず怖ずと返事をする。

リンディ「早速だけど本題に入るわ……………フェイトさん、貴女の母——プレシア・テストロッサの目的は何?？」

フェイト「っ!!!!……………」

なのは「……………フェイトちゃん」

しかし、あまり時間がないのか直ぐに真剣な顔に変わり、フェイトに核心につく質問をする。フェイトは、その質問に肩をビクツと震わせ俯いた。沈黙が数分続き、クルーがリンディに報告をする。

クルー1「総員玉座の間に侵入、目標を発見!!」

フェイト「母さん!!!」

クルーの報告に全員がモニターを見ると、玉座に座るプレシアを武装局員が取り囲んでいた。

武装局員1「プレシア・テストロッサ、時空管理法違反及び管理局艦船への攻撃容疑で貴女を逮捕します!!!」

武装局員2「武装を解除してこちらへ」

プレシア「……………」

プレシアは何も言わず、ただ虚空を見つめて何かを待っている。しかし、武装局員達が玉座の隣にある扉に手を掛けると武装局員達を鋭い視線で睨みつけた。

武装局員3「こっちを固めろ!」

武装局員4「何かいるぞ……あぁっ!?!」

武装局員5「こ……これは……………」

なのは「…………えっ!?!」

フェイト「……お姉ちゃん」

開いた扉の中の最奥にあるカプセルの中を見て武装局員、アースラのメンバーも驚愕する。

なぜなら――フェイトと瓜二つの少女が眠っていたのだから……

旅人『対象及び転送座標軸設定――アースラに強制転移』

武装局員1「な、何だ!？」

武装局員2「これは!？」

武装局員3「転移魔法――」

旅人『悪いが退場してくれ』

驚愕し呆然とする武装局員達の足元に、突然念話が聞こえ銀色の魔法陣が浮かび上がる。局員達は抵抗する間もなくアースラへと転送させられた。

そして代わりに、転移魔法を使用した人物――旅人がプレシアの前に降り立った。それを見たクロノは即座に自分でパネルを操作し小型モニターに医療室の映像を展開する。

クロノ「(医療室にフィアは……いるだと!!)」

クロノは自分の予想が違ったことに落胆するが、同時に安心もしていた。自分の一時的とはいえ、仲間であるフィアが自分の憎む旅人ではなかったのだから。

プレシア「フェイト、聞こえているのでしょうか?？」

フェイト「っ!？」

プレシア「私は貴女に伝えなければならない事があるの………」
」

プレシアは一息置いた後、フェイトが受け止めなければならない残酷な真実を話し始めた。

プレシア「フェイト、貴女は事故で死んだアリシアの記憶を持ったクローンなの」

フェイト「!?!」

なのは・アルフ「「フェイト（ちゃん）!!!?」」

真実を聞いた瞬間、フェイトは足の力が抜け、ガクリと地面に倒れこんだ。

プレシア「貴女は私が最後に行っていた使い魔を越える人造魔導師の研究――プロジェクトFATEの成功体」

プレシア「私は初め貴女を生み出した時、アリシアと瓜二つの貴女を見て喜んだわ。……でも、しばらくして気付いてしまった。

貴女はアリシアとは似ているけど違うと言う事を」

クロノ「どんな事をしたって……どんな魔法を使っただって過去を取り戻す事なんか……出来る筈なんかない!!!!」

リンディ「……」（私が同じ立場であつたなら、絶対に同じ一步を辿っていたわね）」

プレシアの言葉にクロノは怒りを覚える。自分も事件で父親を失い悲しみに襲われた。それでも自分は立ち直った。プレシアも立ち直れた筈だと・・・クロノはそう思った。

しかし、プレシアとクロノの境遇には決定的に違う所があった。

“支えてくれる人”・・・悲しみを襲われていたプレシアには支えてくれる人は一人もいなかった。逆に事故での違法材料の罪を全くなすりつけられ、精神は疲弊していくばかり。心の寄^{よりどころ}処などなかった。

だから、一つの願い（我が儘）に縋るしかなかった・・・

そして、クロノの周りにはたくさんの支えてくれる人がいた。それは母であったり、友であったりと様々だ。

だから、立ち直ることが出来た。

リンディはプレシアの経歴を細かい所まで独自で調べていたのでクロノとは違う解釈を思考していた。

プレシア「それと同時に私は恐れてしまった。貴女という存在はアリシアを侮辱しているのではないのかと・・・そう思考するのが嫌で私は狂った。狂人になってしまえば自分の願い（我が儘）の為だけに思考できる・・・今思えば、ただ現実から逃げているだけで貴女を傷つけていた」

自嘲気味に言葉を紡ぐプレシア。自分の今までの行為を悔やんでいるのであろう。拳をギュッと握り絞めている。

プレシア「フェイト・・・・・・・・」

フェイト「・・・・」

フェイトは倒れながらも虚ろな瞳をモニター越しの母に向ける。

プレシア「今までの事を許してくれとは言わないわ。でも、これだけは言わせて・・・・・・・・フェイト、愛してるわ。一人の娘として・・・・」

フェイト「母さん!!!!!!」

プレシアはあの時フェイトに言えなかった言葉を伝える。その顔はフェイトの叶えたかった願い——笑顔そのものだった。その笑顔を見た途端、フェイトは弾かれたように叫んだ。

フェイト「私も・・・・私も母さんが大好きです!!!!娘として愛しています!!!!!!」

そう言い終わった時、フェイトは自分の本当の気持ちに気付いた。

フェイト「（・・・・・・・・そうだ。私は母さんが苦しんでいるのが嫌で、笑顔でいて欲しくて・・・・愛して欲しく。私は母さんに認めてもらいたくて頑張ってきたんだ）」

プレシア「フェイト、私のためにもう頑張らないで・・・・貴女は優しい子だから狂った私に、何の文句も反抗も疑いもせずに従ってきてくれた。でも、これからは私のためじゃなくて、自分のために生きて・・・・・・・・愚かな私と同じ道を辿らないために・・・・・・・・」

プレシア「……………フェイト。ありがとう……そして、さようなら……アリシアのことを頼むわね」

フェイト「母さん!!? 母さん!! 母さんっ!!!!」

プレシアは全てを話し終えたのかモニターに背を向ける。フェイトは母の突然の別れの言葉に、何度も母さんと叫ぶことしかできない。

クルー1「21の魔力反応を確認! いずれも測定できません!!」

リンディ「何ですって! 直ぐに調べて!!!!」

ユーノ「21の魔力反応!! まさか……なのは、レイジングハートの中にジュエルシードはあるか調べて!!」

なのは「う、うん……レイジングハート」

クルーの報告に即座に対応するリンディ。ユーノはクルーの21という数字に嫌な予感がした。

なのは「ない!!」

エイミー「あ、あれ!!」

ジュエルシードがないことに慌てるなのは。その時、エイミーがモニターに映る旅人を指差した。

そこには、21個のジュエルシードをまるで円卓の騎士のように従える旅人がいた。

旅人『数多の世界を守護する旅人の名の下に墜ちた神々の証を束ねる』

旅人が念話で祝詞を紡ぎ手を掲げると、ジュエルシードは激しい光を放ち視界が白に覆われる。

クロノ「こ、これは！」

ユーノ「巨大なジュエルシード……」

光が納まると、旅人の頭上に巨大なジュエルシードが淡い蒼色の光を放ちながら浮かんでいた。

旅人『プレシア、準備は整ったぞ』

プレシア「ご苦勞様」

リンディ「時の旅人！貴方何をやっているのかわかっているの！！！」

旅人『……わかってるさ。これは管理局で言う犯罪だということを』

リンディ「なら、どうして！！貴方は英雄でしょう！！！」

自分のやっている事が犯罪だと平然と言う旅人にリンディは我を忘れて叫ぶ。

旅人『英雄……俺がか……俺はそんな大層な奴ではない！俺はあの故意で起こされた事故を防ぐことが出来なかった。だから、これは償いで俺の偽善だ！！！！』

リンディ「!!!! あの手事故は違法材料で起きたんじゃないあ……」

英雄と呼ばれた瞬間、旅人は無機質な声に怒気を混ざった返答をした。リンディは旅人のいきなりの豹変ぶりに気圧されながらも質問をする。

旅人『違う！プレシア達は違法材料など使ってはいない！！使ったのは俺のかつての同志（友）だった奴達だ！！！！』

リンディ「そんな……それじゃあプレシアは……………」

旅人『無実の罪を被せられた。俺は別世界の崩壊を防ぐのに必死で止められなかった』

旅人は自らの無力を呪うように言葉を紡ぐ。リンディは自分の知らない所で世界が崩壊しようとしていたことに驚き、何より自分の言葉が失言であると感じていた。

旅人『君達が俺がやっている事が悪だと言うのなら、俺は悪でいい。それで人が救えるのなら救えないよりずっと良いからな』

救えない事……それは誰かが必ず悲しみ襲われる。悪だと言われなくても救いたいと思う人達を救えるなら、英雄よりもずっと英雄らしいであろう。何も成し遂げていない、何も救えない人など誰も英雄とは言わない。

旅人『俺は己^{おの}が理想（我が儘）を貫き通す……例えば、命を落としてでも』

旅人は心の中で叫ぶ。これは自己満足で偽善なのだ。自分は称えられる存在ではないのだと……

旅人『……これより、定魂の儀式を始める。俺の偽善を止められるなら止めてみる』

念話が切れた直後、モニターも何も映らなくなった。アースラに沈黙が漂いその場にいる誰もが思う。旅人は確かに英雄たる存在である。旅人自身は否定しているが間違いない人々が称えるべき存在だろう。

クロノ「己^{おの}が信念を貫き通すか………エイミィ！ゲートを開いてくれ！！」

クロノは旅人の言葉を口に漏らした後、顔を上げエイミィに命令をした。そして、転送ポートへと走り出す。

フェイト「私も……私も行かせてください！！母さんとやっと分かり合えたのに、やっと気持ちを伝えられたのに、さようならだなんて、そんなの嫌だ！！！」

フェイト「私は私の意志で母さんを連れ戻したい！これから私の歩む未来（道）に母さんも居てほしいから！！だから、お願いします！！！」

なのは「フェイトちゃん……私からも、お願いします！！」

フェイトの必死な願いになのはもリンディに頭を下げお願いする。

クロノ「駄め——」

リンディ「いいでしょう。許可します」

クロノ「母さん!!??」

リンディ「クロノ、貴方も失う悲しみを知っているでしょう。貴方はフェイトさんの今の気持ちを誰よりもわかっている筈」

リンディがクロノの許否の言葉を遮り許可を出す。母に怒鳴るクロノだが、リンディの言葉に顔を俯かせる。

クロノ「……勝手にしてくれ。どうなっても知らないからな!!!!」

リンディ「エイミィ、ゲートは!!」

エイミィ「いつでもOKです!!!!」

リンディ「フェイトさん、頑張ってらっしゃい」

フェイト「はい!!」

リンディに軽く背中を押してフェイトを時の庭園へと送る。フェイトは力強く返事をして、転送ポートへと走り出した。

なのは「フェイトちゃん……」

リンディ「なのはさん、フェイトさんは無茶をすると思うから、よろしく頼むわね」

なのは「はい!!!」

転送ポートへと向かうフェイトちゃんを心配そうに見守るなのは。リンディはなのはに近づく転送ポートを指差し言葉を言った。なのははフェイトと同じく力強く頷くとフェイト達の後を追った。

時の庭園

旅人『アデアット』

旅人が念話をする一冊の蒼と白、そして銀を基調とした魔導書が出現する。

旅人『凍結術式 NO. 078 一定魂の儀式— 限定解除。同時に 固有空間 NO. 02—完全秩序の庭—コスモスカーデンを展開』

魔導書『All right my king』

プレシア「これは……」

そして旅人が指示すると、魔導書から機械的な女性の声を発し了承の言葉を言う。すると辺りの景色が時の庭園とは違う別の空間へと変わった……。いや、寧ろ上書きと言った方が正しいだろう。プレシアが侵食された空間を見回すと、周りは一面花畑だった。

プレシア「（アリシアと過ごしたあの花畑にそっくりだわ）」

旅人『此処はあらゆる理をほぼ完全に制御する空間。この空間はその人にとって思い出深い場所になっている筈だ。完成されたジュエルシードは制御を間違えば半径約1万kmの世界を闇へと誘う（いざなう）悪魔の代物。これぐらいの事はしておかないとな』

旅人が説明をしている間にも、魔導書のページがパラパラとめくれ、目的の術式を組み立てていく。

数分後、術式構築が終わったのか魔導書はアリシアの身体が入ったカプセルを中心に百数個の魔法陣を展開させた。

旅人『……最終確認を行うぞ。これから始める術式は“定魂の儀式”。この儀式には膨大な魔力が必要なだけで別に危険はない。危険なのはジュエルシード、これは対象の願いの大きさによって対価が変わる』

旅人は一息置いた後、あの時言った残酷な言葉を口にする。

旅人『そしてプレシア、お前の願いの対価は“フェイトの命”か“自身の命”だ』

プレシア
「・・・」

プレシアは最終確認などどうでもよいのか、アリシアの身体が入ったカプセルを見つめている。

旅人「No sacrifice, no gain」。“犠牲なくして、得られるものなし”。さあ、君はどちらを選択する?？」

プレシア「……私自身の命を対価にするわ」

旅人『それじゃあアリシアとは逢えないのか???』

選択に即座に答えたプレシアに旅人は問う。例えアリシアが生き返ったとしても、そこにプレシアという存在はいなくてよいのかと

プレシア「いいの。本音で言えば、もう一度でいいからアリシアの
声が聞きたかった。けど、私はアリシアさえ生き返ってくれれば、
私自身の命なんてどうでもいいわ・・・」

旅人『……フェイトの命を対価にしようとは思わなかったのか』

プレシア「以前の私なら間違はなくフェイトの命を対価にしていたでしょう。でも、今の私はフェイトを娘として愛してる。自分の娘を対価にするなんて事はできない・・・・・・」

それにもう二度と娘を私の目の前で死なせたくないから」

旅人『・・・』

自分にもっと力があればプレシアを救えたのではないか。その思いが旅人の心で渦巻く。

プレシア「旅人、貴方には感謝しているわ。自分の本当の気持ちに向き合わせてくれて。アリシアを生き返られせる協力をしてくれて・・・だから悔やまないで」

旅人『・・・そうだな』

プレシアの言葉で我に返る旅人。その手は知らず知らずの内にきつく握られていた。

プレシア「・・・さてと。旅人、貴方への対価は何??」

旅人『!??・・・俺は何もいない』

プレシア「嘘をつくのが下手ね。旅人、私は貴方に感謝しているからお礼がしたいの。私に出来る事は限りなく少ないけど言っちゃおうだい」

旅人は軽く俯き黙り込む。しかし、決意したように頭を上げプレシアに言う。

旅人『儀式をせずフェイトと二人で暮らす事は出来ないか??』

プレシア「それは無理な願いよ。私はあの子の母親を名乗る資格もないし、私はアリシアとフェイト、どちらも生きていないと壊れて

しまうから・・・」

旅人の願いを即座に拒否するプレシア。旅人はこの返答がわかっていたのであろう黙り込むも数秒後、再び念話で喋り始めた。

旅人『それでは“奇跡”をくれ』

プレシア「奇跡?？」

聞いたことのない言葉にプレシアは首を傾げる。

旅人『生命が生まれた時から持っている、神が授けたモノ。無くなっても何の支障もなく、普通は死ぬまで使われる事のないモノ。生きていく過程で想いや願いの一部が溶け込んだモノ。それが奇跡だ』

プレシア「そんなモノが何故必要なの?？」

旅人『・・・・・・・・・・・・・・・・奇跡は俺にとって力になるからだ』

旅人は奇跡の説明をした後、プレシアの質問に簡潔に答えた。

プレシア「・・・いいわ。私の奇跡、貴方に上げましょう」

旅人『ありがとう』

プレシア「ただし、フェイトとアリシアを守ってちょうだい」

旅人『ふっ・・・わかった』

プレシア「それじゃあ、儀式を始めましょう」

プレシアの最後の願いを聞き、当たり前だと言わんばかりに答える旅人。プレシアはその言葉を嬉しく思いながらも儀式の始動を告げる。

旅人『始めるぞ』

魔導書『Yes』

魔導書から発せられる音声と共に、旅人の頭上に浮かぶ巨大なジュエルシールドが、カプセルの頭上に移動する。

魔導書『First program kick over（第一術式始動）』

魔法陣がジュエルシールドからエネルギーを吸収し淡く光り出した。

魔導書『First program completion.
Following, second program kick
over（第一術式完了。続いて第二術式始動）』

魔法陣がより強く輝き魔力の余波が花畑――コスモスカーデン（完全秩序の庭）を激しく揺らす。

魔導書『second program completion.
Following, final program kick
over（第二術式完了。最終術式始動）』

魔導書の音声が最終術式始動を告げると、ジュエルシールドからルーンが飛び交いプレシアを包み込む。プレシアはそれに驚きもせず成

すがままに受け入れた。

魔導書『final program completion.

“Fix soul rite” ignition(最終術式完了。

“定魂の儀式”起動)』

術式が起動され辺りは蒼い光に覆われる。

魔導書『Program closing And again

a program freeze over execute

(術式終了。及び、再度術式凍結を実行)』

旅人『コスモスカーデン(完全秩序の庭)も終了してくれ』

魔導書『OK』

魔導書が全ての術式を終了させると景色は時の庭園へと戻り、ジュエルシードもの21個の宝石に戻った。

プレシア「成功したの???」

旅人『ああ、儀式は成功したぞ。一週間もすれば目の覚ます』

旅人はプレシアの質問に答える。

プレシア「よかった……」

旅人『それより、身体の方はどうだ??』

安堵するプレシアに旅人は身体の状態を心配する。

プレシア「今はなんともな——!!? 始まったみたいね」

プレシアの足を見ると粒子のようにゆっくりと消え始めていた。このペースなら後数分でこの世界から消えてしまうだろう。

旅人『お別れだな』

プレシア「ええ、そうね。最後にアリシアの声が聞きたかったけど、それはもう無理。私は何も思い残すことなく消えるわ」

旅人『だが、彼女は言いたい事があるみたいだぞ・・・』

消えると言ったプレシアに旅人は扉の方を指差す。

そこには母^{プレシア}が娘として愛すると決めたフェイトが立っていた。

Side
（フェイト）

私達は今、母さんと旅人さんの居る玉座の間に向かっている。

フェイト「(母さんと共に歩む未来は苦難や絶望の連続かもしれない。だけど、母さんと一緒ならきつと乗り越えられる。今まで私が進んで来た道は、私一人では絶対にくじけていた。けど、アルフが居てくれたから・・・私の気持ちを理解しようとしてくれた二人がいたから、私は自分の本当の気持ちに気付けた・・・)」

隣に目を向けるとなのはと目が合う。私が戸惑っていると、なのははニコツと微笑んでくれた。

それだけで私の心は嬉しくなる。私はもう一人の気持ちを理解してくれている少年の姿を思い浮かべた。

フェイト「っくく／／／」

なのは「どうしたの？フェイトちゃん???」

フェイト「何でもない・・・心配しないで／／」

優しく微笑んでいるフィアの顔を思い出して顔が赤くなるのを感じる。

私はどうしたのだろうか？

前はフィアの姿を見ても顔が赤くなるくらいだった。だけど、今は心まで温かくなる。なのはの時とは違う気持ち・・・フィアが苦しんでいる顔を見たくない。もっと、もっと笑っていてほしい。そう思う私がいる。

クロノ「な、何だ。この霧は!？」

私はフィアに対するこの気持ちは何なのかと考えていたが、クロノ執務官の叫び声に現実に取り戻される。

そして周りに視線を向けると、辺りは白い濃霧が私達を包み込んでいた。

なのは「わっ!何も見えないよ!!」

クロノ「今魔法で何とかするから少し待っていてくれ!!」

少し離れた所でクロノ執務官となのはの声が聞こえ、その方向へと向かう。

クロノ「魔法が発動しない!?!この霧の影響か。なのは、フェイト、一度僕の所に集まってくれ」

私はクロノ執務官の声が聞こえた方向へと向かっていたが違和感に気付いた。声がさっきより遠くから聞こえるのだ。

フェイト「(まさか・・・)バルディッシュ、この霧を調べて!」

BD『Yes sir』

私は即座に自分の相棒――バルディッシュに指示出した。バルディッシュは金色の宝石が点滅させ調査している。

BD『調査結果により、この霧には術式無力化と方向感覚を狂わせ

る効果があるようです』

フェイト「ありがとう、バルディッシュ。クロノ執務官、なのは、この霧には――！？」

なのは達に濃霧の効果を伝えようとして気付く。二人の声が全く聞こえなくなっていることに

フェイト「バルディッシュ、二人の場所は？？」

BD『場所は特定出来ますが方向感覚が狂わされているので合流は絶望的かと』

フェイト「一人で行くしかないみたいだね」

BD『Yes』

私は母さんの元に行くため再び駆け出した。

数分後

フェイト「はあ、はあ………」

私は未だ玉座の間に辿り着けないでいた。

フェイト「早くしないと………」

早くしないと母さんが私の手の届かない所にいつてしまう。冷静にならないといけないのに、焦る気持ちがそれを許さない。

そんな自分が嫌になり、私はその場に俯き座り込んだ。それと同時に今まで抑えてきた涙が溢れてくる。

???『泣いちゃ駄目』

フェイト「えっ!?!」

突然聞こえた声に私は顔を上げる。

そこには私と瓜二つの少女がいた。私と違うのはツインテールではなく髪を下ろしている所だけ。

見る限り実体ではないのであろう。姿が少し透けている。

フェイト「お姉ちゃん?!!」

アリシア?『こっちだよ。フェイト』

フェイト「ま、待って!!!」

私の問いに答えず少女は前を指差しながら駆け出す。私は慌てて立

ち上がり後を追った。

アリシア？『早くしないとお母さんが消えちゃう！早く、早く！！』

お姉ちゃん？の言葉に自然と足に力が入る。見るとお姉ちゃんの体がどんどんと薄くなっていく。

アリシア？『間に 合わ なかつ た』

フェイト「お姉ちゃん！！！！」

ノイズが入ったような途切れ途切れな声の後、お姉ちゃん？は消えてしまった。そして前を見ると玉座の間へと続く扉があった。

私は勢いよく扉を開ける。そこには、母さんと旅人さんがいた。

旅人『だが、彼女は言いたい事があるみたいだぞ・・・』

母さんと会話していた旅人さんが私の存在に気付いていたのか指を差す。

プレシア「フェイト・・・何故来たの？？」

母さんは私を見て驚いている。私はそんな母さんに駆け寄っていく。

フェイト「母さん。足が！！」

見ると母さんの足がゆっくりと消え始めていた。

プレシア「フェイト。私はもうすぐこの世界から消えるわ」

フェイト「そんな! ! 何で! ! ! !」

私は母さんが消えてしまう事実就叫ぶことしかできない。

プレシア「アリシアを生き返らせるためよ」

フェイト「嫌だ・・・嫌だよ。母さん、消えないで! !」

プレシア「ごめんね、フェイト。でもこれは私が決めたこと・・・
・もう無理なのよ」

涙を流し抱き着く私に、母さんは手を私の背中に回し抱きしめ、もう片方の手で頭を撫でてくれた。

プレシア「ありがとう・・・・本当にありがとう、フェイト。アリシアと仲良くしなさいね」

フェイト「母さん! 母さん! !」

話したいことがあるのに、伝えたいことがあるのに、母さんの胸で泣くことしかできない私。その間にも母さんは消えていく。

なのは「フェイトちゃん! 大丈夫——! ! ? ?」

クロノ「プレシア・テストロッサ。貴女を逮捕——! ! ? ?」

泣き続けている私の後ろでなのはとクロノ執務官の声が聞こえた。多分、母さんの状態を見て固まっているんだと思う。

プレシア「さあ フェイト、お迎えが来たわ。貴女は私のことに振り返らず、未来へと歩みなさい。それが貴女への最後のお願いよ・・」

フェイト「嫌だ。これからの道（未来）にも母さんがいてほしい！・・・・・旅人さん何とかできないの！！！」

旅人『・・・・・すまない。私ではどうする事もできない』

私はやつのことで出た声で旅人さんに問いかける。しかし、返されたのは残酷な言葉だった。

旅人『この儀式は強大な魔力と誓約で構成されている。この因果律を覆すには儀式に使用された魔力の2倍の魔力が必要だ。そんな魔力、俺には残されていない』

プレシア「旅人、さっきも言ったけど悔やまないで。フェイト、さようなら・・・・・貴女とアリシアの未来が幸福であることを祈っているわ」

そう言って母さんはこの世界から消えた。その顔は最後までとても穏やかだった。

Side ｝フェイト｝ end

フェイト「あああああー！ー！ー！ー」

なのは「そんな、そんなことって……」

泣き崩れるフェイト。なのはは不条理な現実にはただ拳を震わせることしかできなかった。

クロノ「な、なんだ！！……これは虚数空間！！？」

旅人『！？……“渡り鳥”』

突然地面が揺れて穴が空き、次々と黒い空間（虚数空間）に変わる。旅人は異変を察知し、転移魔法をクロノとなのはを包むように展開する。

なのは「フェイトちゃん！早く！！」

フェイト「……………うん！！！！」

泣き崩れていたフェイトだが、手で涙を拭い虚数空間を避けながらなのは達の所へと向かう。

フェイト「うああっ！？」

なのは「フェイトちゃん！！！！」

なのは達の所まで後数メートルの所で足場が崩れ徐々に虚数空間に滑っていくフェイト。なのはは届かないとわかっていても手を差し伸ばし叫ぶ。

旅人『……』

フェイト「きゃっ！！！」

もう落ちると思った瞬間、フェイトは旅人に手を掴まれなのは達の所に投げ飛ばされた。そして旅人は虚数空間へと落ちていく。

フェイト「旅人さん！！」

旅人『フェイト、前に進め。お前とアリシアには幸せになる資格がある』

フェイト「旅人さ——」

旅人『“渡り鳥”発動』

旅人はフェイトに言うべき言葉を言うと転移魔法を発動させた。魔法陣が銀色に光りフェイト達を転移させる。旅人はフェイト達の転移を確認すると虚数空間に消えていった。

こうして一つの事件は終わり少女は新たな道（未来）へと歩み始める……

終

第11話 (第一部最終話) また、逢いましょう・・・・・・・・なの

なのは「終幕を迎えた物語」

フェイト「悲しい事はあった。けれど、嬉しいこともあった」

なのは「それ乗り越え私達は今を歩む」

フェイト「友達になってくれませんか」

なのは「私が一番欲しかった言葉」

フェイト「私が伝えたかった言葉」

なのは「ありがとう、想いを伝えてくれて」

フェイト「ありがとう、こんな私に話し掛けてくれて」

なのは「私達はお互いのリボンを交換し合う」

フェイト「絆を作るために、絆を深めるために」

なのは「そして、約束のために」

フェイト「暫しの別れ」

なのは「だけど、寂しくなんかない」

フェイト「だって、きっと」

なのは・フェイト「「また、逢えるから……！」」

フィア「やっと通じ合えた。少女達」

旅人『だが、時間はあまりにも少なく、別れの時がくる』

ファイア「約束だから」

旅人『その言葉を残し少女は旅立った』

ファイア「しかし、少女達は再び逢えるであろう」

旅人『例え、それが戦場であつたとしても』

ファイア「新たな物語の幕開けだつたとしても」

ファイア「魔法少女リリカルなのは　　時の旅人　　始まるぞ」

Side　　くなのはく

あのあと私達はアースラのブリッジに転移された。そして私達が見たのは、モニターに映された虚数空間の中へと消える時の庭園だった。

その時フェイトちゃんはアリシアさんと旅人さんの行方をリンディさんから聞いていたみたい。

リンディさんはフェイトちゃんの質問にすぐに答えてくれていた。
アリシアさんは私達が転移してくる数分前にブリッジに転移されて
医療室で検査をしているそうなの。

旅人さんは言わずもがな行方不明で、クロノ君いわく生きているらしい。

クロノ「虚数空間内でも魔法を使用していたから絶対にだ」

とクロノ君が太鼓判を押してくれた。また、後で聞いた話で虚数空間では通常魔法が使えないらしい。落ちなくてよかったよ……

そしてファイアお兄ちゃんも無事に目覚めました。

私はファイアお兄ちゃんが目覚めた時、思わず怪我人だと忘れて飛び付いてしまった。その時右腕に当たったため……

ファイア「腕、腕痛あああー！ー！！」

なのは「ふええ、ご、ごめんなさい。ファイアお兄ちゃん」

ユーノ・クロノ「（うわあ、痛そう……）」

ファイアお兄ちゃんはしばらく悶絶してました。悪気はないの。本当なの……！！

そしてファイアお兄ちゃんの怪我の完治までの数日アースラで過ごした後、表彰式が行われ、私とユーノ君が表彰されました。ファイアお

兄ちゃんも表彰される筈だったのですが、自分は大した事をやっていないと言うことで辞退。

その後、フィアお兄ちゃんがフェイトちゃんとアリシアちゃんの処遇について、悪いようにはしないと云ったクロノ君を褒め、照れ隠しをしている所をからかっていた。クロノ君かわいい♪♪

こうして私達は地球に帰って来た。お父さんやお母さん、お兄ちゃんやお姉ちゃんに心配と少しの説教をされ、新ためて家に帰って来たんだなって思いました。フィアお兄ちゃんは……

フィア「俺は恭兄に追いかけられたがな」

と私を見ながら言ってきた。どうして私を見たんだろう??？　ねえ、ユーノ君。なんで苦笑いしてるの??？

学校に登校して教室の友達や先生達にも心配された。フィアお兄ちゃんも私のために学校を休んでくれていたので、同じように心配されていました。

すずかちゃんとアリサちゃんも、私達の姿を見つけると駆け寄ってきて心配してくれました。

その時アリサちゃんと仲直り出来てよかった。ずっとあのままだったら、私泣いてたと思う。フィアお兄ちゃんは……

フィア「アリサがデレただと!?!」

とか叫んで、アリサちゃんにドロップキック（バーニングキック（笑）——命名　フィアお兄ちゃん）をくらい地に伏せていた。

私、最近フィアお兄ちゃんのテンションのアップダウンについていけないよ……でも、そんな所がまた／／………
……にやつ!? 話しが逸れちゃった。

そしてその数日後の今日、私達は海鳴臨海公園に向かっている。理由はクロノ君からの念話。

念話の内容はフェイトちゃんとアリシアさんを今日管理局の本局に移送するみたいで、半年はフェイトちゃん達に会えないとの事。それをクロノ君が気を利かせてくれて、もう一度会えるようにしてくれた。クロノ君ってやっぱり優しいの♪

なのは「……あっ!!」

海鳴臨海公園に入って辺りを見回すと、三人の人影が見えました。私達は目当てであろうあの人達の所へ向かいました。

S i d e なのは
e n d

なのは「フェイトちゃん!!」

フェイト「なのは!!!!」

ファイア「よっ、アルフ・・・ついでにクロノ。元気にしていたか?」

アルフ「相変わらずマイペースだねえ。ファイアは」

クロノ「ついでにってどういう意味だ!!」

俺達が三人の人影に近づくと、やはりフェイトとアルフ、そしてクロノだった。なのははフェイトの姿を見つけると、駆け寄り抱き着いていた。クロノの言葉をスルーしてその光景に微笑んでいると、俺のアンテナ（アホ毛）が“みよんみよん”と反応し“百合”という電波を受信した。

ファイア「断じて百合ではない（ボソツ）」

ユーノ「何か言った?」

ファイア「いや、何でもない」

危ない危ない、聞かれていたら絶対に変態扱いさせるな。俺は嫌な思考を忘れるためにクロノに話し掛けた。

ファイア「クロノ」

クロノ「ん、なんだ？」

ファイア「世話になったから、和菓子を作ってきた。リンディさん達と食べてくれ」

そう言って俺はクロノに紙袋を渡す。因みに中身は最中^{もなか}15個と栗^う外郎^{いろう}3本だ。

クロノ「ああ、ありがとう。こちらこそ世話になったよ」

ファイア「いや、俺は大した事やってねえって」

全く、真面目なやつだ。俺がやった事といえば、木のお化けと斬った事と、なのは達を雷から守った事だけだ。

ファイア「それに出番も少なかったしな」

クロノ「何の事だ??」

ファイア「ふむ、俺にもわからん」

クロノ「君が言った言葉なのか」

アンテナ（アホ毛）がまた電波を受信したらしい。変な事を口走ってしまった。気をつけないといけないな。またクロノに呆れられるのは何だか癪だし

なのは「ファイアお兄ちゃん。フェイトちゃんがこっちに来てほしいって言っているよー」

ファイア「ん、今行く」

そしてクロノ達と暫く談笑していると、離れていた所でフェイトと話しをしていたなのはが俺を呼んだ。俺はすぐに返事をしてなのは達の所に向かった。

ファイアはクロノ達と喋っていた所から少し離れた二人の少女の居る場所に着いた。

ファイア「数日ぶりだな、フェイト」

フェイト「うん。数日ぶりだね」

.....

なのは「むゝ.....それでフェイトちゃん、私達に言いたい事って!!」

数日ぶりの再会に数言喋りただ見つめ合う二人。その光景が面白いのは、フェイトに喋り掛ける。

フェイト「えと・・・・・・・・・・」

言いたい事があると言っていたのに、何故か躊躇っているフェイト。しかし、息を一度大きく深呼吸した後、なのは達にあの時言いたかった自分の想いを言葉にして伝えた。

フェイト「私と、私と友達になって・・くれませんか」

なのは「・・・・・・・・フェイトちゃん」

フィア「・・・・・・・・フェイト」

二人は一瞬呆けた後、顔を見合わせるとフェイトに向かって微笑む。

なのは「私達はもう友達だよ。だって」

フィア「名前を呼んで”・・くれたから」

フェイト「・・・・・・・・名前???」

フェイトはフィアの言った言葉を尋ねるように呟く。

なのは「そう、名前」

フィア「簡単な事。けれど、とても大切な事。始めはそれだけで良いんだ」

名前を呼ぶ事。それは人との繋がり、絆（絆）が生まれる最初の言の葉。（この言の葉）

フェイト「・・・・・・・・なのは、フィア」

なのは「うん!!」

フェイト「なのは! ファア!!」

なのは「うん! うん!!!!」

フィア「おう!!」

それは周りから見れば、白い目で見られていそうな光景であるが、三人にとって・・・三人の事を知る者にとって心の底から温かくなる光景であった。

フェイト「なのは、ありがとう。諦めずに私に話し掛けてくれて」

なのは「うん!!」

なのはは涙を瞳に溜めフェイトの左手を自分の両手で包み込む。

フェイト「フィア、助けてくれてありがとう。後、あの時の料理、とっても美味しかったよ」

フィア「どういたしまして。気に入ったのならまた作ってやるよ」

フェイト「うん!」

フィアは気さくな笑顔をしながら、フェイトの右手を自身の両手でなのはと同じ様に包み込む。

フェイト「二人の手、暖かいね」

なのは「・・・ヒック・・・ウウ・・・グズ・フェイト・・・ちゃん」

フェイト「ありが・・・クツ・とう・・・グズ・・・なのは」

ファイア「・・・たくっ」

お互い抱き合い涙を流す二人。ファイアはそんな二人を抱き寄せ、両手でそれぞれの頭を撫でる。

フェイト「今は・・・今は離れ離れに・・・ヒック・なるけど、きっと・・・また逢える!!!」

なのは「グズ・・・っ・う・・・うん!!」

ファイア「ああ!!!約束だ!!!」

泣きながらもしっかりと二人の目を見て話すフェイト。なのはとファイアはその言葉に力強く頷いた。

クロノ「良いところ悪いのだが、そろそろ時間だ」

そこへクロノがそろそろ出航の時間だと告げに来た。空気の読めない奴だ。

フェイト「うん」

なのは「フェイトちゃん!!!」

なのは髪に結んでいたリボンを外し、フェイトに差し出す。

なのは「思い出に出来るの……こんなしかないけど……」

フェイト「じゃあ、私も……」

フェイトもなのはと同じ様に、髪に結んでいたリボンを外し差し出した。

フェイト「ありがとう……なのは」

なのは「うん……フェイトちゃん……」

お互いのリボンを交換し合い、手を繋ぐ。

フィア「それじゃあ、俺からは……」

そう言って、フィアは地面に置いてあった紙袋を、フェイトに渡す。

フィア「中身は和菓子が入っている。それと……ほい」

言葉を区切りポケットを探り、何かをフェイトの手の上に置いた。

フェイト「ペンダント??？」

フィア「また逢える……その約束の印しるしとして貰ってくれ」

フェイト「フィア、ありがとう!!」

フェイトはフィアから貰った、自身の瞳と同じ赤色の石が嵌め込ま

れたペンダントを握り締め、満面の笑顔で微笑んだ。

フィア「友達だから気にするなよ」

フェイト「うん……でも、何か違うんだ」

フィア「……え?？」

突然の言葉の意味がわからず、首を傾げるフィア。

フェイト「友達だけじゃない……フィアと一緒にいると友達とは違う温かさが胸に込み上げてくるんだ」

うまく言葉が言い表せないのか、フェイトは困った顔をする。

そんな不器用なフェイトに、フィアは苦笑しながらフェイトの頭を撫でた。

フィア「無理に言わなくてもいい……表現の仕方がわかったら言ってくれ」

フェイト「うん……」

なのは「（フェイトちゃん……負けないから）」

気持ち良さそうに目を細めるフェイト。完全に脈ありな表情なのだが、鈍感なフィアは気付く筈がない。

唯一フェイトのフィアに対する感情がわかっているのはは、視線をフェイトに向け恋敵が増えたことを悟った。

クロノ「じゃあ、行こうか」

フェイト「うん」

なのは「ありがとう、アルフさんも元気だね!!」

フィア「体に気をつけてな」

アルフ「ああ、いろいろありがとうね。なのは、フィア!!!」

クロノ「それじゃあ僕も」

なのは「クロノ君もまたね!」

クロノ「ああ!!!」

なのはとフィアはそれぞれに別れの挨拶を告げている。そんな中、フェイトは少し離れた場所で一人、空を見上げていた。

フェイト「(母さん、私は振り返りません。それは貴女の願いだけではなく、自分自身の意志で未来(前)へと歩んで行きます。だから、見ていて下さい……)」

???『フェイト、頑張ってね』

フェイト「えっ!?!?」

今はもういない母に、自身の決意を刻むフェイト。

すると耳元に誰かの優しい声が聞こえたような気がした。

フェイトは驚いて辺りを見回すが、そこにはフェイトの大好きな母は居る筈はなく、誰もいなかった。

フェイト「・・・・・・・・行ってきます。母さん」

そう小さな声で言った後、フェイトはなのは達の所に走り出した。

????『いってらっしゃい、フェイト』

再び優しい声がフェイトの耳元に聞こえたが、今度は驚きもせず、ただ顔に笑顔を浮かべた。

声は風に流れ、そして消える・・・・

その声の行方・・・・・・・・それは風しか知らない・・・・・・・・

次元空間内

Side {??.?.?}

時の庭園があつた空間の近くに、真っ黒な紳士服を着た男が浮いている。

??? 「やはり、虚数空間に飲み込んだだけでは抜け出されるか」

そう呟き、男はその場から転移する。

そして男が姿を表したのは、とある管理外世界の空の上。

??? 「しかし、奴は何故こんな世界に留まっているのだ?？」

男の足元に灰色の濁った魔法陣が展開される。

そして数秒間の沈黙の後、――

??? 「そうか、ソウか、そういうコトカ!!!! あれが在るからか!!!! からカラKARAKARA!!!!!!」

男は興奮し狂ったように笑い出した。

??? 「Aa・・・当たり前だつたなア。あれは全て世界を守るためにイるのだからRA!!! 世界を破壊するモノから!!!! からkAraカラaAaAa~~~~!!!!!!」

顔を手で抑え、尚も笑い続ける男。その目はとても輝いていた。それはまるで新しい玩具を見つけたかのように・・・

??? 「狂った魔導書・・・やはり、“人”は世界にとって害にしかない。いや、この全ての世界自体が偽り。ケさないと、破壊しないと!!!!!!」

“人”と言う言葉を強調し嫌悪する男。顔を見ると、先程とは違い酷く歪んでいる。

??? 「そして、主君の目指す新たな世界、エデン（楽園）を創るのだ!!!!!!」

??? 「・・・・この世界を破壊すれば、あれが狂って全ての世界を破壊してくれるかもしれない。あれにとってこの世界は他の世界より情が芽生えているみたいだしNaAaAaA!!!!!!」

??? 「そうと決まれば、あの魔導書を利用して・・・・・・」

男は少し思案した後、再び興奮し笑い出す。

??? 「――――、いや、時の旅人お。我が主君に盾突く愚か者のお前は世界を守るのかなぁーーーー!!!!!! からカラからカラKARAKARAKaRaからラーーーーー!!!!!!!!!!!!」

そう締め括ると、男はまた何処かへ転移した。

Side \?????
End

こうして一つの物語が終幕を迎えた

しかし、新たな物語が刻一刻と迫ってきている

本人達の知らない間に・・・・・・・・

第一部 終

後書きという名の反省会&今後についての報告・・・なの?.. (前書き)

ああ、スランプだーーーーー鬱状態だーーーーー!!!

後書きという名の反省会&今後についての報告・・・なの???

作者「やっと第一部が終わった〜!!」

ファイア「飽き性の作者がここまで続ける事が出来るとは・・・」

なのは「これも一重に読者のおかげなの!!」

フェイト「亀さん更新だったけどね」

作者「うぐっ!! 痛い所を突いてくるなあ」

ファイア「いや、事実だろう」

なのは「遅いし、駄文だし」

フェイト「一回死んだ方がいいんじゃないかな」

作者「レイジングハートとバルディッシュ握らないで!! マジでお願いだから!!!」

ファイア「まあまあ、二人共落ち着け。作者なんていつでも始末出来る。今は話を進行させないと読者達に失礼だろ」

なのは「それもそうだね♪」

フェイト「作者なんて雑魚だし♪」

作者「お前達、俺の精神を痛めつけて楽しいか？」

ファイア・なのは・フェイト「「うん。とっても♪♪」」

作者「はぁ・・・じゃあ、話を進めるぞ。今話のタイトルに書いてある通り第一部の反省会を行う。今から俺の事を先生と呼ぶように・・・何か質問は???」

ファイア「・・・」

作者「はい、ファイア君」

ファイア「作者、なんで学校の教室なんだ?」

作者「そんなの俺の気分が決まっているだろ。というか先生って呼べよ!!!」

ファイア「嫌」

作者「・・・」

なのは「はい!!!」

作者「・・・・・・・・なのは」

なのは「作者、ファイアお兄ちゃんの制服おかしいよ?」

ファイア「いやいやいや、これ男子の制服だよ!何もおかしくないよ!!」

作者「ふむ。なのはの言う通り、確かにおかしいな。ファイアの制服は“女子”のじゃないと・・・・・・・・」

ファイア「・・・・・・・・空が俺を呼んでいる!」

フェイト「ちょっとファイア。窓からでたら危ないよ!!」

なのは「フェイトちゃん!そのままファイアお兄ちゃんを抑えておいで!!」

ファイア「フェイト、離してくれ!!!!俺はもう女装は嫌なんだ!!」

作者「だが遅い。作者ご都合スキル発動“CT”（コスチューム・チェンジ）!!!!」

ファイア「作者てめえ!!!!!!」

作者「そして、俺逃走!!!!」

ファイア「ウガーーーー!!!!!!」

なのは「キャーーーー!!ファイアお兄ちゃんがキレちゃった!!」

フェイト「ファイア落ち着いて!!!!」

ただいま暴走中・・・・・・・・暫しお待ち申し上げます・・・

ファイア「スツキリ♪」

作者「なんで俺だけ・・・・・・・・なのはが最初に言ったのに」

ファイア「最終的に女装させたのはお前だ。文句を言うな!!!」

作者「・・・・・・・・フェ、フェイト。何か質問はないのか??」

フェイト「ん・・・・・・・・・・しいて言うなら、作者は地獄に堕ちろ??」

作者「何その理不尽な脅迫!それになんで疑問系!!!!?」

フェイト「冗談だよ。一割くらい♪」

作者「一割ってほとんどじゃん!!」

フィア「もっかい逝つとくか??」

作者「ごめんなさい!!」

なのは「まあ、いいの。早く進行させるの」

ニコッ

作者「（目が笑ってねえ）サー！イエス！！サー！！！！」

フィア「反省点か・・・まずはフラグの立ちっぱなしだな」

フェイト「旅人さんの正体とか、フィアの目的とか・・・」

なのは「その他諸々（もろもろ）全然回収できてないの」

作者「あゝ・・・あれは後々回収するかな??♪」

フィア「後は更新が遅すぎる。こんな更新ペースなら、亀の方がまだ早いぞ」

作者「だ、だって仕事が――」

フェイト「言い訳はダメだよ作者」

BD『Photon lancer fire』

作者「あぶエらぁー！ー！ー！ー！！」

フィア「また逝ったか……読者達、こんな更新の遅すぎで、駄文駄作者をよろしく頼む」

なのは「それから暫くの話は番外編になると思うの！！」

フェイト「後、フィアをお借りしたいという作家様、こんな小説をリクエストしたいという方、感想・コメントに書いて下さい。お願いします！！」

フィア「それじゃあ、これで……」

なのは・フェイト「またね！！」

作者「俺は放置かよ」

ガクッ……

.

番外編1 高町ファイアのとある一日???、なの!?(前書き)

作者「まず、読者の皆様申し訳ありません。新しいお話は投稿できませんでした」

ファイア「…………死ねばいいのに」

作者「ぐふっ!?…………じっ、次話につきましては今週の日曜日までには投稿したいと思っております」

ファイア「思っているだけだろう。このDDS（駄文駄目作者）が!?!」

作者「たワラばっ!!」

バタツとな

ファイア「はあ、このDDSは社会的にいらないのかもしれんな」

番外編1 高町フィアのとある一日???.?、なの!?

今回は高町フィアのある一日を書いていこうと思います。

では、どうぞ

朝

“朝ですよ♪5秒以内に布団から出ないと・・・・・・・・・・飛針が飛んでく————”

高町フィアの朝は桃子特製の目覚まし時計によって始まる。

目覚まし時計の声のパターンも数種類あり、このように極めて物騒なタイプもあるのだ。

殺る側としてはけっこう楽しいらしいのだが、殺られる側としては堪ったものではない。

なんせ5秒後にはこのように……………

ヒュン!!!!

フィア「ちよっ!!!!!! 危な……………!!!!!!」

パシッ!!

本当に飛針が飛んでくる時があるからだ。

フィア「いやっ、眉間はヤバイだろ!!!!!!」

飛針はフィアの眉間ギリギリの所でフィアの手によって掴まれていた。

冷や汗をかいている横では鼬モドキがすやすやと寝ているが気にしたら負けだろう。

飛針の飛んで来たドアの方向を見ると、何故か殺気が滲み出ている。

恭也「・・・・・・・・・・チッ!!」

ファイア「いつも思うけど、俺は恭兄の弟だよね??」

恭也「当たり前だろ。それより早く道場へ行くぞ!!」

ファイア「だから何で殺気出しているのさ!!」

恭也「・・・・・・・・・・さ・あ・な」

そう言って早々と立ち去る恭也。

最後の言葉には怒気と殺気の二つがこめられていた。

ファイア「・・・・・・・・なんでさ??」

どこぞの投影魔術使いの口癖を呟きながら、早くも死亡フラグを立てるファイアであった。

道場

ファイアが半刻ほど準備運動と鍛練をしていると恭也から声がかかった。

そして、ファイアは振り向いて今頃気付いた………

ファイア「（なんで鬼いちゃんモードになっているんだよ!!）」

今にもファイアに襲い掛かりそうなくらいの殺気を立てている恭也。

恭也「それじゃあ、準備運動もすんだと思うし————」

ファイアは自分の第六感を信じ、二刀の小太刀を持って外へと駆け出す。

恭也「————殺り合おうか」

そして本当の意味での鬼ごっこ（掴まったら最後、本気で斬られそうになるデスマッチ）が始まった。

いつもはブレーキ役の父　士郎や姉　美由希がいるのだが、今日に限って来るのが遅かった。

恭也「逃げるなー！！！！」

恭也が飛針を投げ、フィアが小太刀で器用に払いながら逃げる。

それはもう、猫と鼠（ト○とジェ○ー）がびつくりするぐらいの逃走劇である。

フィア「そんなに殺気出してたら誰だって逃げるわー!!!!」
「ってゆうか何でそんなに怒ってるのかわからないよ!!!!」

恭也 「それはお前がなのはに寂しい思いをさせたからだ――！！！！！！」

フィア「寂しい思いつて仕方ないだろー!! 車椅子が壊れて何もできなひはやてを放つておけるか!!!」

恭也「なのはの面倒とその子の面倒、どちらもこなすのが当たり前
だろー！ー！！！」

だからお前を見敵必殺（サーチ&デストロイ）！！！！」

「理不尽だ——！！！！！！！！！」

画して、極度のシスコンと少女? による鬼ごっこは昼過ぎまで続いた。

学校

昼休み

フィアは職員室に遅刻届けを提出し屋上へ向かった。

先生もいつもの事なので二つ返事で許してくれる。

屋上に行くといつものメンバー（アリサ・すずか・なのは）が話し掛けてきた。

なのは「あつ、ファイアお兄ちゃん」

すずか「本当だ。ファイアくん、今日遅かったけどどうしたの??」

アリサ「ってゆうか、あんた大丈夫??? 顔少し青いけど……」

するとファイアは体育座りで頭を抱えてプルプルと小動物のように震えながら……

ファイア「恭兄が……恭兄が……」

と呟くように言った。

その姿にキュンと来たらしく、頭を撫でる生徒達（アリサ・すずかなのは以外も）

ファイア「……神速使うなんて反則だろ……」

そして、撫でられているのに気が付かずまだ震えているファイアがいたそう……

放課後

アリサ「そういえば、ファイは何で塾に行かないの??？」

帰り道、アリサが突然思い出したかのように疑問を言ってきた。

ファイ「俺に勉強が必要だと思うのか??」

なのは「ファイお兄ちゃん、疑問を質問で返しても意味ないよ・・・」

なのはが冷静にツツコミを入れる。

ファイ「そうだなあ・・・」

・・・必要ないからだ!!!!」

アリサ「あれだけ溜めといてその答え!?! ちょっと、どういう事なの??! なのは」

フィアに聞くのが間違えだと判断したアリサは、なのはに答えを尋ねる。

なのは「そのままの意味だよ。フィアお兄ちゃんは、塾に行かなくてもいいぐらい賢いんだよ♪」

フィア「全教科90点以上だからな」

すずか「す、凄い……」

アリサ「はあっ! 何それ、どうして教えてくれなかったの!?!」

フィアの襟を掴み首を揺さぶるアリサ。

フィア「き、聞かれ なかった から」

アリサ「ムガーーーー!?!」

こうして、鬼ごっこ第2ラウンドが始まった。

翠屋

フィアは三人と別れた後、喫茶店の手伝いをするため翠屋へと足を進めた。

翠屋に着くと桃子、士郎、恭也、そして6、7人程のお客さんがフィアを出迎えてくれた。

その中で一番目立っている恭也のもとへ向かう。

フィア「あれ?? 恭兄、珍しいね。執事服なんて・・・」

恭也「少し気分を入れ換えたくてな。」

フィア「・・・・・・・・・・・・・・・・本音は???」

恭也「・・・・・・・・・・・・・・・・母さんに着せられ――――
ーヒッ!!!!!!?」

桃子「いらない事を言わない。いい???」

いつの間にか隣に桃子が、悪魔の笑みをして立っていた。

恭也はそれを見てガタガタ震えている。

フィア「(・・・・・・・・・・アーメン)」

フィアは心の中で、可哀相な兄に十字を切っておいた。

フィア「・・・・・・・・・・母さん」

エプロンを取りに行こうとしたら桃子が前に立ち塞がってきた。

桃子「なぁに♪♪」

フィア「なんで手にメイド服持ってるの??」

桃子「それはね・・・・・・・・・・あなたに着せるため
よ♪♪」

フィア「ははははは♪」

桃子「ふふふふふ♪♪」

フィア「そうダ!! 京都に行コウ♪」

クルリと回れ右をし、恭也との鬼ごっこより速いスピードで逃走を計る。

桃子「させないわよ!!!! FM3の皆さん、やっちゃって下さい!!」

FM3の皆さん「「おう!!!」」

桃子の声を合図に老若男女問わず、たくさんの人が翠屋に入ってくる。

フィア「何でこんなに人が待ち伏せしてるの!!!それにFM3って何!?!」

あまりの人の多さに若干だが混乱するフィア。

桃子「FM3・・・正式名称　フィア君を　もっと　もっと　愛でる　ファンクラブよ♪活動内容はフィアの着せ替え用の服の発注、及びその姿をネットで配信。今では会員の数も一万人を突破!!!」

ちなみに、創設者は意外と身近な人だったりする。

フィア「そんな真実、聞きたくなかった・・・」

大分落ち込みながらも着実に出入口に進んでいるフィア。

本当に小学生なのかと疑いたくなるくらいの身のこなしで、捕まえようとしてくるFM3の会員を次々と避けて行く。

フィア「(今日こそは逃げ切るんだ。今日こそは・・・)　カハッ!!!?」

出入口まで後少しというところで、後頭部に強い衝撃がはしり意識を刈り取られた。

薄れゆく意識の中で最後に見たのは、済まなそうな顔をした父に姿だった……

夕刻

今翠屋は客がいっぱいで大賑わいである。

フィア「……いらっしやいませ御主人様。ご注文は何になさいます???」

毎日、それなりにはお客さんは入っているのだがフィアが手伝いをしている日と、していない日では客足が全然違う。

そして、フィアはとても不機嫌な顔で仕事をしていた。

F M 3 会員「特製シュークリームとアイスコーヒー・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・後、ファイア君をお持ち帰りで♪」

ファイア「申し訳ありませんが、私は商品ではございませわたくしん。――
――」

ファイア「――ご注文は特製シュークリームとアイスコーヒーで
よろしいですか??」

F M 3 会員「スマイルお願いします!!!!」

どこぞのハンバーガーショップでも恥ずかしくて言えない事を言っ
てのける愚客。

ファイア「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・では、少々お待ち下さい」

ニコッ

ファイアは内心イライラしながらも、爽やかな微笑をして厨房の方へ
と向かった。

その微笑を見たF M 3 会員達は・・・

F M 3 「「萌え／／／」」

テーブルに突っ伏して妄想世界へトリップしていた・・・・・・・・

ファイア「(・・・・・・・・・・・・・・・・・・早く家に帰りたい)」

心底そう思うファイアであった。

夜

ファイア「ふうぅ・・・・・・・・ちかれた」

浴槽に浸かり蕩けた声を出す。

ユーノ「お疲れ様でした。」

その横には洗面器にお湯を張り、その中でくつろいでいる鼯モドキ・
・もといフェレット――ユーノが労いの言葉をかけてくれる。

ファイア「・・・お前だけだよ。俺の苦勞を分かってくれるのは・・・」

そう言ってユーノを抱きしめた。

ユーノ「ちよっ！ちよっと！？恥ずかしいよ」

ファイア「いいじゃん、男同士なんだし」

ユーノ「（男に見えないから言ってるんだけどな・・・）」

心の中でそう思っているのだが、口に出すとファイアが確実に落ち込むので、言うに言えないユーノであった。

ファイアの部屋

ファイア「じゃあ、今日は疲れたし寝るか！！！」

ユーノ「そうだね」

明かりを消して布団を被ると一気に疲労感と眠気が襲ってきて夢の中へとダイブした。

数時間後

フィアの部屋のドアが開き誰かが中へと侵入した。

いつもなら瞬時に起きるフィアなのだが、今日は疲労が極限まで溜まったのだろう。全く起きる気配がない・・・

人影はフィアとユーノの前まで近き、そして・・・

カシャ

シャッター音が鳴り響いた。

なのは「フィアお兄ちゃんの寝顔写真・・・激レアだよ♪よし、後でサイトに貼らないと・・・」

こうして知らず知らずの内にファンを増やしていくフィアであった。

[illegible]

終

番外編2 心に抱いた想い、なの・・・（前書き）

作者「投稿したぜ！！！！」

ファイア「おいDDS。期限は日曜日までだっただろう。何故遅くな
った?？」

作者「・・・寝落ちしちゃった♪」

ファイア「消え失せろ」

作者「あべフォア！！！！」

作者が一人、地獄にログインしました♪

ファイア「だいぶ遅くなったが、少し重いお話だ。」

ファイア「魔法少女リリカルなのは　　時の旅人　　始まるぞ」

.

番外編2 心に抱いた想い、なの・・・

注…このお話はなのは視点のお話です。他の人の視点はありません。

それでは

始まり始まり

朝

Side なのは

♪♪♪♪♪

なのは「ん・ん・ん」

私はいつもより遅い時間にセットした携帯のアラームを止め、布団から這い出した。

なのは「・・・今日は何をしようかな?」

今日は日曜日で学校はお休み。何をしようかと考えていると、

なのは「・・・あっ」

私の視界に一枚の写真が目に入りました。私は机に歩み寄るとそつと写真を手にとる。そこには満面の笑みを浮かべる私と一人の少年が映っています。私は写真を見て、知らず知らずの内に微笑んでいました。

その写真は私にとって、とても大切なモノ

ファイアお兄ちゃんとの出会い

思い出の始まりの物語

私が初めて心に抱いた想いの物語

私がファイアお兄ちゃんに出会ったのは一年半前。

とある病院の一室にお父さん達に連れて来られた時のことでした。

その時、病院に行く理由をお父さんに聞いても、「僕とファイアツセの命の恩人に会い行くんだよ」という言葉と、悲しい笑みを返してくれるだけで何も話してはくれません。

そして目的の病室に着いたのか、お父さんは扉をノックする。すると扉の向こう側から「どうぞ」という小さく声が聞こえました。

お父さんが扉を開け中に入り私達も室内に入ります。少し広い真っ白な病室にはベッドしかありません。

そしてそこには全身に包帯を巻いた私と同じ年くらいの子供がベッドに横たわっていました。

理由を事前に聞いていたお母さん達は泣いていました。普段から感情を出さないお兄ちゃんですえ涙を流していました。

私もお父さんの話を聞いて、気がついたら涙を流していました。それと同時に少しの嫉妬と少しの“一”を覚えました。

その時の私はその感情が何なのか分かりませんでした。が今ならわかります。私は私の家族に思ってもらえるフィアお兄ちゃんに嫉妬していたのです。

その後、フィアお兄ちゃんは高町家の養子となり、私は何かと家族に構ってもらえるフィアお兄ちゃんを敵視していました。

学校でもすぐに友達ができ生活に慣れていくフィアお兄ちゃんに、嫉妬がどんどん膨らんでいきます。

家でも学校でも敵視する私を、フィアお兄ちゃんは気にかけてくれていました。が、私は頑な（かたく）に距離を置いて会話をしません。

そして、私はあの時抱いた想いは全て嫉妬なのだと思いつけていました。

そんな関係が暫く続き

最初の出会いから7ヶ月が過ぎたある日のこと

ファイア「なのはちゃん。ちょっとお話・・・いいかな?」

なのは「・・・・・・・・」

私がテーブルでオレンジジュースを飲んでいると、2階から下りてきたファイアお兄ちゃんが話し掛けてきました。

ファイア「俺、なのはちゃんに何か悪い事したかな?」

なのは「・・・・・・・・しない」

黙っている私にファイアお兄ちゃんは単刀直入に質問をします。

・・・・・・・・何も、

フィア「じゃあ、どうしていつも俺を睨みつけてくるの??」

なのは「睨みつけてなんかない!!!」

・・・・・・何も私の気持ちなんか知らないくせに!!

フィア「俺、なのはちゃんと仲良くなりたんだ。家族だしな・・・」

なのは「・・・・・・も」

フィアお兄ちゃんの「家族だしね」と言う言葉に、私が理性によって押し止めていた感情が一気に溢れ出しました。

なのは「・・・何も私の気持ちなんか知らないくせに、家族なんて言葉を私に言わないでっ!!」

自分でも信じられないくらい、冷たい言葉が口が発せられる。

なのは「後からやってきたのに、お母さん達に構ってもらえて――」

“この先の言葉を言ってはダメ!!”。そう私の中の理性がそう告げている。だが、今まで押し止めていた感情が、急なブレーキを掛けられる筈はなく、

なのは「本当の……本当の家族じゃないのに!!!」

私はフィアお兄ちゃんにとっても酷い言葉を言った。

パン!!!

その瞬間、甲高い音と共に私の頬に痛みがはしった。

私は頬を押さえながら前を向くと、お母さんが立っていて、その顔は今までに見たことがないくらい怒った表情をしていました。

桃子「なのは! 貴女なんて言葉を言うの!!!」

お母さんの言葉に私は言った言葉を頭の中で副読する。

フィア「違うんだ。俺が変になのはちゃんを勘ぐったから……
……それに、俺が“本当の家族じゃな——”」

パン!!!

フィアお兄ちゃんが最後まで言い終わる前に、先程より甲高い音が私の耳に響く。見るとフィアお兄ちゃんがお母さんに叩かれて（はたかれて）いました。

なのは「……あ、ああ」

“ 本当の家族じゃない ”

自分が言った言葉に、私の頭に上った血が一時冷え、顔が青ざめていくのがわかる。

気がついたら私は家を飛び出し無我夢中で走っていた。お母さんが後ろで叫ぶ声が聞こえたけど、そんなことも構わず、ただひたすら走った。

そして、息切れを起こした私は辺りを見回す。そこは私のよく知る公園――海鳴臨海公園でした。

私は近くのベンチに腰を下ろし体育座りをして俯く。

なのは「・・・・・・・・・・・・・・・・何であんなこと言ったんだろう」いくら嫉妬していたからといってあんな言葉、私は言わない。

じゃあ、どうして???

考えれば考える程、頭の中で気持ちぐるぐると渦巻き、もやもやしてくる。

すぐに友達をつくったから???

・・・・・・・・違う、そんなわけではない。

自分が家族に構ってもらえないから???

・・・・・・・・何か違うような気がした。冷静になっている今ならわか

る。

じゃあ、なんで???

どうして?

どうして私はあんなに嫉妬していたの??

なのは「・・・・・・・・ぐず・・・・・・・・わからない・・・・・・・・うう・・・・・・・・わ
からないよお」

自分の気持ちがわからないことの不安と、酷い言葉を言ってしまった後悔で涙が出てきた。

誰か、誰か助けてよ

??? 「はあ、はあ・・・・・・・・やっど・・・・・・・・・・・・・・・・見つけた」

なのは「えっ!?!」

突然の声に顔を上げると、フィアお兄ちゃんが立っていました。その体は汗だけで、私を探している途中こけたのか、足には擦り傷が

できていました。

なのは「・・・・・・・・」

ファイア「・・・・・・・・」

私もファイアお兄ちゃんも何も言いだせないまま少しの時間が過ぎる。

ファイア「・・・なのはちゃん、ゴメン!!」

先に言葉を発したのはファイアお兄ちゃんだった。

ファイア「なのはちゃんが悩んでいたのに、自分の思い込みで“家族だしな”なんて言って・・・・・・・・」

そう言って寂しそうな顔をするファイアお兄ちゃん。

違う。私はこんな言葉をファイアお兄ちゃんに、言ってほしかったんじゃない。

ファイアお兄ちゃんに嫉妬していた筈なのに、そんな気持ちになる。

私は・・・

ファイア「本当の家族なんかじゃないのにね・・・・・・・・」

なのは「違う・・・・・・・・違うの!!!」

気がついたらフィアお兄ちゃんの言葉を否定していた。

そして、病院で出会った時の事を思いだす。

あの時、私が抱いた想いは嫉妬だけだった？？

違う。あの時、私が最も強く抱いたのは・・・・・・・・・・

フィア「何が違うの？？」

なのは「・・・・・・・・私が、私がフィアお兄ちゃんに構ってほしかっただけなの！！」

・・・・・・・・・・ああ、そうか。私はフィアお兄ちゃんに“恋”をしたんだ。

そう自覚した時、私の口から素直な言葉が出ていた。

誰にでも優しいフィアお兄ちゃんに、病室で初めて見た自分をかわいいと言ってくれたフィアお兄ちゃんに・・・・・・・・

だから、私を見てほしかった。私を構ってほしかった。

でも、フィアお兄ちゃんは誰にでも優しいから、少し構ってもらえなかったから他の人達に嫉妬して、フィアに当たって・・・・・・・・私、最低だ。

だから、まずは大好きな人に謝らないと。

なのは「フィアお兄ちゃん、ごめんなさい！私、あんな酷い言葉を言って……………」

なのは「私、お父さんやお母さん、その他の人達に嫉妬していたんだ……………私よりもお話しているみんなが羨ましくて……………」

なのは「ごめんなさい。悪いのは全部、私なの！フィアお兄ちゃんは悪くないの！！」

私はフィアお兄ちゃんに謝罪と自分の気持ちを伝えた。

フィア「……………そうか。なのはちゃん、ゴメンね。構ってあげれなくて……………ありがとう。俺に気持ちを伝えてくれて」

フィアお兄ちゃんはそう言う私を抱きしめ頭を撫でてくれる。

なのは「フィアお兄ちゃん。こんな私だけど、嫌いにならないでくれる?？」

フィア「もちろん！だってなのはちゃんは俺の大切な人だもの！！」

私の問いにフィアお兄ちゃんは、私のほしかった言葉で答えてくれた。

なのは「ありがとう、フィアお兄ちゃん」

フィア「こちらこそありがとう、なのはちゃん」

なのは「なのは」

ファイア「んんっ」

なのは「なのはって呼んで」

ファイア「わかった。……。ありがとう、なのは」

なのは「うん!!!!」

その後、家に帰った私とファイアお兄ちゃんはお父さん達一人一人に説教をされました。

そして、その次の日

私はファイアお兄ちゃんと写真を撮りました。

何故、写真を撮ったのか……それは私の一つ出会ったから

初めて抱いた“恋”の出会いだったから……

コンコン

ファイ「なのは、起きていますか?」

なのは「起きていますが、どうしたの?」ファイお兄ちゃん

ファイ「いや、なのはが暇なら、何処かに一緒に遊びに行こうかなって思ってた」

なのは「そうなの! ちょっと待って!」今すぐ準備するから!

「!!」

フィア「慌てて転ぶなよ。じゃあ、10分後にまた来るから」

なのは「はい」

さあ、今日はどんな事しようかな♪♪

終

番外編3 もう・・・ゴールしてもいいよね?? (色んな意味で)・・・なの！

作者「m () m」

フィア「いきなり顔文字かよ」

作者「理由はお仕事が忙しくて・・・・・・・・」

フィア「言い訳するな。このダボが!!!!」

作者「ひいひい。今話はネタとノリで執筆しました。キャラ崩壊・ノリで全速前進OKだ!!!!という方のみお読み下さい」

フィア「後、番外編はこれで一旦終了だ。次回からA・S編突入だ」

作者「こんなだらだらな小説ですが、読んで下さるのなら嬉しいです。それでは・・・・・・・・」

番外編3 もう・・・ゴールしてもいいよね???(色んな意味で)・・・なの！

今回はフィア視点です。では、では、どうぞ〜♪

とある一日の朝

空がまだ薄暗い時間

“ラジオ体操第一．．．．．♪♪♪♪♪
は背伸びの運ど————”

パシッ

目覚まし時計から爽やかなお兄さんの声が発せられ俺は目を覚ました。

そしてすぐに目覚まし時計を止める。別にストレッチ代わりにラジオ体操をしてもよいのだが、俺は別の事に頭を捻っていた。

フィア「目覚まし時計の音が普通過ぎる！！！！！」

“目覚まし音がラジオ体操でも異常だよ！！”と言う声と“久しぶりのフィア視点だな”と言う声が聞こえてきたような気がしたが今は無視する。

いつもは桃子（母さん）の愛情（という名の嫌がらせに近い言葉）や、熱苦しい筋肉野郎の声ばかり。

なのに今日は爽やか。疑いたくなる程に爽やか。

ファイ「嫌な予感しかしねえ……」

深い溜め息をする俺。

こうして俺の一日が始まるのであった。

ファイ・なのは「行ってきます!!」

士郎・桃子「「いってらっしゃい」」

朝の鍛練・朝食は何事もなく終了し、俺となのはは家を出た。

ファイ「ん???なのは、その袋に何が入っているんだ???」

なのは「アリサちゃんとすずかちゃんに頼まれてた服だよ」

キュピピーン!!

俺はなのはが薄茶色の紙袋を手で持っているのに気付き問い掛ける。

すると、なのはは普通の言葉を返してくる。普通の言葉なのだが、俺の第六感（アホ毛）がみょんみょんと警報を鳴らしていた。

ファイア「・・・・・・・・ちよつと聞くが、俺に着せる為じゃないかな？」

なのは「もちろんだよ♪♪」

・・・・・・・・・・・・・・・・

ファイア「家に置いて来なさい」

なのは「えゝ、でも」

ファイア「置いて来い」

なのは「むうゝ」

ファイア「O・K E」

なのは「・・・・・・・・わかったの」

洩々、家へと戻るなのは。それと同時に俺を非難する声がたくさん聞こえたような・・・・・・・・何だ、俺が悪いのか？？女装させるのを辞めさせようとしている俺が悪いのか？？

悪いと思った奴は豆腐の角に頭をぶつけてもう一度考え直せ！！！！

・・・・・・・・・・しかし何故だろう？？悪寒が消えない。

なのは「どうしたの？？ファイアお兄ちゃん」

ファイア「ん？？・・・・・・・・ああ、何でもない。早く行くぞ」

いつの間にかなのはが隣にいて少し驚いたが返事を返し学校へと向かった。

なのはの諦めが早かったことと、小さくガッツポーズをしていたのに気付かずに・・・・・・・・

学校

ファイア「はあ・・・・・・・・・・」

さっきから第六感が学校から逃げろと告げている。別に逃げ（サボっ）てもよいのだが、最近サボり過ぎていたので後で母さんに何をやらされるか……

ぶるぶる

ファイア「……………寒気が」

それにクラスの生徒達の様子がおかしい。みんな俺をチラチラと見ている。

被害妄想?? 馬鹿言うな。気配がするんだよ。

とにかく第六感に従って逃げ（サボ）るとしよう。

??? 「ファイア、どうしたの?? 今日のアンタ挙動不審よ」

生徒達の中で特に機嫌が良い三人組の一人、ツンデレが現れた。他の二人は言わなくてもわかるだろう。

俺は…………

コマンド

戦う

↓からかう

弄る

逃げる

道具

ボディランゲージ

ファイア「お前は随分とご機嫌だな、ツンデ……アリサ♪」

アリサ「ツンデレって言おうとしたでしょ!!!」

ファイア「何を言っているんだアリサ!! アリサからツンデレを取ったら何が残っているんだよ!!!」

ほら、他の生徒達も頷いているではないか。

アリサ「……」

ファイア「ま、待て!!!! 早まるな!!! O・H A・N A・S H I（肉体言語ではない方の）しようではないか」

アリサ「……馬鹿ああー!!!」

メキヨツ!!!!

ファイア「コークスクリューー!!!」

矢吹 ジョ○、お前もこんな鋭いパンチをくらっていたんだな。

薄れ逝く意識の中、俺はそんなことを考えていた。

美術室

立て、立つんだ!! ジーーーーーーーーー!!

ファイア「おっちゃんーん!! ってここは美術室!？」

○ヨーを蛸殴りにする夢を見ていた俺は、おっちゃんの叫ぶ声で意識を取り戻した。まあ、夢の中で叫ばれたのだから。

??? 「やっとお目覚め?？ファイア君」

ファイア「くっ、その声は……!!」

聞き覚えのある声に身構えようとしたが動かない。どうやらロープで縛られているみたいだ。

ファイア「どうしてここにいるんだよ! 忍さん!!」

忍「いや、すずかからファイア君の女装ショーがあるって聞いてね」

ファイア「みんな何で俺の女装が好きなの!! っというか忍さんには恭兄がいるだろう。恭兄に女装させればいいじゃないか!!」

忍「あっ、それはいい考えね」

よしっ。これでシスコンを囿にして忍さんにロープを外してもらって、逃走すればまだ間に合う!!

ファイア「ナイスアイデアですね。じゃあ、ロープを外し――」

なのは「それは駄目なの♪ファイアお兄ちゃんにはこれを着てもらうの♪」

……人生、うまくいかないことばかりだなあ

ファイア「アハハ、なのはさん。いつの間にそこにいたのですか? 何故、その紙袋が此処にあるのですかあ!」

しっかりしろ、俺!!! 語尾が震えているぞ。

なのは「お母さんに持って来てもらったんだよ♪」

その言葉を聞いた瞬間、

ウー　　Wooo!!

“エマージェンシー、エマージェンシー。退避セヨ、退避セヨ!!
繰り返す、エマージェンシー、エマージェンシー。いますぐ此処から退避セヨ、退避セヨ!!!”

アホ毛が“みよんみよん”と動き、脳内で警告音が何度も発せられている………だが、退避不可能。なのはの話を聞くことしか出来ない。

なのは「ほら、このゴスロリメイド服。ファイアお兄ちゃんに着てもらう為にみんな(FM3の皆さん)と一生懸命作ったの♪♪」

ファイア「とりあえずツツコミ所が満載だが無視するとして………
・アリサ、助けてくれ!!」

なのはの隣にいるツンデレに助力を頼む俺。

アリサ「ふふふ、まずツインテールにして………白ニーソックスもいいわね」

ブルータス、お前もか!!!!!!!!!! ならば、

ファイア「す、すずか!! 先生、みんな!!!!!!!!!!」

すずか「猫耳がいいかな♪それとも虎耳・・・・・・・・あつ、獅子耳もいいかも♪♪♪」

生徒達「「「メイ・ド!! ME・I・DO!!!!!!!!!!」」」

美術の先生「芸術はメイドでビューティフォーワンダフォー
!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

・・・・・・・・・・・・・・・・コイツら狂ってやがる
(色んな意味で)。

ファイア「・・・俺は無力だ」

その後、ソプラノボイスの叫び声が学校に響き渡ったとき・・・・・・・・

しばらく待ってね♪

美術の先生「キタぞ、キタぞおーーーーー!! ほとぼしる熱いパ
トスがあーーーーー!!」

ファイア「もう・・ゴールしてもいいよね?」

なのは「まだまだ♪」

アリサ「まだ、私達のターンは終わってないのよ」

すずか「えへへ、駄目だよ♪ファイアちゃん」

ファイア「もう止めて! 俺のライフポイント(精神的)はとっくにマ
イナス方向だよ!!!」

生徒「」「創作意欲が泉のように沸き上がるうーーーーー!!」

ファイア「キャあああーーーーー!!」

・・・・・・・・・・もう暫く待つてね♪

キーンコーンカーンコーン
カーンコーンキーンコーン

放課後

ファイ「うう、結局回避出来なかったし、野郎共も寄ってたかって・
・・・・・・・・・・」

ん、あの後学校で何があったかだと。聞かないでくれ、死にたくない。
る。

バスで帰宅しようとした俺だが、なのは達の獲物を凝視しているよ
うな目を察知し逃走した（ツインタール＋セーラー服＋白ニーソツ
クス姿で）

なんで着替えなかったのかって?? そんな事していたら逃げられな
いと悟ったからだ。

だけど今になって後悔している。此処（家の前）までくるのに中年の無精髭を生やしたおじさんに、「はあ、はあ、お嬢ちゃん。ちょっと道を教えてくれない?？」とか言われて強引に連れて××かれそうになるし、中学生の服を着た男子に「一万と二千年前から愛してました!結婚を前提にお付き合いを!」って公衆の面前で言われるし・・・まあ、どちらもボコッておいたが精神力がガリガリと削られた。

だが、やっとオアシス（家）に帰れる。そして、癒しを・・・癒しを摂取せねば!!!!

ファイア「ただいま!!」

桃子「あら、お帰りなさい。着せ替え楽しかった?」

よし、落ち着くんだ俺。迂闊な言葉は俺をメイド（冥土）に誘う（いざなう）言葉になってしまいうんだ。だが、良い言葉が浮かばず、

ファイア「地獄を見たよ」

普通に言葉を返した。俺は生き残れるのか!!!!

桃子「そう、それはよかったわね」

よし!!!!

桃子「じゃあ、私が地獄も天国に思えるように調き――教育してあげるわね♪♪」

駄目だった――（泣）

ファイア「・・・・・・・・もう、死のう」

桃子「冗談よ」

ダウト!!!!（嘘だ!!!!）と言いたかったが、相手はこの家の魔王。言える筈がない。見逃してもらっただけでも僥倖だ。

ファイア「えーと・・・・・・・・確かここら辺に・・・・・・・・」

俺専用の戸棚の一番奥に俺の癒し（茶工房の玉露＋抹茶最中^{もなか}）が、

ファイア「ない!?!?!」

嘘だ嘘だ嘘だ!!!!何故無いんだ!!!!!!

ファイア「母さん、此処に入れてあった玉露と抹茶最中知らない!!!!」

桃子「知らないけど・・・・・・・・そういえば恭也が戸棚を開けてたわね」

その瞬間、俺は疾風^{かぜ}になった。かつてない程（ギャグ的な意味で）の速いスピードで腐れシスコンが居るであろう道場に向かう。（もちろん着替えてから）

時間にして5分も経っていないだろう。俺は道場の引き戸をスライドさせる。

そして俺が見たのは、

腐れシスコン「ふうー、苦かった」

美由希「あつ、フィーちゃん、おかえり」

無残にも食い尽くされた癒し（玉露＋抹茶最中）の姿だった。

美由希「フィーちゃん、抹茶最中一つ貰ったよ。美味しかった♪ありがとう」

腐れシスコン「フィア、この抹茶最中苦すぎるぞ。正直ここまで苦いと身体に毒なような気がするぞ」

ブウチッ!!!!!!!!!!

この腐れシスコン。人の癒しを奪っておいて、お礼でも謝罪でもなく忠告だと……………

フィア「……………美由姉、木刀持っているかな?？」

美由希「小太刀と飛針なら♪……………」

フィア「…十分だよ♪♪」

今なら父さんだって殺れる気がするよ。覚悟しろよ、このミスターロリペドフィンが!!!!!!!!!!

腐れシスコン改めミスターロリペドフィン♪「おい、何怒っているんだ?? 尋常じゃない程強い殺気を感じるんだが??」

フィア「自分で考えろ、ミスターロリペドフィン。そして死ぬ」

美由希「恭也の鈍感・・・・・・・・普通なら気付くよ」

ミスターロリペドフィン「ちょっ!! 危なっ! 飛　　針・・・投げ　　ぎゃああああーーーーー!!!!!!」

その日、俺は癒し（玉露＋抹茶最中）を失い、得無き勝利を手にしたのだった・・・・・・・・

ああ、疲れた・・・・・・・・

終

人物・魔法紹介

〈人物〉

高町 ファイア

年齢

9歳

好きなもの・こと

家族・料理・鍛練・他人弄り・お茶・抹茶の類いの物

嫌い（苦手）なもの・こと

- ・人を見下す奴
- ・命を大事にしない奴
- ・弱い者イジメをする奴
- ・桃子（美由希・なのは）による着せ替え
- ・鬼いちちゃん（恭也）によるマジな戦闘

魔力の質

SSS

魔力量

D+

総合

A

レアスキル

障壁破壊者
バリアブレイカー

備考

高町士郎がファイアッセ護衛時に、士郎とファイアッセを爆発から庇い重傷を負う。後頭部を強打した影響で自分の過去に関する記憶のみ喪失。その後、高町家の養子となる。容姿は黒髪の長髪で目は空色、整った顔をしているので初対面の人には少女と間違えられる。なのはとは一応同じ年齢であるが、なのははファイアの事をファイアお兄ちゃんと呼ぶ。

今の所、使用できる魔法は身体強化と部分障壁、設置型魔法陣による足場の補助の三つである。

しかし、御神真刀流 小太刀二刀術を一応会得しているので近接戦闘は恐らくだがフェイトより強い。

時の旅人

〈二つ名〉救世主・守護者・幻想の守り手^{メシア}

数多^{あまた}の世界を救いし英雄。あらゆる時代において存在する者で、特徴は全身白い布で覆っているという所のみ。未だに素性がわかっていない。

紳士服を着た男

第一部最終話の後半に登場した男。時の旅人とは違いこちらは黒ずくめ。酷く時の旅人を敵視している。目的は現在の世界を破壊し、世界を創り変えることらしい。

〈魔法〉

M i g r a t o r y b i r d 〈渡り鳥〉

転移魔法の一種。旅人だけが使用出来る。指定した人を座標軸を設定せずに行きたい場所へと転移させる魔法。但し、指定した人が旅人の見える場所にいない場合は、相手に詠唱をしてもらわないと転移させることが出来ない。

D h i m e n j o n g a t e 〈次元ゲート〉

非公開中

A i a s へアイアス（投槍を防ぎし英雄の円盾）∨

非公開中

蒼と白、銀を基調とした魔導書

非公開中

定魂の儀式

空間に漂う魂を肉体に定着させる儀式。発動させる為には定着させる肉体と現界している魂（一般的に言われる霊魂）、膨大な量の魔力が必要になる。

完全秩序の庭へコスモスガーデン

あらゆる理をほぼ完全に制御する空間。この空間は見る人にとって
思い出深い場所になっている。発動させる為には多量の魔力と少量
の奇跡が必要。

Prologue 2 (前書き)

作者「とりあえずプロローグを投稿しました♪」

ファイア「何が♪だ。さっさと本編を執筆しろよ」

作者「うるせー、仕事が忙しいんだよ」

ファイア「何だその態度は。反抗期か?? それとも喧嘩を売っているのか??」

作者「どっちにも決まってるだろ!!!」

ファイア「死ね」

作者「みぎゅ!!!!!!」

ファイア「まあ、作者はこんなだらけな奴だから気長に見てやってくれ」

ファイア「では、A・S編始まるぞ」

P r o l o g u e 2

それは彼女達にとって、とても幸せで穏やかな日々でした

その幸せな日々を守る為に彼女達は再び悲しき宿命を背負います

彼女達が戦ったのは一つの願い（我が儘）のため

手に入れたのは優しき人

忘れたのは大切なナニか

彼女達は守りきれるのでしょいか

—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—
—

少年は探し求めました

決められた運命を断ち切る力を

ただ愚直に

ただがむしやらに

彼女達と少年、互いは奇しくも同じことを想い、そして願いました

果たして彼女達と少年の願いは叶うのでしょうか

それはまだ誰にもわかりません

魔法少女リリカルなのはA's 　　＼時の旅人＼

始まります

幕間 新なる物語の幕開け・・・なの（前書き）

作者「・・・・・・・・読者の皆様お久しぶりです。そして・・・・・・・・」

作者「約4ヶ月放置していてすみませんでした!!!!」

ファイア「性懲りもなく放置とは・・・この駄目作者、余程死に急ぎたいようだな」

なのは「一度全力全壊でO☆H A★N A☆S H I♪しようよ駄目作者」

フェイト「前世からやり直した方がいいんじゃないかな」

作者「ひ、ひいいいーーーー!!と、逃そーーーー」

ファイア「逃がすかよ」

なのは「死、あるのみなの♪」

フェイト「GOOD BY☆」

作者「ぱらぎゃーーーーー！」

ピー バラバラ バキューン チーン ピーポーピーポー

フィア「さて読者の方々、長らくお待たせしました」

なのは「駄目作者のことだからまた投稿は亀だと思うけど」

フェイト「読んでもらえたら幸いです」

フィア「では、魔法少女リリカルなのはA's くの時の旅人」

フィア・なのは・フェイト「「始まるぞ／の／よ」」

幕間 新なる物語の幕開け・・・なの

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

•

•

•

•

•

•

•

•

•

•

•

•

•

•

•

•

•

•

•

•

•

•

•

•

•

•

•

遥か遠き昔

まだ世界という概念がなく、真っ白な空間しかかった時代

数多の神々や天使がいました

ある日、4人の最高神・最上位天使であるゼウス、ラグナ、ルシフェル、そしてミカエルが言います

新たな概念、新たな生命を創ろうと

4人の最高神・最上位天使達はそれぞれの光り輝く剣で世界を支える樹——ユグドラシルを創りました

そして他の神々・天使達はそれぞれが必要だと想うモノを創ります

その世界をより豊かにするために

こうして世界は始まり迎えました

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

『物語
“世界創世”より一部記載』

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・

6月3日

海鳴市 中丘町

午後9時を少し過ぎた頃、とある一軒の家の中でカラカラと車椅子を押す音が響く。

この家の主である車椅子の少女――八神 はやては電話の留守録の再生ボタンを押す。すると、メッセージが登録されていたのか音声が生再生される。

石田『もしもし、海鳴大学病院の石田です。えっと……明日ははやてちゃんのお誕生日よね？？明日の検査の後、お食事でもどうかなって思ってお電話しました。明日病院に来る前にでも返事くれたら嬉しいな。よろしくね』

ピーという音が鳴り、留守録に登録されていたメッセージが終わりを示した。

はやて「……………」

はやては気落ちした表情をして車椅子にもたれ掛かる。少しの時間
そうしていると玄関のインターホンが鳴り響いた。

“こんな時間誰やろうか??”・・・そう思いながらも、待たせて
は悪いと思い玄関に急ぐはやて。

はやて「はいはいどちら様ですか??」

はやてがお決まりの台詞を言いながら玄関の扉を開けるとそこには、

ファイア「よっ」

彼女の友達で在り、家族と言ってくれた人物がいた。

はやて「フィ、ファイア君!! どうしたん、こんな夜遅くに??」

ファイア「いやゝ、明日はやての誕生日だっただろ?? だから無理言
って外出許可をもらったんだ」

はやて「そんなんええのに」

ファイア「俺がやりたくてやったんだ。・・・はやては迷惑だ
ったか??」

はやて「ううん、迷惑やあらへん。むしろ・・・」

ファイア「むしろ??」

はやて「凄く嬉しい!!」

そう言うてはやては目にうつすらと涙を溜めながら満面の笑みを浮かべた。

フィア「そうか。じゃあ明日は盛大に祝うぞ!!」

はやて「本当に?」

フィア「ああ!!……………つという訳で今晚泊めてくれ」

はやて「どういう訳かは少しわからんけど、最初から泊まるつもりやったんやろ???」

フィア「もちろんSA!!」

はやて「……………はあ、しょうがないな」フィア君は

フィア「溜め息つくなよ。幸せが逃げるぞ」

はやて「誰のせいやと思っとなるんや!!」

フィア「えっと……………俺の家の近くの橋の下に住む、ホームレス兼情報屋の田中さん??」

はやて「ホントに誰やその人!」

フィア「知らないのか!!? 田中さんといえば——」

そんなたわいのない漫才? みたいな会話をしながらはやて家に入っていく二人。

そして今宵、
新たな物語の幕が静かに開いた

7月5日

管理外世界〈◇◇◇〉

全体が白いガスで覆われた名も無きこの世界に一つの影ができる。

??? 「ふう………（奴らもしつこいな）」

影は近くにあった岩に腰かけると溜め息をはいた。

??? 「（まあ、あいつ達にとって私は邪魔者でしかないのだから当然といえば当然か……）」

??? 「（世界を……いや人間を憎みを殺そうとする奴らに
対して、世界を……全て慈しみ守る私。相反する存在）」

??? 『King, A Enemy is on its way.
（キング、敵が接近しています）』

影が物思いに耽っていると、女性の機械的な声が辺りに響く。

??? 「くっ！！（もう見つけられたか……奇跡だってまだ足りないし、多くの救う者達がいるっていうのに邪魔ばかりしやがって
！！）」

??? 『………——、ランダムに転移するぞ』

??? 『All right, My king. （了解です、キン

グ」

そんなやり取りをした後、影はその場所から消えた。

そしてその数分後、

名も無き世界に黒き異形の者達が現れた。ある者は背中に翼と鱗があり、またある者は牛の頭と人間の体をしている。

「――！！！！（ちっ、また逃げられたか！！！！）」

「――（まあそうカリカリするな。簡単に捕まえられる奴ではないと我等の主も言っておったであろう）」

「――（はぁ、これだから脳筋野郎は駄目なんだ）」

「――！（何だと！）」

「――（事実であろう）」

異形の者達は人間には発声できない音で話をし始める。その声は仮に人間が聞いたのなら頭を抱え、立っていることさえ困難になる不協和音のようであった。

「???」「———、———!!———（うるさいぞ、お前達!! さっさと追跡するぞ）」

リーダーであろう異形の者が声を発すると言いつ争っていた異形の者達は口を閉ざす。それと同時に大規模な鈍色にびいろの魔法陣が異形の者達の足元に展開された。

「???」「———（次元世界に接続）」

「???」「———（及び異世界・並行世界への接続を開始）」

「???」「———“———・———”（検索対象“———
ティア———”）」

「???」「………」

「???」「………」（検索結果。該当無し）

「???」「………」（該当無し………
………世界への存在の隠蔽。逃げられたか）」

淡々と告げられる情報を分析し回答を導き出すリーダーと思わしき異形の者。

??? 「――、――。――!! (仕方ない、地道に探しましょう。行くぞお前達!!)」

??? 「――!! (ヤー／応／アイサー!!)」

より大きな不協和音が響き異形の者達を飲み込むようにどす黒い竜巻が発生した。

竜巻はどんどん広がっていき、この管理外世界を覆っていく。

数刻後、竜巻が消えるとそこに管理外世界は無く、ただ多量の闇が漂っているだけであった。

7月10日

管理外世界へノア

時空管理局が所在すら確認をしていない木と山、そして湖に包まれた世界。

ここに人という存在は無く、その他の多種多様な生物が様々な形で進化を遂げている。

そんな世界の最深部。

洞窟の奥の奥に石造りの神秘的な建物があった。

その建物の中からカツコツと何者かの足音が響く。

足音の主はこの建物の構造がわかっているであろう。

足音が一定のリズムを響かせているのがその証拠だ。

カツコツという音は数十分の間続いた後、建物の出入口付近で止み一人の少女？が姿を現した。

????「この神殿もハズレか……………全く、あいつは何処に“鎌”を隠したんだ」

辺りを見回した後、溜め息と妙に男っぽい口調で愚痴を漏らす少女
??。

??? 「これ以上家を空けるとなのはと美由姉、母さんに何をやら
され・・・・・・・・・・女装の可能性が高いよね」

勝手に自問自答をしている少女?・・・・・・・・・・もとい高町　ファイア。そ
の光景を思い出して少し涙目になってきている。

ファイア「まあ、うだうだと考えていても仕方ない。帰るとしますか」

そう自分に言いきかせファイアはこの世界から消えた。

その数日後、拷問（という名の撮影会）によって真っ白に燃え尽き
たファイアが目撃されたとかなんとか・・・・・・・・・・
・・・・（恭也・士郎談）

しかし彼が何故あの辺境の世界にいたのか

彼のいう“鎌”とはどういうモノなのか

答えは彼にしかまだわからない

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6973h/>

魔法少女リリカルなのは ～時の旅人～

2010年11月21日10時38分発行